

靈界物語 第八一卷 天祥地瑞 申の巻

出口王仁三郎

凡例

【】……底本で傍点が振られている文字列

(例) 【ヒ】は火なり

「ス」を現す記號(丸にホチ)は「」に置き換えた。その他、文字コード(ユニコード)に無い文字は「ニ」に置き換えた。

底本

『靈界物語 第八十一卷』天聲社

1980(昭和55)年05月05日 五版發行

總説に圖表が二枚あるがテキストでは再現できないので省略した。

底本をもとに若干の編纂を加えてある。詳細は次のウェブサイト内に掲載してある。

『王仁三郎ドット・ジエイピー』(オニド)

<http://onido.onisavulo.jp/>

現代では差別的表現と見なされる箇所もあるが修正はせず底本通りにした。
図表などのレイアウトは完全に再現できるわけではないので適宜変更した。
編纂・データ作成：飯塚弘明（オニド主宰）

2009年11月20日修正

）
）
）
）
）
）
）
）
）
）
）

目次

總説そうせつ 天地開闢てんちかいびやくの極元きよくげん

第一篇 伊佐子いさごの島しま

第一章 イドム戦せん（二〇二八）

第二章 月光山つきみつやま（二〇二九）

第三章 月見の池つきみ いけ〔二〇三〇〕

第四章 遷座式せんざしき〔二〇三一〕

第五章 心の楔こころ みそぎ〔二〇三二〕

第六章 月見の宴つきみ えん〔二〇三三〕

第二篇 イドムの嵐おらし

第七章 月音つきおとし〔二〇三四〕

第八章 人魚の勝利にんぎよ しよつり〔二〇三五〕

第九章 維新の叫びあしん さけ〔二〇三六〕

第一〇章 復古運動ふくこつんどう〔二〇三七〕

第三篇 木田山城きたやまじやう

第一章	五月闇 <small>さつきやみ</small> 〔二〇三八〕
第二章	木田山嵐 <small>きたやまおろし</small> 〔二〇三九〕
第三章	思 <small>おも</small> ひの掛川 <small>かけがは</small> 〔二〇四〇〕
第四章	鷺 <small>さぎ</small> と烏 <small>からす</small> 〔二〇四一〕
第五章	厚 <small>こう</small> 顔 <small>が</small> 無 <small>ん</small> 恥 <small>むち</small> 〔二〇四二〕

第四篇 猛獸思想まうじゅうしきょう

第一章	龜神 <small>きしん</small> の救 <small>すく</small> ひ〔二〇四三〕
第七章	再生再會 <small>さいせいさいくわい</small> 〔二〇四四〕
第八章	蝾螈 <small>いもり</small> の精 <small>せい</small> 〔二〇四五〕
第九章	惡魔 <small>あくま</small> の滅亡 <small>めつぱう</small> 〔二〇四六〕
第二章	悔悟 <small>くわいご</small> の花 <small>はな</small> 〔二〇四七〕

〔 〕

總説 天地開闢の極元

至大浩々漂々恆々として撒霧たるの時に於て、その機約の兩極端に對照力を起して、恆々湛々たるが故に、その至大の兩極端に對照力を保ちて、至大悉く兩々相對照して其の機威の中間を極微點の連珠絲が掛け繋ぎ、比々隣々ヒシト充實極まり居る也。然れども氣形透明體なるが故に人の眼には見えざるなり。見えねども此の連珠絲が靈氣を保ちて初めて至大天球を造る時に、對照力を以て至大の外面を全く張り詰りて球と成りし也。蓋し極元の至大浩々漠々漂々恆々として、花形を如して凹凸として呼吸を保てり。然り而して其の平輪分の所に於て對照力を起して其の外面を對照力にて氷張り、全く張り詰めて至大天球となりたる也。故に其の凸所に居て局珠外と成りて鰭となりたる極微點は、張り詰めたる其の珠を塗りて競ひて球内に入らむと欲し、東岸部、西岸部に門を得て局中に押入らむと欲し、自然の勢力を得て押入る。ここに於て其の初めの對照力に氷張り詰められて、既に球中に固有する所の極微點の連珠絲の氣を中央に押す、その押され

たる氣は北極、南極に向ひて走り去る。その走り去り出たる氣は亦復球の外面を塗りて、東岸部、西岸部に來りて亦復又球中に入りつつ、端なく循環運行しつつ永世無窮に、尾なく果なく終りなく本末もなくつららぎ居る也。

< 圖表省略 >

蓋しこれ以上に説く所の條々の眞説の如きは、釋迦も孔子も敢て以て知らざる所の極典説なるが故に、譬喩、寓言、謎かけ談の如き不正曖昧なる妄談に非ず。復世間竝なる想像談に非ず。極乎正明なる極典説なり。故に一句一言皆悉く正眞至大天球の組織、紋理、大造化機を捉みて、明細審密に證徴したる極典也。大智慧を照して熟覽を遂ぐる時は、一切世界無比類なる極典矣と稱ふ事を感得すべし。故に謹讀の輩は其の目利を明らかにして一切の迷ひを一掃すべし。愚蒙にして目利を誤る時は譬喩、寓言、謎かけ想像談を以て、契經也、哲學也などと思ひ、愚案説、比例説、愚考説を陳述して哲學也と信じ居る也。乞ふ、目利を正明に極むる事を冀望する也。

蓋し老子は此の至大天球の眞を明言する事不能、玄之復玄衆妙の門と言ふ也。

門といふ者は表半球の形を謎にかけたる也。若し明言して天球云々と言ふ時は、種々の質問起る也。諸に答ふる事不能也故克々思ひやるべし。釋迦は無邊法界といふ、不思議界といふ。實に思ひ議る事不能者也。孔子は容と言ひ復一ツと言ふ、皆謎談のみ也。誠に以て不届千萬なれども、明言すれば種々の質問起るを恐れて、譬喩、寓言、謎談等を以て世を籠絡し、神器（＜圖表省略＞）されば最第一なる靈魂精神は、至大天球一名は至大靈魂球にして、一個人の神經は此の靈魂球中の一條脈なる即ち玉の緒と言ふ物也と明言して、その明細を説明する事不能也。頑々たる謎談を作りて愚拜し居る也。故に六識七識八識九識十識の事は、目錄にも足らぬ譬喩談を演説したるのみ。實明したる契經とては唯の一卷も無き也。天親菩薩が七識以上は逆も叶はぬ、依つて唯六識を説くといひて唯識論を置きたれども、妄々たる譬喩談にて目錄にも足らぬなり。古今無雙の大學明信なる天親にして既に妄々なる事如此也。況やその他の派下の愚僧をや。嗚呼靈魂心性の事を最大一に説く僧侶にして、その心性は至大天球中の眞靈即ち是也と明言して、その明細造化を行ひ居る始末柄を初め、億萬劫々間の年度を

生死往來して居る一切の事を、明細に教示する事不能、妄々たる謎をかけて迷ひ居る達磨は、實に憫然極まる者也。

故に現今行はれある所の道統の本元は何なりと詰問すれば、敢て一言も答ふる者無し。況や其の本元が寄て來る極元の事は、夢にも思ひ居らざる淺ましき餓鬼僧のみ也。

ササ有りと知る人あらば、「道統」の本元寄而來るの極元は是也と一句たりとも説明して見よ。釋迦も達磨も其の道統の本元因て來るの極元を不知故に、直接明言に道法を説明する事不能也。故に譬喩、寓言、謎談のみにして、彌勒如來の當來を待ちて教を樂び奉る也。故に六識七識八識九識十識の柄を少くも説く事不能也。故に識の事を記したる經は一卷だも無し。天親菩薩の唯識論の妄々たる者が極々珍書の位を占め居る實に憫然の至也。速に彌勒の出現を乞ひ奉れ、否彌勒を請ぜよ。

第一篇 伊佐子の島

第一章 イドム戦（二〇二八）

高照山の西南に當る萬里の海上に、相當面積を有する島國あり、之を伊佐子の島といふ。此の島の中央に大山脈東西に横たはり、之を大榮山脈といふ。大榮山脈以南をイドムの國といひ、以北をサールの國といふ。この島は萬里ヶ海の島々の中にも、最も古く成出し島にして、國津神等は數多棲息し、イドム、サールの兩國は互に其の領域を占領せむと、數十年に亘つて戰爭止む時なく、數多の國津神等は塗炭の苦を嘗め、救世神の降臨を待つこと恰も大旱の雲霓を待つ之感ありける。

大榮山の中腹に大なる湖水ありて、之を眞珠湖といふ。眞珠湖は約二十メートルの山腹に展開したる南北十里、東西二十里の大湖水なるが、不思議にも海底よ

り涌出せるものごとく、湖水皆濃厚なる鹽味を含み、水上を徒渉するも僅に膝を没するに過ぎざる湖水なりけり。この眞珠湖には人面魚身の人魚數多住居し、湖邊の汀邊に國津神同様茅を以て屋根を葺きたる家居を構へ、その生活の様も殆ど國津神に酷似せり。

この湖は大榮山の南側にあるを以て無論イドムの國の領域なりけるが、イドムの國津神は人魚を捕へ來りて、色々と苦しめ泣かしめる時、人魚は悲しみて涙を瀧の如く流しけるに、不思議や其の涙は悉く眞珠の玉となりて、その美しさ言はむ方なし。故にイドムの國津神等は之を唯一の寶として頭に飾り、胸に飾り、その美を誇る。又之を内服する時は身體忽ち光を放ち、且美しき子の生るるを以て、國津神は競ひて之を得む事を欲し、色々の計略を以て人魚を奪ひ、涙を採る事を唯一の業務となしける。故にイドムの國津神は何れも美男美女のみにして、醜女は終に跡を斷つに至れるなり。之に反して大榮山以北のサールの國津神は何れも肌黒く、髪はちぢれ、背は低く且醜男醜女のみなりける。

茲にサールの國王エールスは、如何にもして此の眞珠湖を占領し種族の改良を

計らむとし、大軍隊を率ゐて大榮山を南に越え、眞珠湖に向つて進軍を始めける。
之を聞くよりイドムの王アヅミは、左守、右守を始めとし、軍師の神々を大廣間に呼び集め、サール國の軍隊を殲滅すべく軍議を凝らす事となりける。

イドム王の名はアヅミといふ。王妃の名をムラジといふ。左守をナーマン、右守をターマンといふ。軍師をシウランといひ、アヅミ、ムラジの間に生れたる娘をチンリウといひ、侍女をアララギといふ。イドム王のアヅミは軍神を集め、サール國征伐の軍議を凝らさむとして歌ふ。

イドムの國は昔より

主の大神の御水火にて

現はれ出でし美し國

春夏秋冬順序よく

五風十雨は永久に

國のことごと露して

至治太平を樂しみし
世にも目出度きイドム國
眞珠の湖の幸はひに
國津神等は悉く
優れて清く美しく
靈魂身體諸共に
長壽を保ち神徳を
忝けなみて來りしが
日は行き月は流れつつ
星の光も移ろひて
年月經にし其間に
大榮山の眞北なる
サールの國の國王は
此善き國を怨みつつ

眞珠しんじゆの湖うみを占領せんりやうし

人魚にんぎよの寶たからを奪うばはむと

數多あまたの軍勢ぐんせい引具ひきぐして

襲おそひ來きたるぞ忌々ゆゆしけれ

吾等われらは元もとより戰たたかひを

好むこのにあらねど斯かくならば

この神國かみくにを守まもるため

軍いくさの神かみを呼よび集あつめ

敵てきの惡事あくじを打うち懲こらし

千里せんりの外そとに追おひやりて

昔むかしのままの安國やすくにと

治め守おさらむ吾心わがこころ

左守さもり、右守うもりを始はじめとし

軍師ぐんしも諸々もろもろ國津神くにつかみも

吾^{わが}宣^のり言^{ごと}をよ^く守^{まも}り
一^{ひと}日^ひも早^{はや}く敵^{てき}陣^{ぢん}に
向^{むか}つて軍^{いくさ}を進^{すす}むべし
それにつ^{いて}は色^{いろ}々^{いろ}の
手^て段^{だて}もあ^{れば}國^{くに}津^{つか}神^{かみ}
互^{たがひ}に力^{ちから}を協^{あは}せつ^つ
心^{こころ}を一^{ひと}つに相^{あひ}固^{かた}め
サ^さー^ール^るに向^{むか}つて戦^{たたか}へよ
サ^さー^ール^るの國^{くに}の國^{こく}王^{わう}を
始^{はじ}め諸^{もろ}々^{もろ}軍^{いくさ}等^{たち}
残^{のこ}らず征^き伐^ため平^{たい}げて
國^{くに}の災^{わざは}ひ除^{のぞ}けよや
國^{くに}の災^{わざは}ひ除^{のぞ}くべし
あ^あ惟^{かむ}神^な々^{がら}々^{かむ}

吾言靈に力あれ
吾言靈に光あれよ

軍師シウランは答へて歌ふ。

吾王の仰せ畏し曲津神を

雲の彼方に退けやらむ

エールスは眞珠の湖を奪はむと

年ごろ心を碎き居にけり

一度は戦の仰せあるものと

腕を鍛へて待ち居たりけり

我國は優等人種サール國は

劣等人種怖ぢるに足らず

吾王よ心安かれ今日よりは

軍を集めて敵を拂はむ
□

アヅミ王は歌ふ。

□ シウランの言葉に吾は力得て

早くも勝ちたる心地するなり

エールスが軍は數多あるとて

撓まず屈せず進んで亡ぼさむ

エールスの率ゆる軍を打破り

イドムの國の平和を來さむ

シウランの吾は武勇を頼みとし

勝利の便りを楽しみ待たむ
□

王妃のムラジ姫は歌ふ。

エールスは道辨へぬ代物よ

心を配り進めシウラン

我國を奪はむとして攻め寄する

エールス王は獸に似たり

エールスの獸の輩悉く

言向け和せ生命取らずに

玉の緒の生命は神の御賜もの

むざむざ殺すべきにあらずや

アヅミ王は歌ふ。

道知らぬ輩言靈宣るとても

何の要なし亡ぼすに如かず

弱き心持ちてはこれの戦ひに

如何いかで勝かち得えむ飽あくまで戦たたかへ
ためらひの心こころ起おこらば曲津神まががみに
忽たちまち生命いのちと國くにを奪とられむ〚

左守さもりのナーマンは歌うたふ。

昔むかしよりわが領域りやうめきに忍しのび入いり

人魚にんぎよを奪うばふサールの醜國しこくに

サール國王こくわう亡ほろぼさざれば我國わがくには

終つひに亡ほろびむ戦たたかふべき時とき

さりながら敵てきは猛たけしき獅子王ししわうの

性さがもち居をれば容易よういに亡ほろびず

計畫けいかくを完全くわんぜんにして進すすまずば

敵てきの謀計たくみの罨わなに陥おちいらむ

眞珠湖しんじゆこの人魚にんぎよの寶奪たかひつばはむと

永ながき年とし月つき窺かがへる曲津まがよ

あくまでも心こころを配くばり武ぶを練ねりて

寄よせ來くる敵てきを討うち滅ほろさむら

右守うもりのターマンは歌うたふ。

此この時ときをはずせば何時いつの日ひ戰たたかはむ

敵てきは大榮山おほさかやまを越こえたり

第一だいいちの吾われの弱點よわみは敵軍てきぐんに

大榮山おほさかやまを越こえられしにあり

斯かくならば短兵急たんぺいきふに攻せめ寄よせて

雌雄しゆうを決けつせむためらふ事ことなく

日頃武ひごろぶを練ねり鍛きたへしも今日けふの日ひの

備へなりけりいざや進まむ
後れなば敵に敗れをとるならむ
眞珠の湖は敵の影のみ
強敵は高地に陣取りわが軍は
下より攻むる不利の地
斯くならば生命を捨てて戦はむ
イドムの國の一大事なり

アヅミ王は歌ふ。

司等の心一つに定まりぬ
いざや進まむ敵の在處へ

娘チンリウは歌う。

☐ 父母ちちははをはじ始めつかさ司たましひの魂の

固かたまる上うへは何なにをか恐おそれむ

吾われも亦またをんな女ななれども國くにの爲ため

敵てき亡ほろぶまで戰たたかはむかな
☐

アヅミ王わうは歌うたふ。

☐ 勇いさましきチンリウ姫ひめの心こころかな

吾わが勇氣ゆうき又また次第しだいに加くははる
☐

チンリウの侍女じぢよアララギは歌うたふ。

☐ 吾わが王きみに願ねがひ奉まつるも姫ひめ君きみの

軍いくさの御み供とも許ゆるさせ給たまへ

姫君の御身を守り敵軍に

向つて吾は死すまで戦はむ

斯く評議一決し、國內に急使を派し數多の軍神を城内に集め、一齊に敵軍に向つて進み戦ふ事とはなりぬ。此の時遅く彼時早く、エールス王は數多の軍を指揮し、連錢葦毛の馬に跨り、五色の采配を打振り打振り城下近く攻め寄せ來る。アツミ王は烈火の如く憤り、軍師シウランと共に弓を満月の如く引き絞り射向ひけれども、敵は名に負ふ剽悍決死の士のみにて、一日一夜の戦ひにて脆くもアツミ王の軍隊は敗戦し、南方の月光山を指して逃走せり。この戦ひに娘のチンリウ、アララギを始め數多の軍士は、或は討たれ或は捕虜となり、繩目の恥辱を受ける事とはなりぬ。茲にエールス王はイドムの城を占領し、數多の軍隊を止めて天下を睥睨する事とはなりぬ。アツミ王は百里南方の月光山に立籠り此處に城壁を構へ、イドム國の再興を策しける。

エールス王は戦勝の祝賀の宴をイドム城内に開き、數多の從神を集めて心地よ

げに歌ふ。

大榮山おほさかやまを乗り越えて

寶たからの國くにと聞きこえたる

イドムの國くにに押渡り

アヅミの王わうの軍勢ぐんぜいを

木端微塵こつぱみぢんと踏ふみ碎くだき

イドムの城しろを占領せんりやうし

いよいよサルわがくにの我國は

面積めんせき以前いぜんに倍加ばいかして

國くにの榮さかえは豊榮とよさかのほ昇る

天津日あまつひの如進ごとすすむべし

此この凱旋がいせんの賑にぎはひは

神かみの賜たまひし酒盛さかもりぞ

ああ惟神々々かむながらかむながら

吾言靈に力あれわがことたま ちから

吾言靈に幸あれやわがことたま さち

エールス王の左守チクターは歌ふ。わう さもり うた

㌶
吾王の御稜威の御光現はれてわがきみ み いづ みひかりあら

イドムの國を握らせ給ひぬく に き たま

この國はサールの國に比ぶればく に く に くら

美し御國ぞ瑞穂の國ぞうま みく に みづほ く に

これよりはイドムの國の國津神をく に く に つかみ

サールの國に移し住ませむく に うつ す

みのり悪しきサールの國の國津神はあ く に く に つかみ

イドムの國に安く住ませむく に やす す

眞珠湖は全く吾手に入りけり

今日より善き子生れ來らむ

天地の神の恵みと吾王の

嚴の力に國廣まれり

吾王の賜ひし貴の杯を

歡び受けむ國津神等と

右守のナリスは歌ふ。

漸くに王の望みは届きけり

イドムの城の手に入りし今日

苦しめし我國津神も今日よりは

歡ぎ榮えむイドムに移りて

果てしなき此の廣き國を手に入れて

臨のぞませ給たまふ王きみはいさまし

今け日ひの日ひの勝しょう利りは軍ぐん師しエーマンの

計け畫いく全くく宜よろしきを得えて

エーマンの軍ぐん師しの謀はひ無なかりせば

斯かく容た易やすくは勝かち得えざるなむ

エールス王わうは歌うたふ。

ナーリスの言こと葉ばの如ごとくエーマンの

力ちからに吾われ等らの軍いくさは勝かてり

エーマンは歌うたふ。

天あめ地つちの恵めぐみに戦いくさは勝かちにけり

吾の力の預かり知るべき
この上は兜の緒をば締め直し
敵の再来に備へ奉らむ

茲にエールスは完全にイドム城を占領し、凱歌を擧げて暫し此處に住むこととはなりにける。而してサールの王城を北城と稱へ、イドム城を南城と稱しける。
(昭和九・八・四 舊六・二四 於伊豆別院 森良仁謹録)

第二章 月光山(二〇二九)

イドム城は敵の襲來に破れて、敗走したるアヅミ王初め妃ムラジ、左守ナーマン、右守ターマン及び軍師シウラン其の他討ち洩らされし軍人等は遠く南に逃れ、月光山の嶮所を扼し、ここに城壁を造り、南端の國原を治めつつ再擧の時を待つ

事こととせり。

王わうの一人娘ひとりむすめチンリウ及びおよ侍女じぢよのアララギの兩人りやうにんを初はじめ數多あまたの勇士ゆうしは、敵てきの捕虜ほりよとなりて遠とほく大榮山おほさかやまを北きたに越こえ、サールの都みやこの城中じやうちゆうの牢獄らうごくに繋つながれ、悲かなしき月日つきひを送おくる事こととはなりぬ。

アヅミ王わうは最愛さいあいの娘むすめチンリウの姿すがたなきに歎なげきの餘あまり述懐じゆつくわいを歌うたふ。

㊦ 遠とほき神代かみよの昔むかしより

平和へいわの風かぜに包つつまれて

安やすく樂たのしく暮くらしたる

イドムの國くには果敢はかなくも

サールの國くにのエールスが

軍いくさのために奪うばはれて

今いまははかなき南方なんぽうの

月光山つきみつやまに退しりぞきて

再學さいぎよを計はかるくるしさよ
數多あまたの味方みかたは敵軍てきぐんに
討うち滅ほろほされわが軍ぐんは
もろくも敗やぶれを取りとりにけり
かかる歎なげきのその中なかに
我世わがよを繼つぐべき愛娘まなむすめ
チンリウ姫ひめの姿すがたなく
たづぬる由よしも泣なくばかり
或あるひは敵てきに討うたれしか
思おもへば思おもへば悲かなしもよ
天地てんちの神かみの御惠みめぐみに
姫ひめの行方ゆくへを夢ゆめになと
知らせ給たまへと祈いのれども
何なんのしるしも荒風あらかぜの

山野を吹きゆく音ばかり

ああ惟神々々

再び軍を調べて

祖先の賜ひしドム城

再びわが手に取りもどし

姫の在處を探らむと

千々に心を碎くなり

思へば思へば味氣なや

月光山は清くとも

川の流れば清しとも

何の楽しみなきままに

月日を暮す果敢なさよ

月は御空に輝けど

星は黄金とまたたけど

吾^{わが}目^めはくもりて涙^{なみだ}のみ

救^{すく}はせ給^{たま}へ天津神^{あまつかみ}

國津御神^{くにつみかみ}の御前^{おんまへ}に

はかなき我^{わが}世^よに再生^{さいせい}を

偏^{ひとへ}に祈^{いの}り奉^{たてまつ}る。

月光^{つきみつ}の山^{やま}に漸^{やうや}く逃^{のが}れ來^きて

再^{さい}擧^{きよ}を計^{はか}る吾^{われ}は苦^{くる}しも

いとこやのチンリウ姫^{ひめ}は今^{いま}いづこ

生命^{いのち}失^しせしか心^{こころ}もとなや

時^{とき}を得^えてイドムの城^{しろ}を取^とり返^{かへ}し

祖先^{そせん}の功^{いさを}を輝^{かがや}かしみむ

エールスの猛^{たけ}き軍^{いくさ}に破^{やぶ}られて

もろくも吾は逃げ來つるかも

わが軍そなへ破れて敵軍に

イドムの城は奪はれにける

如何にしてもイドムの城を取り返し

國津神等を安く住ませむ

エールスの惡逆無道に國津神は

朝な夕なを歎くなるべし

國津神は親を奪はれ子をとられ

珍の寶も奪はれにけむ

諸の果實ゆたかに實るなる

イドムの國はあらされにける

國津神の祖と生れにし吾にして

朝夕歎く淺ましさかな

ムラジ姫は歌ふ。

☐ 安らけきイドムの國は上も下も

驕りし罪に斯くは滅びしか

天地の恵になれて晝夜の

恵み忘れし報いなるらむ

今日よりは天地の神をおそれみて

厚く敬ひ仕へ奉らな

神々の厚き恵を忘れたる

イドムの國は斯くも滅びぬ

月光の山に天地の神々を

齋き奉りて世を開くべし

上も下も曇り果てたる國故に

神の譴責に滅びしならむ

主スの神かみの守まもりなれば國津神くにつかみの
力ちからに國くにの治をさまるべしやは
上うへも下したも神かみの惠めぐみを悟さとりつつ
心こころ清きよめて務つとめはげまな

シウランの軍いくさのきみも心こころせよ

人ひとの力ちからに戦いくさは勝かてず

國津神くにつかみの名なは稱たたふれど人ひとの身みよ

人ひとの力ちからは限かぎりあるなり

限かぎりなき神かみの力ちからを身みに受うけて

のぞまむ道みちに仇神あだがみはなし

仇神あだがみは隙すきを窺うかがひ攻せめ來きたり

イドムの國くにを亂みだしけるかな

シウランは歌うたふ。

畏しやムラジの姫の御言宣り

吾は宜よとをのくののみなる

今となりて王の御國をあやまりし

吾は世に立つ顔もなし

吾王に不明の罪を詫び奉り

軍師の司を返し申さむ

今日よりは凡人となりて國の爲

王の御爲に誠を捧げむ

大軍を抱へながらも敵軍に

敗れし思へば吾顔立たじ

願はくば軍師の司を召し上げて

凡人の群におとさせ給へ

アツミ王は歌ふ。

☐ 勝敗は時の運なり汝のみか

吾の罪なり心安かれ

君なくばこれの御國は治まらじ

心の駒を立て直すべし

エールスは戦のそなへを足はして

再びここに押し寄するらむ

押し寄する敵の鋒先くじきつつ

月光山を永久にささへむ

歎くとも及ばざりけり天地の

神を祈りて敵に備へむ

シウランは歌ふ。

☐ 吾王の御言畏み吾は只

嬉し涙うれなみだにくるるのみなり

今日けふよりは神かみの力ちからを力ちからとし

王きみの恵めぐみにむくい奉まつらむ

吾王わがきみよ御心みこころ安やすくおはしませ

敵てきを千里せんりに吾退われしりぞけむ

この廣ひろき伊佐子いさごの島しまの隅々すみずみまで

王きみの領有うしはぐ御國みくにとなさむ

ムラジ姫ひめは歌うたふ。

蘇よみがへる心地こころちするかもシウランの

軍師ぐんしの言葉ことば力ちからと頼たのみて

千載せんざいの恨うらみはらすとイドム城じやうに

軍いくみを向むけて奪つばひ返かへさむ

さりながら二年三年の備へして
エールス王を征討め奉れよ

シウランは歌ふ。

□
ありがたしムラジの姫の御言葉
吾は必ず報い奉らむ

さりながらチンリウ姫の御行方

ためらはずして探し求めむ

軍人の中にも雄々しき武士を

選びてサールに遣はさむかな

アヅミ王は歌ふ。

☐ チンリウ姫ひめの在處あrikaを吾われはさぐりたし

一日ひとひも早くはや軍いくさを遣つかはせ

三柱みはしらの武士ぶしを遣つかはしひそやかに

姫ひめの在處あrikaを求めもと來きたれよ

チンリウの姫ひめの行方ゆくへの判わかるまで

吾われ戦たたかひを起おこさじと思おもふ

チンリウの侍女じぢよのアララギ諸もろとも共に

生命いのち保たもつか心こころもとなし

アララギは賢女さかしめなればチンリウ姫ひめを

かばひていづくにか潜ひそみあるらむ

アララギの誠まことを一つひとのたよりとし

吾われは日夜にちやをなくさめて居をり』

左守さもりのナーマンは歌うたふ。

㊦ 吾王の心思へばかなしもよ

吾身の力足はなくして

王いますイドムの城を奪はれて

吾は生きたる心地せざるも

歎くともせむすべなければ村肝の

心を堅めて再擧を計らむ

月光の山に仕へて夜もすがら

涙にくるるは姫の御事

亡びたる國を再び生かさむと

心は闇にさまよひにける』

右守のターマンは歌ふ。

㊦ 恥かしや吾は右守を務めつつ

イドムの國を奪はれしとは

如何にしても元津御國を取り返し

王の御稜威を照らさでおくべき

國津神の驕りの罪の報い來て

斯くもかなしき憂目にあひしか

火と水と土を尊み畏みて

神を敬ひ世に生きむかも

火と水をおろそかにせし報いにて

吾住む地も奪はれにけり

斯くならばせむすべもなし村肝の

心堅めて再舉せむのみ

アツミ王は歌ふ。

☐ 今日よりは月光山の頂に

主の大神の宮居造らむ

主の神の恵になれて今までは

朝夕べを務めせざりき

朝夕を神の御前に額づきて

國の榮を祈り奉らむ

國津神を呼び集へ來よ主の神の

御舎急ぎ造り奉ると

左守の神は歌ふ。

☐ 吾王の教畏み今日よりは

主の大神の御舎仕へむ

これより左守の神は附近の國津神に命令を降しけるにぞ、國津神は大いに喜び、
老も若きも男も女も月光山に集り來り、大峽小峽の良材を本打ち伐り末打ち斷ち
て柱梁等集め、ここにいよいよ主の大神の宮殿を造營の運びとはなりける。
左守の神は先づ地鎮祭を行ひ、石搗の歌をうたふ。

☐ 月光山の聖場に

アヅミの王の御言もて

主の大神の御舍を

大宮柱太知りて

高天原に千木高く

仕へ奉ると今ここに

國津神等集りて

いと勇ましく地かための

珍の祭りを務むなり

あなた此方の岩座を

この聖場に持ち運び

榎の大木を伐り採りて

石搗柱と定めつつ

大地の底のわるるまで

力を籠めて打つ石の

千代に八千代に動きなく

イドムの國の礎と

御代に輝けよこの石は

月光山の溪間より

國津神等の誠もて

集まり來りし御魂石

ああ面白や面白や

打てよ打て打て石の面

大地だいちの底そこへととほるまで
打うてよ打うて打うて天地あめつちの
一いちど度にどよむところまで
よーいとなあ、よーいとなあ
』

右守うもりのターマンは歌うたふ。

㊦ ああ有ありがた難ありがたや有ありがた難ありがたや

今けふ日の吉よき日ひの吉よき辰ときに

アヅミの王きみの御言みこともて

月つき光みつ山やまの頂上いただきに

いと美うるはしき主すの神かみの

御舍みあらか建たつるいさましさ

この大宮おほみやの建たつ上うへは

朝あさな夕ゆふなに謹つつしみて

吾等われらは仕つかへ奉まつるべし

如何いかに雄を々をしき吾王わがきみの

いますと言いへど神かみなくば

永と久はの御國みくには治をさまらじ

イドムの城しろを取とり返かへし

エールス王わうを平たひらげて

神代かみよのままのイドム城じやう

王きみの御稜威みいづは四よ方も八や方に

輝かがやき渡わたらむ礎いしすゑと

思おもへば今け日ふの足たれる日ひの

この石搗いしつきの音おとのよき

御空みそらに天津あまつ日照ひてり渡わたり

吹ふき來くる風かぜの清すがしさに

汗あせさへ出いでぬ石搗いしつきの

この働はたらきの勇いさましさ

ああ惟かむながらかむながら神々かむながら

神かみの恵めぐみぞ畏かしこけれ

漸やくに石搗いしつきの儀ぎ式しきは終しう了れうし、一いち同どうは月つき光みつ山やまの聖せい場ぢやうに果この實のみの酒さけ等などを酌くみ交かはし、あ

らゆる馳ち走そつを作つくりて、祝しゆ宴えんは小さ夜よ更ふくるまで開ひらかれにける。

アヅミ王わうはこの場ばに静しづ々しづと現あらはれ來きたり、この光くわう景けいを眺ながめて歌うたふ。

☐ 月つき光みつの山やまは八やち千ち代よに榮さかゆべし

國くにの礎いし固かためし今け日ふはも

天あめ地つちをゆるがせ歌うたふ神々かみがみの

聲こゑいさましく目め出で度たかりけり

左さ守もり、右う守もり其その他たの司つかさの神々かみがみも

今日の務めをよろしみ思ふ
いと早く貴の御舎仕へ奉れ
主の大神を齋き奉ると

ムラジ姫は歌ふ。

よみがへりよみがへりたり月光山

今日の歡び天に響きて

奪はれしイドムの國の礎を

月光山に搗き固めたり

かくならば主の大神の御稜威もて

イドムの國を再び治めむ

エールスの惡魔の司を言向けて

サールの國に追ひ返さなむ

シウランは歌ふ。

ありがたし今日の吉き日のよろこびは

神もいさむか天地晴れたり

一片の雲さへもなき大空の

蒼きは神の心なるらむ

吾心勇み勇みて大空の

雲井の蒼にとけ入りにけり

わが國は神を齋きて朝夕の

御祭りせずば治まらざるべし

兔にもあれ角にもあれや吾王の

神を祭らす御心嬉しも

左守のナーマンは歌ふ。

☐ 風かぜ清きよく空そら晴はれ渡わたる今け日ふの日ひの

石いし搗つき祭まつり清すがしかりけり

月つき光みつの山やまは今け日ふよりかagaやかむ

主スの大神おほかみの光ひかり添そふれば

常とこ闇やみの世よを照てらさむと主スの神かみの

御み光ひかり仰あふぐ月つき光みつの山やま

右う守もりのターマンは歌うたふ。

☐ うるはしき月つき光みつ山やまの頂いた上だきに

神かみ天あ降もらすと思おもへば嬉うれし

天あめ地つちの神かみを祭まつりて國くにの政のり

はげむは王きみの務つとめなるらむ

吾わが王きみは真まの務つとめ悟さとりましぬ

これの御國は今日より榮えむ

南のはてなる月光山の上に

神を祭りて再舉計らすも

吾心とみにいさめり月光の

山に天降らす神を思ひて

その他國津神等の祝歌は數多あれども、省略することとせり。

(昭和九・八・四 舊六・二四 於伊豆別院 谷前清子謹録)

第三章 月見の池〔二〇三〇〕

月光山の聖場は、アヅミ王の發起により、百日の工程を急ぎ、漸く美しき神殿の建築を終りければ、ここにアヅミ王を始め左守、右守、軍師其他の司等は、齋

殿どのに集あつまり、七日七夜なぬかななよの修祓しうばつを終をはり、主スの大神おほかみの遷座式せんざしきを行おこなふべき段取だんどりとなり
ける。

月光山つきみつやまの中腹ちうぶくには月見つきみの池いけと稱しやうする清泉せいせん涌出ゆうしゆつして、蒼空さうくうの月つきを底深そこふかく寫うつせり。
恰あだかも白銀はくぎんの玉たまを水底みなそこに沈しづめし如ごとく見みえて、その床ゆかしさ限かぎりなし。アヅミ王わう以下いかの
修祓しうばつ修しう行者ぎやうしやは、七日目なぬかめの夕月見ゆふへつきみの池いけに集あつまり來きたり、各自おのもおの清泉せいせんを頭上づじやうより引ひきかぶり
ながら歌うたふ。

アヅミ王わうは歌うたふ。

身からだ體たまも靈魂みたまも清すがしくなりにけり

七日七夜なぬかななよの修祓しうばつを經へて

月光山つきみつやま月見つきみの池いけに佇たたずめば

水底みなそこ深ふかく月つきはかがよふ

仰あふぎ見みれば月讀つきよみの舟俯ふねふして見みれば

水底みそこの月つきは玉たまとかがよふ

月つきと月つきの中なかに佇たたずむ心地こころして

楔みそぎをはりし夕ゆふべ清すがしき

主スの神かみの御み霊たまを御み殿とのに招おぎ奉まつり

明日あすはいよいよ御みまつり祭つか仕つかへむ

果はてしなき御み空そらの蒼あをを寫うつしたる

月つき見みの池いけの底そこにも月つきあり

月つきも星ほしも水み底そこに清きよく輝かがやけり

われは空そらゆく鳥とりにあらずや

佇たたずみて月つき見みの池いけを眺ながめつつ

雲くも井いを伊い行ゆく心地こころするかな

春はるさりて紫むらさき躑つじ躑つじ紅べ躑つじ躑つじ

月つき見みの池いけの汀みぎはに匂におへり

白しろき蝶てふ花はなにたはむるやさしかげ

月つき見みの池いけの底そこにも遊あそべる

常磐木の松の木蔭に咲き匂ふ

躑躅は水底に赤く映えたり

天も地も澄みきらひたる今日の日に

楔終りしわれは嬉しも

天地の神も楔しわが魂を

諾ひまして天降りますらむ

イドム城敵に奪はれわれは今

月光山に楔するかも

晝夜を神に祈りて魂を練り

力を強めて國を守らむ

仰ぎ見れば御空に月讀光清く

星の眞砂のまたたけるかな

月光山吹く春風の軟かく

夕べの林に小鳥なくなり

ムラジ姫は歌ふ。

㊦
歎かひの數を重ねて今此處に

水底にうつる月を見るかな

水底の澄みきらひたる月見れば

うべよ月見の池と稱ふも

水底にかけを沈めて月讀は

夜の守りとかがやき給へり

晝の守り夜の守りを受けながら

月光山に國を守らむ

チンリウ姫の行方は今にわからねど

月をし見れば心やはらぐ

大空に冴え渡りたる春の夜の

月朧なりわが子を思ふも

おほそら^{おほそら}は^{にはか}俄に^{かすみつつ}霞包まひて

水底^{みそこ}の^{つき}月の^{かげ}光を^{ぼかせり}ぼかせり

春^{はる}の^よ夜の^{つき}月を^{ちから}力に^{にほ}匂ふらむ

躑躅^{つっじ}の^{つゆ}露は^{たま}玉と^て照りつつ

静^{しづ}かなる^{ゆふ}夕べ^{かな}なる^{吹く}かな吹く^{かせ}風も

いと^ややはらかに^{やまがら}山雀^なの^な鳴く

夕^{ゆふ}されど^{やまがら}山雀^なの^な鳴く^{やま}この山は

神^{かみ}の^{めぐみ}恵の^{あら}現は^{なる}なるかも

水底^{みなそこ}の^{まさご}眞砂^{かず}の^み數も^{見ゆる}見ゆるまで

月^{つき}は^さ冴えたり^{かすみ}霞を^わ分けて

吹^ふく^{かぜ}風に^{みそら}御空^{おほ}覆ひ^{はるがすみ}し春霞

忽^{たちま}ち^は晴れて^{そら}空の^{はだ}肌^み見ゆ

主^スの^{かみ}神の^{みあらが}御舍^ことならむ^{やま}此の山に

御魂^{みたま}清めて^{すが}清しき^{われ}われなり

大空おほぞらの月つきも流轉るてんのかげなれば

われは歎なげかじ移うつりゆく世よを

或あるは虧かけ或あるいは盈みつる月光つきかげは

わが魂たましひを生いかせ給たまへり

光ひかりやみ闇やみゆき交かふ世よぞと思おもへども

なほ俣しのばるるイドムの城しろかな

朝夕あさゆふに戀こふる娘むすめの行先ゆくさきを

探たづねまほしき月つきにぞありける

祖々おやおやの授さづけ給たまひしイドム城じやうの

木この間まの月つきを見みる由よしもなし

わが仰あふぐ御空みそらの月つきはイドム城じやうの

常磐木とぎはぎの松まつに懸かかりし光かげかも

ここに來きて心清こころすがしくなりけり

朝夕あしたゆふべを風かぜの匂におへば

月つき冴さゆる樹こ下したの蔭かげに丹に躑つ躑つは
無む心しんの色いろを湛たへて笑わへりら」

シウランは歌うたふ。

☐
わが王きみよ喜よろこび給たまへイドム城じやうに

眺ながめし月つきは輝かがき給たまへり

故郷ふるさとに眺ながむる月つきを月光つきみつの

山やまに仰あふぐと思おもへば床ゆかしき

何國いづくにの果はてにも月つき日は照てるものを

如何いかで歎なげかむ過すぎにし夢ゆめを

現世うつしよは夢ゆめと思おもへど月つき讀よみの

かげをし見みれば現うつにかへる

百餘ひやくより里りを距へだてて仰あふぐ月光つきかげも

變りなき世と思へば樂し

眞珠湖に浮べる月を人魚等は

歡ぎ喜び仰ぎゐるらむ

鹽辛き人魚の湖に比ぶれば

月見の池は一入清しき

わが王よ歎き給ふな地の上に

變らぬ月日の輝き給へば

かくの如清しき山に籠らひて

祭政一致は樂しかるべし

先づ神を齋きまつりて此國の

政治せむ月日にならひて

天津日の恵み畏み月讀の

露を力に世を治めませ

七日七夜靈魂身體楔して

つきみ 月見の池の月に親しむ

こすあふ 梢吹く風の音さへ静かなり

きみ 王の御心現はれにつつ

むらきも 村肝の心静かに時待ちて

しる イドムの城を取り返さばや

しこ エアールの醜の司は強くとも

まこと 誠の神の力に及ばじ

きみ わが王に刃向ひまつりしエアールの

は 果ては必ずよろしからまじ

しこ エアールの醜の魂を救ひやりて

つきかげ 月光の如清めたきもの

つき われとても月の光を教として

みたま 靈魂身體清く進まむ

とこやみ 常闇も光の力に引きさかれ

輝かがやく世よなり神かみに任まかさむ

わが王きみの軍いくさの司つかさと任まけられて

もろくも破やぶれし思おもへば恥はづかし

月つきの面おも仰あふぐも恥はづかしわが王きみの

上うへを守まもらで破やぶれし思おもへば

恥はぢらひつ御空みそらの月つきを眺ながむれば

笑ゑみておはせり面穩おもておだひに㊦

左守さもりのナーマンは歌うたふ。

㊦ 戦たたかひに敗やぶれて歎なげきのわれながら

冴さえたる今宵こよひの月つきを見みるかな

月つき見みれば千々ちぢの歎なげきも晴はれゆきて

蘇よみがへりたる心地こころこそすれ

イドム城は失ひたれどわが王の

まめやかにます思へば樂しき

姫君の行方はいづくか知らねども

生きていませむ神の守りに

エールスの醜の司を征討めむと

思ふ心は永久に晴れずも

左守われ國の政治を誤りて

王に歎きを見せまつりける

わが王の心なやませ村肝の

心は立つても居ても居られず

寛大なる王の心にほだされて

われは生命を今日まで保ちし

わが國と王に對して申譯

立たざるわれは死なむと思ひし

さりながら死しするは易やすく生うまるるは

難かたしと思おもひて忍しのび來きつるも

玉たまの緒をの生命いのち保たもちて王きみのため

わが敵てき滅ほろぼすとながらへ居ゐるも

心こころ無なき花はな麗なつるしく汀みぎ邊はへに

春はるを勻にほへどわれは淋さびしき

大空おほぞらに輝かがやく月つきの光かげ見みれば

わが愚おろかしさに恥はぢらひのわく

玉たまの緒をの生命いのちの限かぎり王きみのため

恨うらみ晴はらして城しろとりもどさむ
』

アヅミ王わうは歌うたふ。

『 ナーマンの悲かなしき心こころはわれ知しれり

心こころ安やすかれ時ときを待まちつつ

ナーマンの罪つみにはあらず天地あめつちの

神かみに離はなれしわれの罪つみぞや』

ナーマンは歌うたふ。

わが王きみの優やさしき言ことば葉は聞きくにつけ

わが目めの涙なみだしとど降ふるなり

わが王きみの思おもひを何い時つか晴はらさむと

朝あした夕ゆふべを神かみに祈いのりつ

主スの神かみの御み舍あらかやうや漸あく出で來き上あり

御み靈たま遷うつしの吉よき日ひ待またるる』

右う守もりのターマンは歌うたふ。

わが王の御言畏しナーマンの

心いぢらしわれは泣くなり

今までの歎きを月にまかせつつ

御國起すと御神に祈らむ

地の上の業はことごと主の神の

恵みに離れて成るものはなし

主の神を厚く祭りて言靈の

清き御稜威を身に受けむかも

言靈の軍を用ゐず現世の

弓矢の軍に滅ぼされたり

この上は人を傷ふ弓矢を捨てて

生言靈に戦はむかな

七日七夜の修祓終り村肝の

心は頼に冴え渡りける

春はるされば花はなは自然しぜんに咲さくものを

何なにを騒さわがむ今日けふのわが身みを

わが王きみを榮さかえの君きみとあがめつつ

月光山つきみつやまに時ときを待まつべし

右守うもりわれは王きみの御國みくにをあやまりて

曲まがの司つかさに奪うばはれにけり

わが罪つみは萬死ばんしに當あたり重おもけれど

やがて酬むくいむ時ときの力ちからに

しばらくを心靜こころしづかに待まち給たまへ

エールス王わうを追おひそけて見みむ

エールスの司つかさを征討きめ破やぶらねば

わが身みの罪つみは亡ほろびざるべし

久方ひさかたの御空みそらを伊行いゆく月光つきかげも

虧かけてかくるる例ためしある世よぞ

闇やみの世よは久ひさしからまじやがて又また

冴さえたる月つきは輝かがやき給たまはむ

月光つきかげは次第しだい々々しだいに太ふとりつつ

まだ次つぎ次つぎに細ほそりゆくなり

細ほそりつつ御空みそらは闇やみとなりぬれど

また月光つきかげの出いづる世よなるよ

アヅミ王わうは再ふたび歌うたふ。

月つき清きよきこの池いけの邊べに禊みそぎして

各自おののおのが心こころ照てらしぬ

われは今いま汝等なれらが清きよき心根こころねを

親したしく聞ききて蘇よみがへりたり

大空おほぞらの月つきもかくるる世よなりけり

何を歎かむ汝等を力に

われこそは獨身ならずたくましき

汝等を力と頼む身なれば

主の神の貴の恵をかがふりて

静かに思ひを晴らさむと思ふ

今までの心の襖立て直し

神の御前に畏み仕へむ

主の神をよそになしつつわが國の

治まるべしやはと悟らひにけり

右守は歌ふ。

わが王の畏き言靈聞くにつけ

國の榮を今より思ふ

わが王きみの御言みこと宜つべなり主スの神かみの

功績いさをしなくて治をさまるべきかは

エールスの曲まがは隙間すきまをうかがひて

イドムの國くにを奪うばひたりけむ

ムラジ姫ひめは再びふたたび歌うたふ。

何い時つとなく心こころ驕おごりてわが力ちから

頼たのみし事ことは禍わざはひなりしよ

明日あすされば主スの大神おほかみを招おぎまつり

いとうるはしく御祭みまつり仕つかへむ

(昭和九・八・四 舊六・二四 於伊豆別院 林彌生謹録)

第四章 遷座式〔二〇三一〕

アヅミ王が發起のもとに、軍神等が百日百夜丹精を凝らしたる結果、月光山の頂上にさも莊嚴なる瑞の御舎は建てられにけり。

茲にアヅミ王は、七日七夜の修祓を終り、恭しく神殿に昇り祓ひの式を修し、且つ遷宮式の祝詞を奏上しける。

神々等は此の聖場に襟を正し、恐懼して控へ居る。禊祓の祝詞の文に曰ふ。

掛巻くも畏き、紫微天界の眞秀良場高日の宮に、大宮柱太敷きたて、高天原に千木高知りて、永久に鎮まりいまし、大宇宙を領有ぎ給ふ主の大御神、高銚の神、神銚の神の貴の大前に齋主元イドム城の主アヅミ王、謹み敬ひ畏み畏みも白さく。アヅミの國は大御神の惠彌深く、田畑繁り木の實豊かに、國津神は朝な夕なの厚き恵に、樂しく世を送りける折もあれ、サールの國の國司エールスは、數多の兵士を率ゐて大榮山の峰を渡り、眞珠の湖を占領し、進んで平和の樂土と聞えたる、

吾祖先より彌次々に守りたる、イドム城を取り圍み、弓矢をもちて攻め寄せ來りけるにぞ、吾も此猛き仇を防がむとして射向ひたりけるに、果敢なくも味方の大方は敵に滅ぼされ、吾娘は行方分かずなりにける。かかる禍の吾に迫り來るは、全く祖々の志を輕んずるの餘り、主の大神の御惠を忘れ、恣なる政治を爲せし罪故と、ここに前非を悔い眞心より改めて、大神の御子たる事を悟らひにける。吾ここをもて悔い改めの心の千重の一重のしるしにもと、月光山の頂の最も清く最も涼しき、常磐木茂る上津岩根に、大宮柱太敷きたてて、主の大神の大御靈を招ぎ奉るとして、海川山野の種々の美味物を、八足の机代に置き足はし、御酒御饌御水獻りて願ぎ奉るさまを、安らけく平らけく聞食し、相諾ひ給ひて、月光山のこれの聖所は、彌益々も常夏の國と榮え、神の惠を戴きて再びイドムの城を奪ひ返さしめ給へ。イドムの城の再び吾手に返りし上は、上下共に驕りの心を戒め、火、水、土の惠を悟らしめ、大御神の大御心に叶ひ奉るべく教へ諭すべきを誓ひ奉る。仰ぎ願はくは主の大御神、これの大殿に天降りまして、貴の御靈を永久に止めさせ給ひ、イドムの國は言ふも更なり、サールの國も悉く、大御神の惠

の露つゆに潤うるほはしめ、直なほく正ただしき心こころを持もたしめ給たまへと、畏かしこみ畏かしこみも祈願こひのみまつ奉まつらくと白まをす。

ひとふたみよいつむゆななやこのたりももちよろづ
一二三四五六七八九十百千萬

ちよろづ
千萬さかの榮さかえあれ

やちよろづ
八千萬めくみの惠めくみあれ
□

かく歌うたひ終をはり、再ふたび神しんぜん前に敬禮けいれいしながら、

□
ひさかた
久方あまつの天津御神みかみの大御おほみかげを

われ
吾はたしかに拜をがみまつりぬ

ありがたき神かみの天降あもりに我國わがくには

い
彌いますますも榮さかえ行ゆくらむ

ス
主すの神かみの御靈みたま天降あもらす今日けふよりは

わがくに
我國原わがくには安やすけかるべし

天^{てん}を仰^{あふ}ぎ地^{つち}に額^{ぬか}づき朝^{あさ}夕^{ゆふ}を

主^スの大神^{おほかみ}に仕^{つか}へ奉^{まつ}らむ

月^{つき}光^{みつ}の山^{やま}は清^{すが}しも主^スの神^{かみ}の

御^み靈^{たま}の永^と久^はに止^{とど}まり給^{たま}へば

草^{くさ}も木^きも色^{いろ}艶^{つや}やかになりけり

神^{かみ}の天^あ降^もりし此^このたまゆらに

過^{あや}ちし心^{こころ}をとみに清^{きよ}めたる

吾^{われ}は神^{かみ}の子^こ神^{かみ}の宮^{みや}なり

永^{とこ}久^{しへ}にこれの宮^{みや}居^あに止^{とど}まりて

伊^い佐^さ子^ごの島^{しま}根^ねを照^てらさせ給^{たま}へ
□

と拍^{はく}手^{しゆ}して元^{もと}の座^ざに直^{なほ}りける。

ムラジ姫^{ひめ}は神^{しん}前^{ぜん}に拜^{はい}禮^{れい}し静^{しづ}かに歌^{うた}ふ。

☐ 八十日はあれども今日の吉き日こそ

わがたましひの蘇り知る

主の神はこれの聖所に天降りまして

わがたましひの勇みやまずも

嘆かひの日數重ねて嬉しくも

今日の吉き日にあひにけらしな

愛娘チンリウ姫の行く先を

守らせ給へ主の大御神

わが娘齡しあれば一日だも

早く吾目にうつさせ給へ

何となく心嬉しく勇みたちて

吾手吾足舞ひ狂ふなり

祖々の守りし城に立ち歸り

神のまつりを行はせませ

シウランは歌ふ。

久方ひさかたの主スの大神おほがみの御靈おんたまを

齋いつきし今日けふは喜よろこびあふる

嚴おごそかな王きみの祝詞のりとの言靈ことたまに

主スの大御神おほみかみ天降あもりましけむ

言靈ことたまの助たすくる國くにと知しりながら

行おこなひ得えざりし事ことを悔くゆるも

言靈ことたまを朝夕あさゆふ宣のりつつありしならば

イドムの城しろは滅ほろびざりけむ

言靈ことたまの嚴いづの力ちからを忘わすれたる

報むくいは滅ほろびの他ほかなかりけり

武士ものふを數あまた多ひ引き連つれ敗やぶれたる

われも言靈ことたま忘わすれ居あたりき

斯く歌ふ折しも、殿内忽ち鳴動して地鳴震動烈しく、新築の社殿も殆ど覆へらむばかり思はれにける。

アヅミ王は恐れ畏み、再び神前にひれ伏して靜かに歌ふ。

☐ 大神の御旨にそむきし爲なるか

天地一度に搖ぎそめたる

罪あれば吾を譴責めよ天津神

われに倣ひしものにありせば

わが教曇りたるより國津神

神を忘れて亂れたりける

吾生命召すも厭はじ國津神の

罪を偏に許させ給へ

かく歌ふ折もあれ、突然として神前に現はれ給ひし三柱の大神あり。

一柱の神は主の大神と見えて御姿いたく光らせ給へば、拜み奉るよしもなく、
わづかにその御影を想像するばかりなりけるが、白衣を纏ひ右手に各自鉾を持た
して立ち給ふ神は、正しく高鉾の神、神鉾の神にましましける。
高鉾の神は嚴かに宣らせ給ふ。

☐ 吾こそは高日の宮ゆ天降りてし

高鉾の神ぞ心安かれ

この國は生言靈の死せる國

神の助けのあらぬ國ぞや

アヅミ王元津心に立ちかへり

宮居造りしわざを嘉すも

天地の一度に揺りしは主の神の

天降り給ひしなるぞや

アヅミ王よ恐るるなかれ主の神の

御國みくに助たすくと天あ降もりませしぞや
□

神かみほこ銚かみの神かみは御歌みうた詠よませ給たまふ。

主スの神かみの御供みともに仕つかへ八重やへくも雲もを

かき分わけ此處ここに天降あもりし神かみぞや

神かみほこ銚かみの神かみはわれぞや村肝むらきもの

心清こころきよめてわが面おもを見みよ
□

この降臨かうりんにアヅミ王わうをはじめ左守さもり、右守うもり、
軍師ぐんし其他そのの神々かみがみは廣庭ひろにはにひれ伏ふし、
感謝かんしゃと喜よろこびに身みをふるはして蹲うつくまり居ある。

アヅミ王わうは恐おそる恐おそる謹つつしみ歌うたふ。

罪つみ深ふかき吾身わがみの願ねがひ聞きこしめ
召めし

天降り給ひし神ぞ畏し

今日よりは心を清め身を浄め

神の御旨に叶ひ奉らむ

力弱き吾に力を添へ給へ

イドムの國は醜はびこれば

高鉾の神は御歌詠ませ給ふ。

醜神は汝が心に潜むなり

みたま清めて追ひ出すべし

刈菰と亂れはてたる此の國も

汝が心の汚れし故ぞや

今日よりは元津心にたちかへり

誠の上にも誠を盡せよ

アヅミ王は歌ふ。

□ ありがたき仰せなるかも知らず知らず

わが魂に曲津の潜めるか

主の神の嚴の力にわが魂の

醜の鬼神退ひ給はれ

神銚の神は御歌詠ませ給ふ。

□ ゐやなきは汝が言葉よ魂の

鬼は自らつくりしものを

肝向ふ心の鬼を退ふべき

誠の力は眞言なるぞや

斯く歌ひ給ふや、三柱の神は消ゆるが如く御姿を隠させ給ひける。再び天地震動して大空の雲は左右に分れ、虹の如き天の浮橋かかるよと見る間に、三柱の神は莊嚴なる雄姿を現はし給ふ御姿、ほのかに下界より拜むを得たりける。
アヅミ王は天を仰ぎ拍手しながら、謹みの色を面に漲らして歌ふ。

主の神は善言美詞の言靈を

われに授けて歸りましけり

御教委曲に聞きてわが魂の

汚れはてたる事を悟りぬ

大宮は新たに仕へ奉れども

鎮まりまさずて歸らせ給ひぬ

真心のあらむ限りを盡しつ

われは誠をもちて仕へむ

主の神の怒りに觸れしか吾魂は

穩おだやかならず震ふるひをののく

エールスに城しろ奪うばはれしも吾魂わがたまに

潛ひそむ曲津まがつのわざなりしかな

上うへ下の序ついでを亂みだし誇ほこりたる

國津くにつ神かみらの罪つみまた深ふかけむ

さりながら吾魂わがたまの曇くもりゐて

世よの亂みだれをば悟さとらず居ゐたるよ

亂みだれしと悟さとりし頃ころは早はや既すでに

吾住わがすむ城しろは落おちにけらしな

掛かけ卷まくも綾あやに畏かしこき大神おほかみの

惠賜めぐみたまはれこれの御國みくにに〇

ムラジの姫ひめは歌うたふ。

三柱みはしらの神かみの御姿みすがた拜をがみてゆ

われは頭かしらをもたげ得えざりき

頭上づじやうより押おしつぶさるる心地こころして

御稜威みいづかしこ畏こみふるへ居ゐたるも

天地あめつちにかかると尊たふとき神坐かみますと

知らざる罪つみの報むくい來きしよな

エールスの襲おそひ來きたるも宜うべようべ

神かみに背そむきしイドムの城しろは

天地あめつちは神かみの住處すみかと知らしずして

驕おごり暮くらせし罪恐つみおそろしも

七日なぬかななよ七夜みそきの楔みそぎはおるか百日ももかひ日も

身體からだみたま清きよめ澄すまさむ

主スの神かみの御靈みたまをこれの新殿にひどのに

迎むかへむとせし罪恐つみおそろしも

吾々われわれがみたまの曇くもり晴はれざれば

如何いかで天降あもらむ三柱みはしら神がみは

恐おそれ多おほき事ことをなしけり曇くもりたる

みたまかかへて神祀かみまつるとは

新殿にひどのは嚴おごそかなれど主スの神がみは

鎮しづまりまさず心こころもとなや

磨みがきたる上うへにもみたまみがきあげ

神かみの御前みまへに仕つかへ奉まつらなら

シウランは歌うたふ。

恐おそれ多おほき事ことをなしけり汚けがれたる

身みを省かへりみず神かみを招おぎしは

神しんでん殿んも毀こはれむばかり唸うなりつつ

動き揺れしは神罰なるべし
今日よりは弓矢の道を改めて
言靈軍の司とならむ』

ナーマンは歌ふ。

年古く左守の神と仕へつつ

この過ちを悟らざりしよ

吾王の輔弼の役を勤めつつ

王を誤らしめし吾なり

主の神よ許し給はれわが生命

よしや召すとも厭はざりせば

チンリウ姫敵に奪はれ給ひしも

われらが罪と思へば悲しき』

ターマンは歌ふ。

☐ 長ながからむ月つき日を王きみに仕つかへつつ

神かみの恵めぐみを悟さとらずに來こし

罪つみといふ罪つみのことごと集あつまりて

イドムの城しろは滅ほろびしなるらむ

かくなるも吾われ等らが神かみを忘わすれたる

罪つみと思おもへば身みの置おき場ばもなし

アヅミ王わうは歌うたふ。

☐ 汝なれたちは嘆なげかふななけれ皆みなわれが

神かみをなみせし罪つみなりにける

今日けよりは心こころあらため愛あい善ぜんの

神の心に抱かれ進まむ
如何ならむ罪科あるも愛善の
主の大神は救ひ給はむ

シウランは歌ふ。

吾王の優しき心聞くにつけ
われ自ら涙こぼるる
今となり歎くも詮なし村肝の
心清めて仕ふるのみなる
地の上の欲に離れて惟神
神の誠に従はむかな

ムラジ姫は歌ふ。

□ 形ある寶を捨てて形なき

寶求むと心を磨かむ

吾魂は曇りて居たり主の神の

貴の教を聞くまで悟らず

かく各自述懐を歌ひ、神前に感謝の祝詞を奏上し後しざりしながら、月光山の頂上なる神殿を降り、俄造りの城内に歸り行く。

大空の月は皎々として輝き渡り、時ならぬ百鳥の囀り百花の香り、空中の音楽、嘯唳として響き渡り、短き春の夜は遂に明け放れたり。ああ惟神靈幸倍坐世。

（昭和九・八・四 舊六・二四 於伊豆別院 白石恵子謹録）

第五章 心の楔（二〇三二）

アヅミ王以下の國津神等は高鉾の神、神鉾の神の御宣示により感激し、七日七夜の禊を修し再び百日の修祓に取りかからむと、今回は月見ヶ池の聖場を離けて、山麓を流るる駒井川の清流に修祓式を行ひにける。駒井川の水は滔々として蒼く流れ、川中の巖を噛みて立ち上る飛沫は霧の如く日光に映じ、宛然白銀の錦を散らせし如く、その壯觀さ目も眩むばかりなりける。一同は川中の大巖の上に起立し、或は端坐し、日夜心力を盡し、禊の神事に仕へ奉りける。

アヅミ王は歌ふ。

月見池七日七夜の禊さへ

吾魂の垢は取れなく

大神の大御言葉に省みれば

身體靈魂は未だ清まらず

速川の瀧津瀬聞けば物凄し

高鉾神の御聲にも似て

魂たましひを打うち叩たたかるる心地こころかな

駒井こまゐの川かはの瀧津たきつせ瀬せの音ねは

速川はやかはの中なかに峙そばだつ巖いはヶ根がねに

吾われ立たち居をれば水煙みづけむり立たつも

駒井こまゐ川が速瀨はやせに立たちて身からだ體たまを

洗あらふ襖みそぎの勇いさましきかも

川底かはそこの眞砂まさごの白しろも見みえぬまで

水みづ蒼あをみたる深ふかき流ながれよ

駒井こまゐ川が深ふかき流ながれの底そこよりも

なほまさるらむ吾身わがみの汚けがれは

月光山つきみやま聖所すがどに城しろを構かまへつつ

吾曇わがくもりたる心こころを嘆なげかふ

嘆なげくべき時ときにはあらし吾魂わがたまを

清きよめてイドムの城しろをかへさむ

形かたちある寶たからに心こころ引ひかれつつ

吾魂わがたましひの曇くもりを恐おそるる

さはいへど親おやの賜たまひしイドム城じやう

やみやみ人手ひとでに渡わたすべきかは

月つきも日ひも流ながるる駒井こまゐの川かは水みづに

吾魂わがたましひの垢あかを洗あらはむ

勇いさましき駒井こまゐの川かはの水みな音おとは

吾魂わがたましひを蘇よみがへらすも

山やまと山やまに包つつまれ流ながるる駒井こまゐ川の

水みづ澄すみ切きりて冷ひえ渡わたるなり

大魚おほなを小魚こなあまた集つどへる谷川たにがはに

楔みそぎし居をれば足あしこそばゆき

吾足わがあしを魚族うろくづ來きたりつつくらし

未まだ身からだ體たまの垢あかの取とれずや』

ムラジ姫は汀の淺瀬に立ちながら、
半身を浸し靜かに歌ふ。

心こころ地ちよき流ながれなるかな吾わが魂たまは

この水みな音おとに洗あらはれにける

洗あらへども身からだ體たま靈み魂たまの汚けがれをば

完全うまらに委つ曲まらに落おとす術すべなし

吾わが王きみの速はや瀬せに立たちて巖いはヶ根がねに

楔みそぎ給たまへる御み姿すがた雄を々をしも

駒こま井ゐ川が速はや瀬せを見みれば村むら肝きもの

心こころ勇いさみて身からだ體たま戰のく

主すの神かみの御み旨むねに叶かなひ奉まつらむと

百もも日か百もも夜よの楔みそぎに立たつも

百もも木き々の茂しげみの露つゆのかたまりて

この速はや川かはとなりはにけるかも

川幅は廣く水底深くして

流れ急しき駒井の瀧津瀬

岸の邊の木々の梢に鶯は

春を歌へど吾魂寒し

庭躑躅岸邊に匂ひて水底に

赤白紫の花を寫せり

瀧津瀬の音高々と夜もすがら

響かひながら月を流せり

朝されば天津日流れ夕されば

月の流れる駒井の川水

シウランは歌ふ。

七日七夜襖の業も甲斐なくて

ももか 百日の楔を此處にするかも
わがたま 吾魂は十重に二十重に汚れしか

つきみ 月見の池の水にも洗へず

はやかは 速川の流をあびて吾魂は

いくさ 軍の司と仕へ得べけむ

けふ 今日よりは猛き心を洗ひ去り

ことたまいくさ 言靈軍の司とならばや

きし 岸の邊に清しく鳴ける河鹿の

こゑ 聲は水面に慄へて流るる

よるひる 夜晝の差別もあらず清しかる

ことたま 言靈宣れる天晴れ河鹿よ

かじか 河鹿にも劣れる醜の言靈を

も 持てる吾身の愧かしき哉

よるひる 夜晝を河鹿は駒井の川水に

洗あらひて言こと靈たま澄すみたりにけむ

桃もも櫻やぐら匂におへる花はなのあかあかと

水みづにうつるふ春はるは長の閑どけし

速はや川の瀬せ筋ぢ流ながるる櫻さくら花はなは

何いづ處くの海うみに息やす所どを定さめむ

吾わが心こころ瀬せ筋ぢ流ながるる花はなの如ごと

果はてしも知しらずなりにけりしな

水みづ冷ひゆる此この谷たに川がはに禊みそぎして

蘇よらさむ吾わが魂たまを

月つき光みつ山やま新あらたに建たてし宮みや内うちに

神かみや天あ降もらすを待まつ禊みそぎなり

一ひと度は天あ降もりましたる主すの神かみの

汚けがれを忌いみて歸かへりましたける

世よの中に神かみの守まもりのなかりせば

片かた時ときだにもいのち生命たも保たもてじ
谷たに々だにをぬ縫ぬひてなが流ながるは速はや川かはの

水みな瀬せの水みづはひ冷ひえわた渡わたりけり

川かは水みづはよしひ冷ひゆるともも百も日か日ひは

こかはのなか川なか中なかにた立たちて襖そそがむ

玉たまのを緒いのち生き命き消おゆると思おもふまで

冷ひえわた渡わたるなり駒こま井みのなが流ながれは

左さ守もりのナーマンはうた歌うたふ。

吾わが王きみのみ御あ後とにしたが従したがひき來きてみ見みれば

駒こま井みのみ襖そぎはひ冷ひえわた渡わたるなり

冷ひゆるともなに何なにかおそ恐おそれむ王きみのため

御み國くにのた爲ためとおも思おもへば安やすし

王きみの爲ため國くにの爲ためにはあらずして

吾魂わがたましひを清きよむる爲ためなり

吾魂わがたまの汚けがれ全まく清きよまらば

國くにと王きみとの爲ためとなるべし

吾魂わがたまの曇くもりし故ゆゑに吾王わがきみを

月光山つきみやまに忍しのばせ奉まつるも

思おもひ見みればさも恐おそろしき吾われなるよ

王きみを惱なやませ國くに失しなひて

祭政さいせい一致いつちこの大だい道だうを忘わすれしゆ

イドムの國くには覆くつがへりたり

政治まつりごとなさむと思おもへば身からだ體たまも

靈魂みたまも共ともに清きよむべきなり

主スの神かみの生うませ給たまひし國くに原はらに

楔みそぎなくして生いのち命たま保たもたむ

玉たまの緒をの生命いのちは神かみの賜物たまものと

思おもひて楔みそぎの業わざにいそしむ

政治まつりごとなさむと思おもへば眞先まっさきに

楔みそぎの袂はらひ勤つとむべきなり

主スの神かみの恵めぐみを忘れ吾力わがちからに

國治くにをさむると誤あやまりてゐし

誤あやまてる心抱こころいだきて政治まつりごと

如何いかになすとも治をさまるべしやは

政治まつりごとは第一だいいち神かみを祀まつることよ

神かみの御國みくには神かみの任意まなり

百日ひやくにちの楔みそぎ終はれば村肝むらきもの

心改こころあらためて王事わうじに仕つかへむ

言靈ことたまの劍つるぎを右手めに振ふりかざし

王きみが政治まつりを補たすけ奉まつらむ

滔々たうたうと流ながる水みづの瀬せをはやみ

行方ゆくへを知らぬ駒井こまゐの川かはかな

月光つきみつ山峰やまみねより落おつる木々きぎの葉はの

露つゆは集つどひて川かはとなりしか

一人いちにんの露つゆの力ちからも重かさなれば

末すゑに誠まことの川かはとなるべし

ターマンは歌うたふ。

春霞はるがすみ棚たな引きそむる谷間たにあひに

吾われは謹つつしみ楔みそぎするかも

巖いはを噛かみ流ながる水みづの音おと高く

生言いくこと靈たまを非時ときじく歌うたふ

巖いはを打うつ速瀨はやせの水みづの響ひびきさへ

心こころにかかる國くにの行末ゆくすゑ

王きみ思おもひ國くにを思おもひて月光つきみつの

山やまに朝夕あさゆふ詣までけるかな

汚けがれたる吾わが身體からだを主すの神かみの

御前みまへに運はこぶと思おもへば恐おそろし

山やまは裂さけ海うみはあせなむ世よありとも

誠まことの道みちは踏ふみ外はづすまじ

速はや川かはの水みづに浸ひたれば自おのづから

吾わが魂たましひは清きよまる心地こころちす

主すの神かみの誠まことの道みちをあゆめども

楔みそぎの業わざは始はじめなりけり

天地あめつちの雲霧くもぎり汚けがれも拂はらふべし

楔みそぎの道みちの功いさをありせば

かく神々等は襖に餘念なき折もあれ、上流より生命を助けて呉れいと死物狂ひに叫びつつ半死半生の體となり、彼方此方の巖に頭を打ちつけながら、全身紅に染みつつ流れ来る一人の男あり。襖に餘念なかりしアヅミ王は目ざとくも打ち見やれば、豈計らむや、日頃敵とねらひしエールス王の無残なる姿なりけるにぞ、アヅミ王は吾身の危険を忘れて激流に飛び込み、半死半生のエールス王を脇に抱へ下流の稍水瀨弱き處へ救ひ來り、川の洲へ救ひ上げ、水を吐かせ種々様々と介抱なしける。シウランを始めナーマン、ターマン、ムラジ姫も、何人ならむと速瀨を横切り近付き見れば、吾本城を攻め落したるエールスなりければ、怨みを晴らし、城を取返さむは此の時なりと集り來り、荒石を搦んで打ち殺さむといきまき居る。

ムラジ姫は聲高らかに歌ふ。

㊦ 我がくに
我がくに 仇を爲したるエールスの
司の知死期心地よきかな

ナーマンは歌ふ。

㊦ 吾王を惱まし奉りし仇なれば

神の罰にあひしなるらむ

今こそは天の與へよ首打ちて

イドムの城を奪ひ還さむ

ターマンは歌ふ。

㊦ 荒川に楔なしたる報いにて

仇は吾手に入りけるかも

川の瀬の石を拾ひて此の仇を

打ちて殺さむ面白きかな

アヅミ王は右手を差し上げ、空中を押へる如き體をしながら、

☐ 待て暫しエールス王も主の神の

貴の御子なりただに許せよ

吾御靈神に離れし罪なれば

エールス王を怨むに及ばじ

エールス王は稍正氣付き、四邊をキヨロキヨロ見廻しながら、アヅミ王の吾前に立ち介抱せるを見て、聲高らかに笑ひ歌ふ。

☐ 吾生命何故ならば助けしぞ

吾荒行をよぎらむとするか

吾こそはエールス王よ腰弱き

汝に救はれ顔の立つべき

ムラジ姫は目を釣り上げて歌ふ。

心弱き吾王なるかもイドム城

奪ひし仇を許し給ふか

生命をば救はれ彼は逆しまに

譏り散らせり許し給ふな

アヅミ王は歌ふ。

悪らしと日頃思ひし仇ながら

艱める見れば助けたくなりぬ

とに角に仇の艱みにつけ入りて

報ゆる心は愧づべきものぞや

堂々と表に立ちて戦はむ

されど吾等は弓矢の要なし
主の神の生言靈を振りかざし
仇を言向け和さむと思ふ

ナーマンは歌ふ。

吾王の仰せ宜よと思へども
悪き仇をば許すべきやは
玉の緒の生命救はれ譏り言
吐くこの仇を如何で許さむ

ナーマンは歌ふ。

主の神の悪しみに依りて玉の緒の

生命危き汝にあらすや

救はれて荒き言葉を吐き散らす

汝は誠の曲津神なり

いざさらば石もて打たむエールスの

玉の生命の消ゆる處まで

茲にアヅミ王はエールス王の生命を救へよと頻りに嚴命すれども、怨み骨髓に徹したる他の司等は、この機會に打殺さむと四方八方より石を拾つて投げつければ、不思議やエールスの姿は水煙となりて水中に消えにける。アヅミ王を始め一行襖の面々は此の體を見て不思議の念に堪へやらず、茫然として水中を見詰めけるが、胸の廻り七八丈もあらむかと思はるる蛟龍、大口を開き紅き舌を吐き出しながら、一行の頭上に鎌首を立て、一呑みにせむず勢を示しける。

茲にアヅミ王は從容として少しも騒がず、四人の狼狽せる姿を靜かに眺めながら、

□ 一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 百 千 萬 □

と歌ひ行くにつれ、蛟龍の姿は次第々々に細り行きて、終には小さき蠨蛸となり、アヅミ王の足許に這ひ寄り來る。アヅミ王は蠨蛸を掌に載せ、再び天の數歌を宣りければ、掌よりシューシューと煙立ち昇り、見る見る天に沖し、煙の中より灰かに見ゆる龍の姿以前に優る巨體なりける。何處ともなく神の聲あり、雷の如く響き來る。

□ 美しきアヅミの王の魂を

主の大神は諾ひ給へり

汝が心清まりぬれば百日の

楔は濟みぬはや歸りませよ

吾こそは高日の宮より天降りたる

神銚神ぞ心安かれ □

アヅミ王は恭しく歌ふ。

有難し吾魂をみそなはず
神の言葉に蘇りたり

空中より再び神の聲あり。

高光の山の尾の上の神苑に
神銚の神御霊とどめむ

アヅミ王は神の御殿に仕へつつ

イドムの國の基を定めよ

ムラジ姫の心は未だ汚れたり

百日の楔の功は消えたり

シウランやナーマン、ターマン三柱の

楔みそぎは水みづの泡あわとなりけり

改めてあらた百日ももかの楔みそぎに仕つかふべし

月光山つきみつやまは聖所すがどなりせば〇

茲ここにアヅミ王わうは三日みつかの楔みそぎにて許ゆるされ、月光山つきみつやまの神しん殿でんに奉ほう仕しし、國こく政せいを見みる事こととなり、ムラジ姫ひめ以下いかは改めてあらた百日ももか百夜ももよの荒行あらぎやうを命めいぜられ、月光山つきみつやまの神しん殿でん及び政務せいむに仕つかふることを許ゆるされにける。

(昭和九・八・四 舊六・二四 於伊豆別院 森良仁謹録)

第六章 月見つきみの宴えん〔二〇三三〕

イドムの城しろは風光絶佳ふうくわうぜつかの勝地しょうちにして、東北とうほくを流ながるる水乃川みなのがはは大榮山おほさかやまの溪たに々の流ながれを集あつめて川幅かはば廣ひろく淙そう々そうたり。

サールの國王エールスは、大榮山を乗り越え、大兵を率ゐて不意にイドム城を
占領し、數多の從神と共に此處に住みけるが、大榮山北面のサールの國の風光に
比べて住み心地よく、春夏秋冬恰も花園に住む心地して、地上の天國の生活を樂
しみける。

月は蒼空に皎々として輝き、蟲の音清しき夕べ、水乃川に面せる大殿の窓を押
し開き、川の面を瞰下しながら、軍師を初め左守、右守その他の重臣等と月見の
宴を開き、水乃川の水面に浮ぶ月をほめながら、恍惚として美酒美食にあきゐた
りける。

エールス王は水乃川の夜の流れを見やりながら歌ふ。

北の國サールの都を立ち出でて

イドムの城に吾は酒酌む

春もよし夏も亦よし秋もよし

イドムの國は地上の天國

イドム城主アヅミを追ひ散らし

武勇を天下に現はしにけり

吾武勇伊佐子の島に傳はりて

四方の木草も吾になびけり

村肝の心にかかるは月光の

山にひそめるアヅミ王なり

待て暫し百の軍をととのへて

月光山の砦をはふらむ

眞珠を涙に造る眞珠湖の

人魚をとりてなぐさまむかな

水乃川流るる月日の光見れば

眞珠の玉にさも似たるかな

山も野も青く清しく鳥の聲

蟲の音冴ゆるイドムの城かも

世の中よなかに樂たのしきものは國くにひろめ
戰いくさの道みちの勝利しょうりなりけり
吾われは今いま伊い佐さ子ごの島しまを統すべ守まもり
國くに津つ神かみ等らの王きみとなりけり ㊦

サツクス姫ひめは歌うたふ。

㊦ 吾わが王きみの謀はかり計ごと皆みな圖づに當あたり

イドムの城しろは吾わが手てに入いれり

春はる夏なつの眺ながめ妙たへなるこの國くにの

主あるじとならす王きみの雄を々をしさ

アヅミ王わうの夢ゆめを覺さまして水みな乃のが川はに

靜しづかに浮うかぶ月つきと日ひのかけ

魚うろ族くづの遊あそべる様さまの明あきらかに

この高殿たかどのゆ見みゆる廣川ひろかは

眞珠湖しんじゆこの人魚にんぎよをとりてこの川かはに

放はなちて見みれば面白おもしろかるらむ

さるにてもアヅミの王わうは必かならずや

イドムの城しろを窺うかがひゐるらむ

アヅミ王わうの砦とりでをはふり月光つきみつの

山やまを追おはずば心こころもとなし

夜よるされば枕まくらを高く安やすらかに

寝いねむと思おもへばアヅミ王わうを滅ほろぼせ

豊ゆたかなるイドムの國くには月光つきみつの

山やまの砦とりでに黒雲くろくも迷まよふ

月つきも日ひもさはやかに照てるイドムの國くにの

黒雲くろくもなるよ月光山つきみつやまは

〆

左守さもりチクターは歌うたふ。

☐ 天あめケ下の風ふう致ちにとめるイドム城じやうに

王きみと酒さけ酌くむ今こよひ宵ひの樂たのしさ

月つきも日ひも清きよく流ながるる水みな乃のが川は

瞰みおろ下みすこれの館やかためでたき

月つきも日ひも眞ました下なを流ながるるこの城しろは

紫し微びの宮みや居ゐにまがふべらなる

紫し微びの宮みや如いか何かに清すがしくありとても

イドムの城しろに及およばざるべし

吾わが王きみは主すの大神おほかみよ左守さもり吾われは

高たか銚ほこの神かみ右守うもりは神かみ銚ほこ

主すの神かみは高たか銚ほこ神かみ銚ほこ二柱ふたはしら

從したがへイドムの城しろに天あ降もらせり

かかる世にかかる目出度き國を得て

四海に臨む王は主の神

右守のナールスは歌ふ。

心得ぬ左守チクターの言葉かな

神を無視せることの恐ろし

人の國力に奪ひほこらかに

神に擬ふは畏れ多きよ

主の神を齋き奉りて朝夕に

仕へざりせば國は滅びむ

エールスの吾王始めチクター等

心かへずば過ちあらむ

吾言葉諾ひ給ひて今日よりは

主スの大神おほかみを敬うやまひ給たまへ

王きみの手てにイドムの城しろは入いりたれど

未まだ爰まらぐべき時ときは來きたらじ

國津神くにつかみの心こころは未いまだ吾王わがきみの

心こころのままに從したがはざるべし

吾王わがきみの威力ゐりよくに服ふくしたるのみぞ

心こころの底そこより服まつろひ居をらじ

この城しろは美うつくしけれど國津神くにつかみの

恨うらみの的まととなりしを知らずや
』

エールス王わうは憤然ふんぜんとして面かほ色いろを變かへながら歌うたふ。

☐ ナーリスの禮みやなき言葉ことば聞きくにつけ

吾心わがこころ持もち尖とがり初そめたり

大榮山の嶮を越えたる吾なれば

汝が言葉は杞憂なるべし

イドム城は吾にかなへりとこしへに

これの勝地に住まむと思ふ

村肝の心にかかるは故郷の

サールの國よ吾子を思へり

明日よりはサールの國に立ち歸り

城をかためて固く守れよ

諸々の司を束ねナーリスは

サールの國の安きを守れ

この國は左守のチクター、エーマンの

軍師のあれば安けかるらむ

右守のナーリスは歌ふ。

㊦ 吾王の御言畏み今よりは

サールの國に急ぎ歸らむ

吾王よサツクス姫よゆるみなく

イドムの國に臨ませ給へ

王の威に恐れて數多の司等は

心ならずも從ひ居るぞや

すきあらば百の司は立ち上り

王を襲はむと謀らひ居るも

村肝の心驕りて思はざる

なやみに遇はせ給ふまじ王

エーマンは歌ふ。

㊦ 吾王の軍を率ゐ漸くに

イドムの國を服へやはしぬ
吾王の御稜威と吾等が軍略に

イドムの城は陥りにけり

イドム王アヅミの臣數多く

ひそみてあれば心許せじ

さりながら軍師エーマンのある限り

吾王安く穩にまませ

幾萬の敵の一度に攻め來とも

吾戰略に討ちこらし見む

エールス王は欣然として歌ふ。

エーマンの言葉吾意にかなひたり
かたく守れよイドムの國を

夜よな夜よなに月つきの流ながるる水みな乃の川がは
ながめて吾われは酒さけ酌くまむかな
』

サツクス姫ひめは歌うたふ。

』 エーマンの嚴いづの言こと靈たま勇いさましし

右守うもりの心こころと裏表うらおもてなる

吾王あがきみの旨むねをそこなふナーリスは

國くにに歸かへりて世よを固かためよや
』

ナーリスは歌うたふ。

』 いざさらば國くにに歸かへらむ吾王わがきみの

いますイドムの城しろを離はなれて
』

かくてナーリスはエールス王始め一同に暇を告げ、月下の原野を四五人の従者と共に馬に鞭うち、大榮山の頂さしてサールの故國に歸らむと急ぎける。

エールス王は誠忠無比なる右守のナーリスが言葉を忌み嫌ひ、チクターやエールスの奸佞邪智なる贗忠臣の言葉を喜び、常にナーリスに對して心中おだやかならざりけるが、餘り住心地よからぬサールの國の守りとして右守を追ひ歸し、故國を守らしむることとなり、右守は遠く膝下を離れ大榮山を越えて歸りければ、王の機嫌はこの上なく、晝夜の區別なく國內の美しき女神を集めて、詩歌管絃の快樂に耽る事となりぬ。

軍師のエーマンも、左守のチクターも、共に國務を忘れて歡樂に耽り、恰もイドム城は青樓の如き感を呈しけり。

満月の空に輝く夕、エールス王はサツクス姫を始め、左守のチクター、軍師エーマンその他の司を一堂に集め、數多の美人に酌をさせながら心地よげに歌ふ。

□ 僕はサールの都の主

今はイドムの王となる

月は皎々青空渡る

吾はいういう酒を酌む

月の浮かる水乃の川を

見つつ酒酌むイドム城

右守ナリス故國へ歸し

胸の雲霧晴れ渡る

伊佐子島根を二つに横ぎる

大榮山脈なけりやよい

山がなければサールが見える

サール戀しく姫思ふ

國に残せし七人をとめ

さぞや待つだる歎くだる

あまた臣をサールに残し

吾われは伊いドムドムの城しろに住すむ

空そらは青あを々あを底そこひも知しれぬ

星ほしの眞まさ砂ごのきらきらと

伊いドム城じやうし址しのヅミミの王わうは

生いのち命ちからがら月つき光みつ山やまへ

月つき光みつ山やまにはアアヅミミがこもる

どいうちどで一いち度どは涙なみだ雨あめ

人にんぎよ魚よ棲すむてふ眞しん珠じゆの湖うみへ

ううかかぶぶ眞しん珠じゆの月つきの光かげ

世よにも名な高たかき伊いドムドムの城しろも

今いまは吾われ等らが住すみどころ

伊い佐さ子こ島しま根ねは廣ひろしと言いへど

おおななじじ月つき日ひの光かげ拜をがむむ

と頗る上機嫌である。

サックス姫は又歌ふ。

真珠湖水の人魚をとりて

真珠吐かして遊びたい

望の月照るこの高殿に

真珠みたよな星が照る

月は追ひ追ひ御空を高く

昇り昇りて夜が更ける

水乃川の河鹿の聲は

王の威勢をうたふてる

王の威勢にイドムの城は

陥ちて涼しき月が照る

野邊を吹き来る夏夜の風に

のりて出で来る蟲の聲

花の香りは吹く夏風に

城の中まで吹いて来る

春は花咲き夏さり来れば

月の澄みきるイドム城

月の流る水乃の川は

朝夕べに蟲が啼く

清き流れの水乃の川は

いく日見るともあきはせぬ

秋の月夜の水乃の川は

さぞや涼しかる清しかる

左守のチクターは歌ふ。

王きみの御稜威みいづの御光みひかり受うけて
今日けふはイドムの月つきを觀みる

山やまは大榮おほさかなが流れは水みな乃

城しろはイドムよ空そらに月つき

月つきは出でた出でた東ひがしの山やまを

雲くもが悋氣りんきで影かげかくす

十重とへに二十重はたへに包つつめる雲くもを

分わけてのぞいた月つきの顔かほ

雲くものとばりをそと引ひき開あけて

月つきがのぞいたイドム城じやう

水みづは淙々そうそう常磐ときはの流れなが

王きみは隆々りうりう世よを治しらす

この世よからなる天國てんこく住すまひ

夢ゆめか現うつかおもしろや

日頃企畫し思ひは晴れて

今はイドムの城に住む

蟲の啼く音も小鳥の聲も

王の千歳を歌ふてる

姿清しきサツクス姫の

花の顔月が照る

花は櫻か牡丹か百合か

王の御側の花がよい

蝉のなく音も河鹿の聲も

今日のお酒の肴ぞや

エーマンは歌ふ。

右守ナーリス、サールに歸り

今いまは此この世よの鬼おにはない

右守司うもりつかさの日頃ひごろの言葉ことば

いつも私わたしの癩しやくとなる

雲くもを拂はらふたイドムの城しろは

晴はれて清すがしき秋あきの月つき

月つきは御空みそらを水みな乃のの川かはに

清きよく清すがしく冴さえ渡わたる

上うへと下したとに月影つきかげながめ

王きみの御側みそばで酒さけを酌くむ

戦争いくさするより働はたらくよりも

月つきに酒酌さけくむおもしろさ

死しんで花身はなみが咲さかぬと聞きけば

生いきて物言ものいふ花はなに酔よふ

宵よひの月光つきかげながめて酒さけに

酔よふてよいよい夜よるの花はな

夜よるの花はなをば手た折りてここに

天津御國あまつみくにの酒さけに酔よふ

空そらに聳そびゆる大榮山おほさかやまの

上うへに湧わき立つ雲くもの峰みね

ながめゐる間に姿すがたの變かはる

雲くもの峰みねかよ吾心わがこころ

酒さけと物もの言いふ花はなさへあれば

たとへお城しろは滅ほろぶとも

アヅミ、ムラジの住すまひし城しろに

月つきを見みながら酒さけびたり㊦

エールス王わうは立たち上あり、エーマンをしつかと睨にらみ、
酔眼朦朧すいがんもうろうとして歌うたふ。

㊦ エーマンの言葉禮なしこの城の
滅ぶと言ひしそのたはごとは
とこしへに榮あれよと祈るこそ
汝が日頃の務めならずや
斯くの如き心を持ちて吾軍の
司とするは危かるべし ㊦

エーマンは恐る恐る歌ふ。

㊦ 吾王よ許し給はれ吾宣りし
言葉は酒の戲言なりしよ
酒と言ふ奴に心を奪はれて
あらぬ事をば口走りつつ
吾王の御代安かれと朝夕に

戦争の業をはげむ吾なり
願はくば廣き心に宣り直し
許させ給へ禮なき言葉を

サツクス姫は仲をとりて歌ふ。

吾王にこひのみ申すエーマンが

禮なき言葉を許し給はれ

エーマンは酒癖悪き男故

心にもなきことを吐くなり

エーマンの清き心は豫て知る

吾言わけを許しませ王

さしも賑はひたる月見の宴席は、
エーマンの脱線歌にエールス王の憤激となり、

一座は興ざめ、しらけ切つたるまま夜は深々と更けわたり、宴席は閉ぢられにける。

さりながらエールス王の怒りは漸くにとけ、エーマンは何の咎めもなく、元の軍師の職に異動なかりける。

（昭和九・八・五 舊六・二五 於伊豆別院 谷前清子謹録）

第二篇 イドムの嵐

第七章 月音し〔二〇三四〕

地上の樂土と聞えたる

イドムの國も秋さりて

四方の山野は錦織り

吹き來る風は爽かに

蟲の啼く音も清しくて

天津御國の思ひあり

大榮山の百樹々は

錦の衣着飾りて

天津御空に峙ちぬ

この麗しき大榮の

百谷千溪の清流を

集めて流るる水乃川

川幅廣く水蒼く

底ひも知らぬ深淵の

岸邊に壁立つ巖ヶ根は

神の斧もてけづりたる

如き奇勝の其の上に

映ゆる紅葉の麗しさ

松の縁をちりばめて

小鳥囀り蟲は啼き

夕さり來れば月宿る

イドム唯一の絶勝地

ここに遊べる艷人は

新たにイドムの城主となりし

エールス王を初めとし

サックス姫やチクターの

外に供人なかりけり

淵瀨に寫る月光を

あかなく見つつ酒酌み交し

歡喜を盡しむたりける。

エールス王は、ほろ酔ひ機嫌にて、水面に寫る月光を眺めながら歌ふ。

宵々を酒酌み交し宵の月

酔をさまして流るる川水

この淵に人魚の棲むと人のいふも

うべなり水底も見えぬ深淵

紅に照る紅葉も夕されば

かげ黒々と水にうつろふ

月かげに描ける巖のかげ見れば

淵も紅葉も一つ色なり

麗しき天國淨土に住む心地

しつつ天地の恵みによふかな

酌くむ酒さけの味あぢも一入ひとしほかんばしし

月つきの流ながるる水面みのも眺ながめて

泡あわだ立ちて流ながるる水みづはしろじろと

眞まだま玉たまかがよふ月つきの光ひかりに

小夜さよ更ふけて蟲むしの音ね細ほそくなりつれど

館やかたに歸かへらむ心こころ起おこらず

飲のめよ飲のめ騒さわげよ騒さわげ世よの中なかは

光ひかりと闇やみのゆき交かふ世よなれば

月影つきかげの水みづにうつろふ清すがしさに

戀こひしくなりぬ水みな乃のの川かはなり

大榮おほさかの山やまより落おつる水みな乃の川の

汀みぎはに棲すめる河鹿かしかの聲こゑ々こゑ

星影ほしかげを流ながして澄すめる水みな乃の川の

眞砂まひしは白しろし月つきに照てらひて

サツクス姫は歌ふ。

わが王の御供に仕へて水乃川

流るる夜半の月を見しかな

春もよし夏もよけれど秋月の

流るるさまは一入さやけし

水乃川瀬筋流るる月影は

千々に碎けて面白きかな

静かなる月にはあれど瀬の波の

谷間に碎けてうつるふかげかな

右左波にさゆるる月光は

世のさまさまのあかしなりけり

チクターは杯を捧げながら歌ふ。

王きみにしたが従したがひかへた壁かへた立たついは巖いはに

坐ざしてつきみ月見つきみのさけ酒さけをく酌くむ

蟲むしはな啼なくな啼なくかじか河鹿かじかはうたふうたふ

月つきはなみま波間なみまにぶたう舞踏ぶたうする

山やまはおほさか大榮おほさか人魚にんぎよはしんじゆ眞珠しんじゆ

月つきのなが流ながるみなのがは水乃川みなのがは

上うへとした下したとあきづきになが秋月あきづき眺ながめ

紅もみぢ葉て照てるよ夜よにさけ酒さけをく酌くむ

松まつももみぢ紅もみぢ葉もみぢもかげ影くろ黒くろ々と

川かはのおもて面おもてをえが描えがいててるる

松まつのこすゑ梢こすゑにつきす月澄つきすみわた渡わたり

酒さけにそ染そまりかほもみぢしかほもみぢ顔かほもみぢ紅もみぢ葉もみぢ

月つきはかうかう皎々かうかう御空みそらにす澄すめどど

戀こひにくも曇くもりこころしこころわがこころ心こころ

戀こひの黒雲くろくも吹き拂はらはむと

壁立かべたつ巖根いはねに月見酒つきみざけ

吹ふけよ川風かはかぜうたへよ河鹿かしか

月つきに酒酌さけくむ男をとこあり

王きみは勇いさまし高山たかやま越こえて

イドムの主あるじと住すみ給たまふ

澄すめる月光つきかげ流ながる川かはの

岸きしに酒酌さけくみや蟲むしが啼なく
□

エールス王わうは機嫌斜きげんななめならず、チクターの歌うたに釣つり出だされ、酒さけに足あしをとられ、よ
ろよろしながら常磐樹ときはぎの松まつに片手かたてを掛かけ、ロレッツも廻まはらぬ舌したもて歌うたふ。

□ 心地ここちよきかなイドムの城しろは

花はなと紅葉もみぢのすみどころ

花は千咲く成る實は一つ

心もむなよわが妻よ

酒に酔た酔た一升の酒に

川の流れも目に入らぬ

月は照れどもわれより見れば

邊り眞暗眞の闇

西も東も分らぬまでに

酔ふて苦しき月見酒

月の露ほど美味酒飲んで

酔ふて苦しむ川の側

小夜更けて蟲の啼く音も細々と

早く館へ歸りたい

サツクス姫は歌ふ。

㊦ 王きみの言葉ことばは聞きえませぬよ

此處ここもあなたあなたの治しらす國くに

館やかたばかりが家いえではないに

館やかたこがる王きみをかし

川かはの瀬音せおとに耳みみすませつつ

明日あすの朝あさまで待まちませう

チクターは歌うたふ。

㊦ 前まへも後うしろも分わからぬまでに

王きみは酔よはすか面白おもしろや

姫様ひめさまよ日頃ひごろの謀計たくみ今いま此この場所ばしよで

やつて見みなされ戀こひの爲ため

悪わるい事こととは知しつては居をれど

戀の爲には是非もない□

エールス王は、妻のサックス姫と左守のチクターとが深き戀仲となつてゐる事は夢にも知らず、兩人におびき出され、無性矢鱈に酒を飲み、前後も分らずなれるを見澄まし、チクターはサックスに目配せするや、戀の惡魔にとらはれしサックス姫は、時こそ到れりと、エールス王の背後に立ち廻り、全身の力を籠めてウンとばかり突き落とし、何條以て堪るべき、エールス王は壁立つ崖よりザンブとばかり突き落され、水泡となりて消えにけり。

サックス姫は、いやらしき笑を浮べ、水面を眺めながら、

□ 天地も一度にひらくる心地かな

わが仇雲は水泡となれり

わが王と敬ひ仕へまつりたる

人は水泡となりにけらしな

大空おほぞらに輝かがやき給たまふ月影つきかげを

仰あふげば何なにか恐おそろしきわれ

さりながら月つきは語かたらじ川水かはみづは

今宵こよひのさまを傳つたへざるべし

蟲むしの音ねも河鹿かじかの聲こゑも何なんとなく

われは寂さびしくなりにけるかも

さりながらチクターの君きみと今日けふよりは

親したしく住すまむと思おもへば樂たのし

チクターは歌うたふ。

恐おそろしき姫ひめにますかも背せの君きみを

川かはに落おとして微笑ほほゑますとは

われも亦また第二だいにのエールス王わうなるかと

思へばにはかに恐ろしくなりぬ
如何にせむかくなる上はわが王の
行方知れずと世に知らすべきか
病氣に打ち伏し給ふと世の中に
しばしのうちを傳へ置かむか

サツクス姫は歌ふ。

心弱き事を宣らすなわが王を

水泡とせしは汝ならずや

直々に手は下さねど汝が心

わが手をかりて殺したるなり

天地の神の御前に恐ろしと

思ふ心を打ち消し給へ

チクターは歌ふ。

わが王は酒に酔はせて水乃川の

淵に落ちしと世に知らすべし

かくすれば吾等に疑ひかかるまじ

隠すは却りて露はるもとよ

いざさらば急ぎ歸りて城内に

王の溺死を報告爲さむ

サックス姫は歌ふ。

われわれの謀計全く圖に當り

憐れエールス水屑となりぬ

いざさらば急ぎ歸らむイドム城へ

長居は恐れよ人目なくとも

かくて兩人は、何喰はぬ顔にてイドム城に歸り、酒に酔ひつづれたる風を装ひ、
群臣を一間に集めて、エールス王の訃音を傳へむと歌ふ。
サツクス姫。

水乃川流るる月を見ながらに

わが背の君と酒を酌みつつ

背の君は月見の酒に酔ひつづれ

よるめき淵瀨におちさせ給へり

チクターは素裸體となり深淵に

飛び入り探せど御影見えず

暇どらばことぎれやせむと吾も亦

水中に飛び込み王をさがせり

おほそら つきは 照れども 夜なれや

王の御影見るよしもなし

汝等に知らず間にことぎれむと

二人は生命から探ねし

わが王の身を果敢なみて涙ながら

急ぎ館にわれ歸り來し

汝等水乃の川に立ち入りて

水底を潜り探ね來れよ

平和なるイドムの城も黒雲に

包まれし如われは悲しき

チクターは歌ふ。

姫君の仰せの如く川の瀬を

潜り探せど御影なかりき

生命にもかへて尊き吾王の

あはれ行方は見えぬなりけり

如何にしてサツクス姫の御心を

慰めむかと心碎きぬ

姫君の歎き思へばわれも亦

生命いらなく思ひけらしな

司等は數多の人を水乃川の

上津瀨下津瀨に配り探させよ

夜中の事ながら、軍師のエーマンは急ぎ登城し、二人の様子を見て頭を傾け、
無言のまま黙し居たりける。諸々の司等はエールス王の死體を求めむと、
鼓を打鳴らし、群集を集め水中隈なく搜索の結果、壁立つ巖根の深淵に、
王の死體を發見し、型の如く盛大なる土葬式を行ひける。

これより、サツクス姫は女王として君臨し、チクターは依然として左守を勤め、
兩人が心の秘密は一人として知るもの無かりける。

(昭和九・八・五 舊六・二五 於伊豆別院 林彌生謹録)

第八章 人魚の勝利〔二〇三五〕

大榮山の南面の中腹には廣き平地ありて、東西二十里、南北十里の潮水漂ひ、
眞珠の湖と稱へられて居る。

此の湖水の周圍には數多の人魚棲み、殆んど國津神と同様の生活を爲し、よく
物を言ひ、人魚郷をつくりて、南にあるを南郷と言ひ、北にあるを北郷と言ひ、
東にあるを東郷と稱し、西を西郷と稱へ、人魚の群は此の湖水を永久の棲處とし
て、魚貝を餌食とし、他よりの國津神の侵入を防ぎ、天地の恩澤を樂しみ居たり
ける。

かかる平和の神仙郷も、時々イドム王の部下襲來し來りて、人魚の乙女を捕へ
去る事一再ならざりければ、茲に人魚の王は首を鳩めて協議を凝らし、國津神の
襲來に備へむとして、後先の鋭く尖りたる貝殻を空地なくつきたて、襲ひ來る敵
の足を傷つけむと防禦線を張り居たりける。

或時人魚の王は、此の湖水の中央に突出せる眞珠島に集りて、湖面に浮ぶ月を
眺めながら一夜を明しつつ互に歌ふ。

東郷の酋長春野は歌ふ。

天地の神の恵に生り出でし

これの湖水は永久の苑なり

大空の月を浮べて波靜か

輝く湖の廣くもあるかな

かくの如吾等は清き湖に

人魚となりて年ふりにけり

風吹けど雨は降れども此の湖は

波の秀さへも立たぬ静けさ

春夏の眺め妙なる此の湖に

大榮山の錦うつるふ

大榮山溪の清水は此の湖に

少しも入らず落ちたぎつなり

此の湖は龍宮海に續けるか

湖水ながらも潮水なりけり

不思議なるこれの高處に潮湧く

湖水は神の賜物なるらむ

百年をこの湖にやすらひて

思ふ事なき吾等が暮しよ

折々は神仙郷なる此の湖に

襲ひ來るなり國津神等は

國津神假令幾萬寄せ來とも

吾等は飽くまで戦はむかも

天津日は終日輝き月舟は

終夜照る眞珠の湖よ

南郷の酋長夏草は歌ふ。

人の面持ても未だ身體は

淺ましきかな鱗覆へば

さりながら神の恵に抱かれて

煩ひもなくすむは嬉しき

安らかに眞珠の湖に育ちたる

吾等は悩み知らざりにけり

恐ろしきイドムの王の手下等は

吾等われらが輩やからを奪うばひて歸かへるも

如何いかにして吾等われらが仇あだを防ふせがむと

朝あさな夕ゆふなに心碎こころくだくも

さりながら此この湖みづうみは深ふかければ

吾等われらは水底みそこ潛くぐりて遁のがれむ

時折ときをりは陸くがに上のぼりて眠ねむる間まを

忍しのび來きたれる仇あだに捕とらはる

明日あすよりは人魚にんぎよは汀みぎはに眠ねむらずて

湖中こちうに浮うかび休やすらふべきかな

悠々いいうと波なみに浮うかびて魚族うろくづを

食くひて生いくるは恵めぐみなりけり

天地あめつちの恵めぐみ忘れし輩やからのみ

生命いのち奪うばはれ苦しむなるべし

吾等われらとて主スの大神おほかみの御賜物みたまもの

神かみは必かならず守まもりますらむ

イドム城じやうはサールの王わうの現あらはれて

破やぶれしと聞ききぬ吾等われらが敵かたきは

わが輩やからの眞珠しんじゆ持もてりと争あひそひて

此この湖みづうみに忍しのび來くるなり

サール國こくのエールス王わうは心こころ荒あらき

神かみとし聞きけば安やすからず思おもふ

兔とにもあれ角かくにもあれや波なみの上へに

澄すむ月光つきかげを眺ながめて明あかさむ

月つき見みれば歎なげかひ心こころ消しえゆきて

春野はるのに咲さける花はなを思おもふも

花見はなみむと陸くがに上のぼりて捕とらはれし

輩やから思おもへば悲かなしかりけり

春はるさればわがともがらは次々つぎつぎに

捕はれにけり油斷の心に

西郷の酋長秋月は歌ふ。

天蒼く湖また青き真中に

浮べる眞珠の島に酒酌む

御空ゆく月の光に照らされて

此の湖原は眞白に映ゆるも

波の間に出没するはわが輩

御空の月を仰ぐなるらむ

八千尋の湖底までも照り透す

月の光の偉大なるかな

闇の夜は汀邊に輩集まりて

歌と踊りに夜を明すなり

人魚等の歌ふ聲々波の間に

こだまなしつつ夜は明けにける

大榮の山の紅葉を仰ぎつつ

湖水に浸る秋は樂しき

秋月は大榮山に照り映えて

錦に映ゆる眞珠の湖原

波の色朱に染めつつ大榮の

山の紅葉は照り渡るなり

北郷の酋長冬風は歌ふ。

冬されど此の仙郷は暖かし

大榮山は北に峙つ

大榮の山嶮しければ國津神は

此の仙郷に来る少なし

吾棲める北の郷には人魚とる

仇も来らず安く過ぎ行く

若しや若し敵の来らば人魚等を

ことごと吾等が郷に集めよ

斯く歌ふ折もあれ、イドム城の女王サツクス姫は、數百の騎士を従へ、大榮山

の急坂を鬨を作りて登り来り、一網打盡に人魚の群を襲ひ捕獲せむとのぼり来る。

この物音に四人の酋長は、スハ一大事、人魚の輩悉く北郷に集めむと、泳ぎの

早き人魚を東西南の三郷に遣はし急を報じければ、數萬の人魚はわれ遅れじと深

き水底を潜りて、一人も残らず北郷にかたまり、いづれも聲を潜めて敵の襲來を

遙かに眺めつつありける。

四人の酋長は眞珠島の巖頭に立ち、悠然として敵の襲來を眺め居たり。

サツクス女王の指揮のもとに、數百の騎士は東西南の三郷に陣取り、湖水を圍

みて擦鉦太鼓を打ち鳴らしつつ、山も碎けむばかりの勢にて襲ひ來り、人魚の影の一つも湖面になきに失望し、各々馬上ながら湖中に飛び入り、馬をたよりに捜すれども、東西南の三郷附近には一つの人魚も見當らず、遂には馬疲れ、湖中に溺るるもの多くなりければ、さすがのサツクス女王も、すごすごと岸邊に引き返し、馬の疲れを休め、自分もまた顔青ざめて太き息を吐き居たり。
サツクス女王は聲も細々と歌ふ。

月澄める眞珠の湖に來て見れば

波ばかりにて人魚の影なし

此の湖に永久に棲む人魚等は

如何なりしか吾いぶかしき

潮水に飛び込み進みしわが騎士の

その大方は溺れ死したり

人魚等は水底深く潛みつつ

駒こまの脚あしをばひけるなるらむ

斯かくならば駒こまは詮せんなし木きを伐きりて

獨木まるきの舟ふねを造つくり進すすまむ

茲こゝに生いき残のこりたる騎士ナイト等は、湖邊こへんに立たてる數多あまたの大木たいぼくを伐きり倒たふし獨木舟まるきふねを造つくりて、七日七夜なぬかななよの丹精たんせいをこめ漸やつやく數艘すうざうの舟ふねを造つくり、眞珠しんじゆの島しまに渡わたり酋長しうちやうを捕縛ほばくし、人魚にんぎよの在處あrikaを自白じはくさせむと、茲こゝに數十人すうじふにんの騎士ナイトは獨木舟まるきふねに棹さをさし權かいを操あやつりながら、稍廣ややひろき眞珠しんじゆの島しまへと進すすみ行ゆく。勿論もちろんサツクス女王ぢよわうもその舟ふねに安やすく坐ざしてありける。

四人よにんの酋長しうちやうは寄よせ來きたる舟ふねを遙はるかに見みながら、悠々いういうとして騷さわがず急あせらず眺ながめ入いる。北郷ほくきやうの酋長しうちやう冬風ふゆかぜは、三人さんにんと何なにか謀しめし合あはせ居ゐたりしが、忽たちまち湖中こちうに飛とび込こみ、水みな底そこを潛くぐつて北郷ほくきやうに急いそぎ歸かへり、數萬すうまんの人魚にんぎよに急きふを告つげ、且かつ一齊いつせいに敵てきに向むかつて必死ひつしの力ちからを加くはへ殲滅せんめつせむ事ことを訓示くんじした。

酋長しうちやうの言葉ことばに數萬すうまんの人魚にんぎよは勢いきほひを得え、日頃ひごろの仇あだを報むくい、禍わざはひの根ねを斷たつは此こゝの時ときと、

固唾を呑んで控へ居る。

サツクス女王は勝ち誇りたる面もちにて、
獨木舟を漕がせながら、月照り渡る
眞珠の湖原を眺めて歌ふ。

『あはれあはれ心地よきかな吾は今

眞珠の島を占領せむとす

人魚等の寶の眞珠を集めたる

島根は夜ながら輝きにけり

幾萬の眞珠の光かたまりて

月の光も褪せにけらしな

幾萬の人魚はいづれに逃げしぞや

吾等が威勢に驚けるらし

面白し月の浮べる湖原に

眞珠の島を取らむと出で行く』

春野は遙かに此の體を見て歌ふ。

玉の緒の生命知らずの出で立ちを

見つつあはれを催す吾なり

欲深く眞珠の玉に目が眩み

生命捨つると思へばいぢらし

北郷に手具脛ひきて待ち待てる

人魚の力を恐れざるらし

森閑としづまりかへる湖原に

やがて血汐の雨は降るらむ

心地よき今宵なるかも祖々の

仇を報ゆる時は來にけり

サックスはイドムの國を奪ひ取り

夫の生命をとりしくせもの

サツクスの悪魔は尚も飽きたらで

吾等が寶を奪はむとすも

限りなき欲につられて玉の緒の

生命を捨つるは淺はかなるかな

南郷の酋長夏草は歌ふ。

夏草の茂みを分けてのぼり來る

ナイトは死出の旅をするかも

わが輩影なきを見てナイト等は

馬諸共に湖中に驅け入りぬ

駿馬は疲れはてけむ力なく

人もろともに溺れ死したり

次々に溺るるを見てサツクスは

陸くがに向むかつて逃にげゆくをかしさ
駿馬はやこまの嘶いななきを知しりてサツクスは
汀みぎはに竝なみき木を伐きり倒たふしたり
七日なぬかななよまるき七夜ふね獨木つくの舟を造り了をへて
渡わたり來くるかも生命いのち知らしずに
近ちかよ寄よらば眞珠しんじゆの岩いはを投なげつけて
仇あだごと悉とく打うち殺ころすべし四

西郷せいきやうの酋長しうちやう秋月あきづきは歌うたふ。

面おも白しろき世よとはなりけり居ゐながらに
仇あだを滅ほろぼす今宵こよひとおもへば
水すい中ちゆうに力ちからを保たもつわが輩やから
捕とらへむとする愚おろかさを思おもふ

愚なるサツクス王の手下等を

水の藻屑と葬り去らむ

面白しああ勇ましし吾敵は

眞珠の島根近く寄せたり

斯く歌ふ折しも、サツクス女王の一行數十人は島に近寄らむとするや、三人の酋長は此處を先途と、眞珠の岩を頭上に高くささげ、寄せ来る敵に向つて岩石落しに投げつくれば、何條以て堪るべき、舟諸共に湖中に残らず沈没し、湖の水泡と消えにける。

北郷に集りし數萬の人魚は、「ウオーウオー」と一齊に歡聲を擧げ、爲に天地も崩るるばかりなりける。

イドムの城を占領し、エールス王を謀殺し、戀の勝利者ときめき渡り、豪奢を極めたりし惡虐無道の張本サツクス女王も、天運いよいよ盡きて水の藻屑となりけるぞ天命恐ろしき。

これより眞珠の湖の人魚の群に向つて攻め寄するもの跡を斷ち、永遠の神仙郷として人魚の群は榮えけるとなむ。

(昭和九・八・五 舊六・二五 於伊豆別院 白石恵子謹録)

第九章 維新の叫び〔二〇三六〕

伊佐子の島の北半を 暴力もちて治めたる

サールの國の國王は 大榮山をのり越えて

數多の兵士引率し 地上の樂土と聞えたる

イドムの城に攻め寄せて 國王其の他を追ひ散らし

鳥なき里の蝙蝠と 羽振りをきかし居たりしが

天は何時まで暴虐の エールス王を許すべき

忽ちわが身の膝下より 火焰の炎は湧き立ちて

流れも清き水乃川 岸邊に壁立つ巖の上

心許せしその妻に きびしき酒を進められ

歩みもならぬたまゆらを 妻の命に背を押され

ザンブとばかり水中の 泡と消えたるあさましき

ここに王妃のサックスは 左守の神のチクターと

人目をさけて忍び會ひ 戀の勝利を誇りしが

なほあき足らず眞珠湖の 人魚をとらむと思ひ立ち

數百のナイトを引き具して 眞珠の湖に押し寄せつ

旗鼓堂々と迫りしが 人魚の酋長の計略に

かかりて脆くも失せにける サックス姫を始めとし

左守のチクター言ふも更 幾百のナイトは悉く

眞珠の湖の魚族の 餌食となりしぞあさましき

ここにイドムの王城は 肝心要の司をば

失ひ忽ち常闇の　　さまを詳にあらはせり
百の司は驚きて　　周章てふためき右左
騒ぎまはれど何とせむ　　國の柱を失ひし
イドムの國の騒擾は　　目も當てられぬばかりなり
ここに軍師のエーマンは　　數多のナイトを引率し
イドムの城に陣取りて　　國の騒ぎを鎮めむと
計畫をさをさ怠らず　　朝夕に肝向ふ
心を痛めたりける　　ああ惟神々々
神の天罰恐ろしき。

エーマンは、サククス姫及びチクター等の死體を篤く葬り、十日間の喪に服し
つつ述懐を歌ふ。

『さびしさの限りなるかもわが國は』

國くにの柱はしらを失うしなひにけり

天地あめつちの神かみの怒いかりに觸ふれにけむ

かかる歎なげきは世よにためしなき

イドム城じやまアヅミ、ムラジを退しりぞけし

罪つみの酬むくいと思おもへば恐おそろし

常世とこよゆく闇やみにつつまるイドム城じやまは

何處いじこにゆくか心こころもとなや

われは今軍いまぐんの司つかさとなりながら

治をさむる由よしも白浪しらなみの月つきよ

大空おほぞらに無心むしんの月つきは輝かがやきつ

われ等らが歎なげきを笑わらふが見みゆ

水乃川みなのがは流ながる月つきもかすみたり

わが目めの涙雨なみだあめと降ふれれば

如何いかにしてイドムの城しろは保たもたむと

月に祈れど月は答へず

山川も色あせにけりわが胸の

闇の帳は晴れやらずして

國民を苦しめ奢り驕りし

王の行末おもへばおそろし

サックスの女王の行ひ日に月に

いや荒みつつつ亡び給へり

チクターの卑しき心にさそはれて

あはれ女王は身罷り給へり

エールスの王の最後のいぶかしさ

わが魂の雲はまだはれず

武力もて人の國をば奪ひたる

報いなるらむ今日の歎きは

山も川も草木も一度に聲あげて

傾く國をなげくが見ゆ

見るものも聞くものもみな涙なり

われ如何にしてこの世を活かさむ

力ともたのみし右守のナリスは

遠くサールにかへされて居り

せめて今ナリス右守のあるなれば

かほど心を碎かざるべし

語らはむ友さへもなき今日の日を

われは淋しく泣くばかりなり

三千の兵士あれど王のなき

イドムの國は統制とれずも

彼方此方に軍人等の集まりて

よからぬ事を企圖めりと聞く

軍人一つになりて攻め來なば

イドムの城は忽ち滅びむ

如何にしてこの世の亂れを斷たむかと

思へば心は闇につつまる

今となりてアヅミ、ムラジを退けし

エールス王の仕業を惜しむ

勢の強きにまかせエールス王は

イドムの城を奪ひとりける

われもまたエールス王に従ひて

軍進めし罪人なるよ

この城に朝夕仕ふる司等の

心は千々に亂れあるらし

何處までも御國のためにつくさむと

思ふ眞人のなきは淋しき

かりごもの亂れたる世を治めむと

おも 思ふも詮なし力なき吾に

さんぜん 三千の軍人等はまちまちに

ことほか 事計りつつ従ひ来らず

いま 今の間、にイドムの城を遁れ出で

もとつみくに 元津御國にかへらまほしけれ

イドム城内は、エールス王始めサツクス姫並びにチクターその他重臣等の一時に歸幽せしより、恰も火の消えたる如く寂然として聲なく、軍師エーマン一人生き残りて國の再興を計らむと晝夜心魂を碎きゐたりける。

はなしかは 話變りて國津神の諸々は、エールス王の暴政に苦しみ、怨嗟の聲は國內に充ち満ちたりけるが、王以下の歸幽を知るや、町々村々より愛國の志士奮起し、到る處に維新の聲潮の寄する如く湧き立ちにける。中にも愛國派の大頭目マークとラーの兩雄は、時こそ到れりと、都鄙到る處に立ち現はれ、馬上より國津神の奮起を大聲叱呼しつつ促しにける。

群衆は法螺貝を吹き、磬盤を打ち、太鼓を鳴らし、到る處に示威運動起り、山嶽も爲に崩るるばかり騒がしき光景を現出したりける。マークはイドム城外の廣場に群衆を集めて、馬上に突立ちながら、聲高々と維新の歌をうたふ。

□ イドムの國の國人よ

奮ひ立つべき秋は來ぬ

天地は暗く日月の

光は地中に沒したり

アヅミ、ムラジの王をば

奪はれながら敵王に

従ひ來りし天罰は

報い來りてわれわれは

塗炭の苦しみ味はへり

斯くなる上は吾々は

飢^うゑて死^しするの外^{ほか}はなし

わが國^{くに}民^{たみ}よ兄弟^{きやうだい}よ

イドムの國^{くに}は汝^{なんぢ}等^らが

祖先^{そせん}の神^{かみ}より受^うけ繼^つぎし

生命^{いのち}を助^{たす}くる樂^{らく}土^どぞや

この美^{つる}しきよき國^{くに}を

サールの國^{くに}のエールスに

奪^{うば}はれ吾^{われ}等は日^ひに夜^{よる}に

妻^{つま}子を奪^{うば}はれ家^{いへ}倉^{くら}を

燒^やかれて苦^{くる}しみ居^ゐたりけり

奮^{ふる}ひ起^たて起^たて今^{いま}や秋^{とき}

祖^{そこ}國^{こく}を守^{まも}り永^{えい}遠^{えん}の

國^{くに}の平^{へい}和^わを計^{はか}れかし

われ等^らはこれより王^{わう}城^{じやう}に

轡くつわ竝ならべて進すすむべし

汝なれら等らためらふことなかれ

イドムの國くにを永遠とことはに

守まもるは汝なれら等らがためなるぞ

進すすめよ進すすめよいざ進すすめ

國くにの平和へいわの來きたるまで

惡魔あくまのあとの絶たゆるまで
𠄎

ラートは歌うたふ。

𠄎
ああ國くに人びとよ國くに人びとよ

われ等らが起たたむ秋ときは來きぬ

汝なれが生いのち命のちを永遠とこしへに

託たくして樂たのしむわが國くには

サールの國に奪はれて

悲しき憂目をみたりけり

天は必ず暴虐に

くみし給はず無道なる

エールス王の生命とり

つづいてサックス、チクターヤ

その他の曲津を滅ぼして

楔を始め給ひけり

汝等國民諸々よ

日頃の恨み晴らすべき

秋は來れり國民の

生命を守り永遠の

平和を來す秋は今

勇めよ勇めよ奮ひ立て

われは神の子神の宮

進む勇氣のあるならば

決して戦に負けはせじ

軍師のエーマン只一人

イドムの城に頑張りて

われ等國民を

苦しめ惱めむ謀

企圖み居るを知らざるか

今この秋ぞこの秋ぞ

エーマン軍師を滅ぼして

國の光を輝かし

元の昔の天國に

かへすは汝等が責任ぞ

ああ惟神々々

正義せいぎに刃向はむかふ刃やいばなし

われ等らは神かみの守まもりあり

汝等なれらも神かみの子こ神かみの宮みや

決けつしてためらふことなかれ

進すすめよ進すすめよいざ進すすめ

國くにの平和へいわを來きたすまで

維新いしんの大望たいまう遂とぐるまで

惡魔あくまのエーマン亡ほろぶまで

この大敵たいてきの亡ほろぶまで

ひるまずたゆまず進すすめかし

マーク、ラートは先頭せんとうに

立たちてすすくすすく進すすむべし

従したがひ來きたれ國民くにたみよ

汝等なれらが生命いのちを守まもるべく

汝等なれらが仇あだを酬むくゆべく
イドムの城しろに攻め寄せよ
」

斯かくて群衆ぐんしゅうは大擧たいぎよして、イドム城じやうに一齊いつせいに攻め寄せければ、軍師ぐんしのエーマンは、この光景くわうけいを見るより驚おどろきあわてふためきて、高殿たかどのより身みを躍をどらせ、水乃川みなのがはの激流げきりうに飛び込み、あと白浪しらなみと消えにける。

國民くにたみを虐しひたげ驕おこりしエールスの

一族いちぞくことごと鬼おにとなりけり

チクターは女王ぢよわうに惡事あくじを勸すすめつつ

神かみの怒いかりに滅ほろぼされける

アヅミ王わうを追おひ退しりぞけし後釜あとがまに

据すわりしエールス夢ゆめなりにけり

エールスの榮華えいぐわもわづか一年ひととせの

夢^{ゆめ}なりにけり淺^{あさ}ましの世^よや
國民^{くにたみ}はここぞとばかり奮^{ふる}ひ立ち
イドムの城^{しろ}に攻^せめ寄^よせにけり。

(昭和九・八・五 舊六・二五 於伊豆別院 内崎照代謹録)

第一〇章 復古運動(二〇三七)

マークとライトの引率^{いんそつ}せる軍人^{ぐんじん}交^{まじ}りの群衆^{ぐんしゅう}は、恰^{あたか}も無人^{むじん}の境^{きやう}を行^ゆく如^{ごと}く、イドム城^{じやう}を只^{ただ}一^{いつ}戦^{せん}を交^{まじ}へずして取返^{とりかへ}し、軍師^{ぐんし}エーマンは周章^{しゅうしやう}狼狽^{らうたひ}の結果^{けつくわ}、激流^{げきりう}に飛^とび込み消^きえ失^うせければ、風塵^{ふうちん}全^{ぜん}く治^{をさ}まりて更生^{かうせい}の氣分^{きぶん}天地^{てんち}に漂^{ただよ}ひにける。此^この群衆^{ぐんしゅう}の中^{なか}には、アヅミ王^{わう}の右守^{うもり}と仕^{つか}へたるターマン司變裝^{つかさへんさう}して忍^{しの}び居^ゐたりしが、この光景^{くわうけい}を見て大^{おほい}に喜^{よろこ}び、ライト、マークの側近^{そばちか}く進^{すす}みより、堅^{かた}く握手^{あくしゆ}を交^{かは}し感謝^{かんしや}の

涙なみだに暮くれ居ゐたり。

ターマンはマーク、ラートに向むかつて歌うたふ。

㊦ 吾わが王きみの失うしなひ給たまひし食をすく國くにを

生いかし給たまひし君きみは神かみなり

吾わが王きみは月つき光みつ山やまに籠こもらひて

朝あさな夕ゆふなに祈いのり給たまひし

主スの神かみの御み靈たま懸かかりて二ふた柱はしらの

君きみに力ちからを添そへ給たまひけむ

斯かくならばイドムの國くにはアヅミ王わうの

再ふたび治ち下に蘇よみがへるらむ

汝なが功いさをつぶさに王きみに傳つたふべし

必かならず嘉よみし給たまふなるらむ

吾われこそはイドムの城じやう下に潛ひそみつつ

今日けふの吉日よきひを待ち居まゐたりけり
王きみを思おもひ國くにを思おもひて眞心まごころを
盡つくし給たまひし尊たふとき汝なれかも〆

マ一クは歌うたふ。

有あり難がたし力ちからなき身みも主スの神かみの
惠めぐみに吾われは成なり遂とげしはや
王きみの爲ため御國みくにの爲ために盡つくしたる
吾われは報むくい酬いを望のぞまざるべし
國くに民たみを虐しひげ荒すさびしエールス王わう
亡ほろびたるこそ天意てんいなるべし
備そなへなきイドムの城しろに攻せめ寄よせし
吾われには何なんの力ちからだもなし

天てんの時ときと地ちの理りと人ひとの和わによりて

維新いしんの端緒たんしょは開ひらけたるかな

國くに民たみを虐しひげながら血ちをしぼり

驕おごりし曲津まがは亡ほろび失うせたり

今け日ふよりはアヅミの王きみを迎むかへ來きて

民たみの心こころを安やすめむと思おもふ
『

ターマンは歌うたふ。

有あ難りがたしマークす司つかさの言ことの葉はを

わが王きみ許がに早はやく傳つたへむ

吾わが王きみは汝なれが心こころを聞きこ召しめし

喜よろこび給たまはむ思おもへば嬉うれしき
』

マークは歌ふ。

☐ 吾も亦傾く國を正さむと

年月心を碎き居たりき

天の時到りて漸く吾が思ひ

晴れたる今日の心地よさかな

力なき吾なりながら真心の

弓弦は容易にきれざりにけり

弓弦を放れし征矢は何處までも

通さでおかぬ大丈夫のむね

イドム城包みし黒雲晴れ行きて

蟲の啼く音も冴え渡りけり

大空を包みし雲も晴れ行きて

御空の月は輝き初めたり

年月としつきを重かさねて維新あしんの端緒いとぐちは

開ひらけ初そめたり今日けふの吉日よきひに

朝あさ夕ゆふに神かみを祈いのりし甲斐かひありて

今けふ日あた新あらしき月つきを見みるかな

此この上うへは何なにをか望のぞまむ吾王わがきみの

心こころのままに從したがはむのみ

露つゆほども汚きたき心こころ持もたぬ吾われ

司つかさの位くらゐなどは望のぞまじ

月つき日照ひてるイドムの國くにの更かう生せいを

見みれば望のぞみのあらぬ吾われなり

國くに民たみの歡呼くわんこの聲こゑは山嶽さんかくも

動ゆるぐばかりに轟ととろき渡わたるも

國くに民たみは甦よみがりたる心地こころちして

アヅミの王きみを歡あはれぎ迎むかへむ

目附役の目を忍びつつ年月を

維新の爲に計畫ひ來しはや

斯くの如目出度き月日に逢はむとは

思はざりけり一年の間に

一年の短かき月日汚したる

エールス王は夢と消えたり

ターマンは再び歌ふ。

國民の誠心の集まりて

イドムの國の雲は晴れたり

吾も亦死生の巷に彷徨ひて

今日の吉日を待ち居たりけり

雄々しかるマークの君を始めとし

ラートの君に感謝せむとす

月光の山に籠りて吾王は

嘆きの月日送り給ひつ

有難き御代となりけり主の神の

嚴の恵はいやちこにして

今日よりは主の大神を齋かひて

國の榮えを祈り奉らむ

例なき此の喜びに逢ひけるも

神の御稜威と汝等が働き

國民の誠心を代表し

立たせ給へる君の尊さ

マークは歌ふ。

ターマンの右守の君の御言葉

聞くにつけても涙ぐまるる

吾王の御代安かれと村肝の

心盡せし甲斐ありにけり

幾度も醜の目附に捕へられ

暗き牢獄に投げ込まれける

食物も碌に與へず苦しめし

目附の心は曲鬼なりけり

牢獄に投げ入れられて打たれつつ

無情に泣きし日もありにけり

七度も八度も牢獄にとぢられて

世の行末を嘆かひしはや

主の神の恵によりて漸くに

今日の吉日に逢ひにけるかな

過ぎし日の事を思へば自ら

悲憤の涙頬に傳はる

一日も安けき日とては無かりけり

目附の司に睨はれにつつ

世の人にブラツクリストとけなされて

悲憤の涙に幾日嘆きぬ

ターマンは憮然として歌ふ。

雄々しもよマークの君の物語

聞くも悲憤の涙こぼるる

身を捨てて王と國とに盡したる

雄々しきマークの心に泣くも

種々の悩みに堪へて今此處に

維新の望みを遂げし君かも
』

ラートは歌ふ。

吾もまた繩目の恥を幾度か

受けて御國に盡し來にけり

父母の生命は取られ妻や子の

行方は知れず悩みたりけり

王の爲國の御爲父母の爲

妻子の爲に勵まされけり

わが妻はいづらなるらむ吾御子は

如何なりしと思へば悲しき

父母や妻子を忘れて今日迄は

御國の爲に働きにけり
』

ターマンは歌ふ。

吾は今ライト司の物語

聞きて悲しくなりにけるかな

吾王も汝に劣らぬ苦しみと

艱みを忍ばせ過ぎ給ひける

王民は一つ心に苦しみて

維新の大業成り遂げにける

斯くなれば一日も早く吾王に

此の瑞祥を知らせ奉らむ

武士よライトの君よ此の城に

待たせ給はれ吾王來ますまで

吾は今マーク司を伴ひて

月光山に急ぎ歸らむ

ラートは歌ふ。

『ターマンの右守司の御言葉
諾ひ吾は城を守らむ』

ターマンは歌ふ。

『いざさらばマークの司と諸共に
急ぎ歸らむ月光の山に』

茲に右守のターマンはマークの勇士と共に栗毛の馬に跨りつ、
群衆が歡呼の聲に送られて蹄の音も勇ましく、百里を隔つる月光山へと急ぎける。
ターマンは馬上ゆたかに歌ふ。

ㄣ

ああ勇ましや勇ましや

主の大神の御恵に

イドムの城を包みたる

醜の黒雲晴れにけり

イドムの城は昔より

アヅミの王の領有げる

伊佐子の島の眞秀良場よ

至治太平の夢に酔ひ

軍の備へを等閑に

なしたる隙を窺ひて

悪逆無道のサール國

エールス王の軍隊に

取り圍まれて果敢なくも

王の古城は落されぬ

アヅミの王きみを始めはじとし
右守うもり、左守さもりや軍師ぐんし等は
討うち洩もらされし郎黨らうたうを
かり集あつめつつ野路のぢを越こえ
山川やまかは渉わたり月光つきみつの
峻さかしき山やまに身みを潜ひそめ
天地てんちの神かみの宮みやを建たて
禊みそぎの業わざを修をさめつつ
時ときの到いたるを待まちにけり
ああかむながらかむながら惟かむながら神かむながら々々
神かみの御み稜いづ威づの現あらはれて
矢やさ叫けびの聲こゑ鬨ときの聲こゑ
うら吹ふく風かぜとなりにけり
ああ有ありがた難たや樂たのもしや

國民未だ吾王を

捨てずに國を守るか

マーク、ライトの兩雄は

心を筑紫の甲斐ありて

忽ちイドムの天地は

醜の黒雲拂はれぬ

月日は清く水清く

山野は爽かに青みつつ

諸の果物よく實る

イドムの國の樂園に

再び王を迎へつつ

千代を樂しむ今日こそは

神代も聞かぬ喜びぞ

ああ惟神々々

神かみの恵めぐみの尊たふとさよ

吾われも是これより肝きも向むかふ

心こころを改あらため研とぎ澄すまし

主スの大神おほかみを朝あさ夕ゆふに

敬うやまひ奉まつり願ねぎ奉まつり

イドムくの國くにの隆りう盛せいと

吾わが國くに民たみの幸かう樂らくを

眞ま心しん籠こめて計はかるべし

馳はせ行ゆく道みちは遠とほけれど

千せん里りの駒こまの脚あし速はやく

吹ふき來くる風かぜに鬣たてがみを

靡なびかせながら進すすみ行ゆく

駒こまは地ち上じやうの龍りゆうなれや

道みちの隈くま手ても恙つつがなく

難所も厭はず走り行く

ああ惟神々々

道の行手に幸あれや

吾言靈に光あれ

マークは馬上ゆたかに歌ふ。

ターマン右守に従ひて

月光山におはします

アヅミの王に國の狀態

詳細に語ると進み行く

今日の旅立ち樂しけれ

駒の嘶き蹄の音も

實に勇ましく響くなり

秋あきの山やま々やま紅葉もみぢして

錦にしき機はた織おる佐保さほ姫ひめの

袖そでの香かこそは床ゆかしけれ

右みぎと左ひだりの山やま峽かひに

妻つま戀こふ鹿しかの聲こゑ冴さえて

谷たに間まを照てらす月つき光かげは

鏡かがみの如ごとく冴さえ渡わたる

下した道みち進すすむ吾われこそは

華くわ胥しよの御み國くににゆく心こ地ち

勇いさまいしかりける次しだい第だいなり

あかむあな惟ながら神かむ々ながら々ながら

神かみの御み稜いづ威ぶの幸さちはひて

暴ほう虐ぎやく無ぶ道だうを極きはめたる

エわうールほろス王わうは亡ほろびたり

サックス姫は殺されぬ

左守のチクター始めとし

強き騎士は悉く

人魚の司の計略に

水泡となりたる淺ましき

軍師エーマン只一人

あとに残りて其の後を

繼がむと謀める折もあれ

時こそよしと吾々は

イドムの城の郊外に

憂國悲憤の同志等を

呼び集めつつ高らかに

維新の壯學を宣りつれば

群衆一度に贊同し

醜しこの潜ひそめる城内じやつないに

雲くもを霞かすみと押寄おしよせぬ

軍師ぐんしエーマン驚おどろきて

忽たちまち水みなの乃のの激流げきりうに

飛とび込こみ生命いのちを失うせにけり

ああ惟かむながらかむながら神々々

城しろの内うちには敵將てきしやうの

影かげは全まく消きえ失うせて

無むじん人の原はらを行ゆく如ごとし

是これも全まく主すの神かみの

公こうへい平むし私しなる御裁おんさばき

謹つつしみ感かん謝しゃし奉たてまつ

斯かくなる上うへは一日ひとひだも

早はやくアツミの吾王わがきみを

迎へ奉りて新しく
御代を建てさせ給ふべく
乞ひのみ奉る國民の
赤き心をまつぶさに
申し傳へよ右守神
ああ惟神々々
今日の喜び限りなし
吹き來る風も爽かに
天地更生の響あり
月光山は峻しとも
谷の流れは深くとも
何かひるまむ大丈夫の
彌猛心に突進し
王の御前に復命

申まうさむ時ときこそ樂たのしけれ

あかむながらかむながらあかむながらかむながら惟ただ神かみ々々

御み靈たま幸さち倍は坐ま世ま世せ」

（昭和九・八・五 舊六・二五 於伊豆別院 森良仁謹録）

第三篇 木田山城きたやまじやう

第一章 五月闇さつきやみ〔二〇三八〕

サールの國王こくわうエールスが、イドムの國くにを占領せんりやうせむとして大兵たいへいを募つのり、イドム城じやう

に疾風迅雷的に攻め寄せ、一擧にして王城を占領し、アヅミ王を始めムラジ妃及び左守、右守、軍師も共に月光山に逃走せしめ、數多の敵軍を捕虜としてサールの國の牢獄に繋ぐべく騎士をして護送せしめた。

サールの國には大榮山より流れ落つる木田川と言ふ薄濁つた流れがある。ここには橋梁もなければ船もないので、いづれも水馬の術を以て渡ることとなし、木田川をへだて、東の丘陵木田山にエールスは城壁を構へ、要害堅固の陣地とたのんでゐる。

エールス王の太子エームスは木田山城の留守師團長として守つてゐたが、數多の敵軍の捕虜の送られて來るのを見むと、城内の廣場に夕月、朝月の侍臣を従へ、その状を愉快げに眺めてゐるが、其の中に氣品優れて高く、面貌麗しき三人連れの美人を認め、獨り身のエームスはたとへ敵國の女性にもせよ、何とかして吾妻に爲さむものと、それより吾館に歸り、忽ち戀慕の鬼に捉はれ、夜も晝も煩悶苦惱の溜息ばかり續け居たりける。

この三人の美女は言ふ迄もなく、アヅミ王の娘チンリウ姫にして、稍年老いた

るのは侍女のアララギ及びチンリウ姫の乳兄弟なる乳母の娘センリウの三人なりける。

朝月、夕月はエームスの日夜の様子只ならざるに心をいたため、如何にもして爽快なる太子の笑顔を見むものと、あらゆる手段をつくし、聲美しき小鳥も集め或は蟲を啼かせ、種々の禾本類を太子の眼近き所に陳列し、その上歌を歌ひ或は踊り舞ひ、種々と心力をつくせども、太子の身體は日夜に憔悴するばかりなりければ、或日朝月、夕月は太子に花ヶ丘の清遊を勧めむと、側近く参入して歌もて勧めける。

朝月は歌ふ。

朝月の光はおぼろに白けつつ

花の蕾に露を宿せり

花ヶ丘の百花千花悉く

若王が情の露に濡れつつ

若^{わか}王^{ぎみ}の心^{こころ}の蕾^{つぼみ}開^{ひら}かむと
涙^{なみだ}の露^{つゆ}を降^ふらす朝^{あさ}月^{つき} ㊦

エームスはかすかに朝^{あさ}月^{つき}の歌^{うた}を聞^きいて、
稍^{やや}心^{こころ}動^{うご}きたる如^{ごと}く、
二^に三^{さん}步^ぽ前^{まへ}に進^{すす}み來^{きた}
りて歌^{うた}ふ。

朝^{あさ}月^{つき}の光^{かげ}は白^{しろ}けて大^{おほ}空^{ぞら}は

かすめり吾^{われ}が心^{こころ}にも似^にて

吾^{わが}心^{こころ}朝^{あさ}な夕^{ゆふ}なに晴^はれやらす

花^{くわ}鳥^て風^{ふう}月^{げつ}樂^{たの}しみにならず

百^{もも}鳥^{どり}の囀^{さへつ}る聲^{こゑ}も松^{まつ}蟲^{むし}の

共^{むた}啼^たきさへもかなしき吾^{われ}なり

吾^{わが}父^{ちち}は生^{せい}死^しの巷^{ちまた}に戦^{たたか}へり

されど吾^{われ}にはかかはりもなし

吾心戦に出でます垂乳根に

いつか離れて花に惱めり

花ヶ丘に匂へる桃のよそほひも

吾にはかなしき便りなりけり

山も川も吾にはかなし木田山の

館もさびし思ひはねねば

朝月は歌ふ。

吾若王の御心かすかに悟りたり

朝月吾は花便りせむ

エームスは歌ふ。

☐ たらちねの仇あだなる花はなにあこがれて

吾われはくるしき夢ゆめを見るみなり

斯かくならば譽ほまれも位くらゐも玉たまの緒をの

吾わが生命いのちさへ惜をしけくはなし

ままならぬ人ひとを戀こひつつままならぬ

わが世よを歎なげきぬ朝夕あしたゆふべに

はてしなき廣ひろきサールの國くに中に

かかる目め出度でき花はなは見みざりき

朝月あさづきは歌うたふ。

☐ 若王わかぎみの欲ほりする花はなは捕とらはれの

花はなにあらずや語かたらせ給たまへ

エームスは歌ふ。

𠄎 恥かしと思へど吾は村肝の

心明さむ汝が言葉あたれり

捕はれの女の姿氣高ければ

正しくアヅミの娘なりけむ

吾父はアヅミの國を滅ぼして

恨みを買ひしことのかなしさ

心安く手折り得べけむその花を

父の嵐に散らされむとすも

朝月は歌ふ。

𠄎 吾若王のかなしき心まつぶさに

牢獄ひとやの女をみなに吾われは傳つたへむ

言靈ことたまの舌したの劍つるぎを振ふるりかざし

若王きみの心こころをはらし奉まつらむ

麗うるはしき三人みたりの女をみなのその中なかに

すぐれてたかきを若王きみに進すすめむ

どこまでも吾眞心わがまごころを打うち明あけて

イドムの國くにの花はなをなびかせむ

エームスは稍やや面色かほいろをやはらげながら嬉うれしげに歌うたふ。

☞ 朝月あさづきの露つゆの情なさけにうるほひて

蘇よみがへるらむ朝顔あさがほの花はなは

初戀はつこひの吾わが初花はつはなを手折たをらむと

露つゆの涙なみだに朝夕あさゆふくれけり

朝月あさづきは歌うたふ。

㊦ 木田きたが川の流ながれはよしや涸かるとも

若王わかぎみの依よさしを遂とげずにおくべき

斯かくならば吾われは今日けふよりアヅミの娘むすめ

若王わかぎみが床とこの花はなと咲さかせむ

エームスは歌うたふ。

㊦ たのもしき汝なれが言葉ことばよ朝月あさづきの

光かげを力ちからに夕ゆふべを待またむ

朝月あさづきは歌うたふ。

☐ 朝あさづき月の光かけ消きゆるとも夕ゆふづき月の光かけ清きよければ心こころ安やすかれ

夕ゆふづき月は歌うたふ。

☐ 吾わが若き王みの情なさけの露つゆにほだされて

アヅミの花はなは御み側そばに薰からむ

夕ゆふづき月の光かけを合あ圖ひづに忍しのびよりて

若き王みが真ま心こころ傳つたへ奉まつらむ

朝あさづき月づきと夕ゆふづき月づき心こころを一ひとつにし

露つゆの情なさけになびかせ奉まつらむ

三み柱しらの美うつくしき姫ひめ朝あさ夕ゆふを

うなかぶしつなみだつ涙なみだにしめれり

朝あさ夕ゆふに涙なみだの露つゆにうなだるる

花をし見ればあはれもよほす

若王の眞心つぶさに傳へなむ

物言ふ花も笑みて榮えむ

兔も角も善事は急げと昔より

世のことわざもありしを思ふ

一時も早く御心安めむと

心の駒は勇み立つなり

エームスは欣然として歌ふ。

朝月の光はさやけし夕月の

光りは強し夕顔の花

夕顔の花の白きにあこがれて

吾は生命をかけて待つなり

朝あさづき月はうた歌うたふ。

□ いざさらば三人みたりの姫ひめのこもりたる
牢獄ひとやに進すすみて言こと靈たま開ひらかむ
□

夕月ゆふづきは歌うたふ。

□ 若王わかぎみの生命いのちの戀こひをかなへむと
眞心まごころの駒こまに鞭むちうち進すすまむ
□

エームスは歌うたふ。

□ 恥はづかしきかなしき心こころを推おしはかり
出いでゆく汝なれが復命かへりごと待またむ
□

斯く主従は歌を交しながら暫し袂を別ちける。朝月、夕月の立出でし後に、エー
ムスは一時千秋の思ひしながら、高殿より眼下を流るる木田川の薄濁りを瞰下し
ながら静かに述懐を歌ふ。

木田川の流れは如何に濁るとも

吾真心のうつらざらめや

月も日も浮びて流るる木田川の

水はかなしもかげくだけつつ

百千々に心くだけど口なしの

花にも似たる吾なりにけり

大榮山越えてはるばる吾父は

なやみの種を蒔き給ひける

父も母もとほくイドムの國に在り

吾さびしくも戀に泣くなり

ままならぬ花を戀ひつつ手折るべき

よすがなき身のかなしき吾なり

朝月はいかがなしけむ夕月は

いづらにあるか御空曇らふ

村肝の心の空の雲霧を

いかに晴らさむ五月雨の降る

五月雨にしめり勝なる吾袂

知る由もなくほととぎす鳴く

百鳥も必ず戀を叫ぶらむ

獨り身吾の心にも似て

妻戀ふる尾の上の鹿のそれならで

吾面ざしに散る紅葉かな

朝夕に青息吐息つきながら

生命の戀にあこがれにけり

吾父に恨みを買ひしアヅミ王の

娘と思へば一人かなしき

晴れやらぬ五月の空に吾は只

空を仰ぎて吐息するのみ

庭の面にあやめ、かきつばた匂へども

吾には何の望みだになし

しとしとと降る五月雨は吾袖の

乾く間もなき涙ならずや

かかる世に生れてかかるかなしさを

今日が日までも悟らざりけり

木田川の水とこしへに流るとも

吾の悩みを洗ふすべなき

捕はれし清き女はアヅミ王の

娘と聞きて驚きしはや

兔も角も朝月、夕月言靈の

露に匂はむ朝顔夕顔

夕顔の花に心を奪はれて

吾魂は闇となりける

戀すてふ心のかなしさ悟りけり

アヅミの王の娘に會ひて

一目見て吾魂は亂れたり

戀の悪魔に捕はれにけむ

よしやよし吾玉の緒は消ゆるとも

一夜の語らひなさでおくべき

國も城も吾身も總てを忘れたり

只あこがるる夕顔の花

夕暮にふと眺めたる花なれば

吾夕顔と名づけてあこがる

夕顔ゆふがほの心こころ如何いかにと案あんじつつ

吾わが垂たらちね乳根こころの心こころを恨うらむも

いたづらに平地へいちに浪なみを起おこしたる

父ちちのすさびをかなしく思おもふ

父母ちちははの仇あだなる敵てきに夕顔ゆふがほの

君きみは心こころをまかさざるべし

斯かく獨ひとり述じゆつ懐くわいを述のべ居ゐたる折をりもあれ、侍女じぢよの瀧津瀬たきつせ、
汲くみ菓子くわしを捧ささげながら恭うやうやしくエームスの前まへに進すすみ來きたり、
いぶかりがら瀧津瀬たきつせは歌うたふ。
山風やまかぜの兩人りやうにんは、各自おののおの茶ちやを
憂うれひに沈しづめる太子わかぎみの態ていを

瀧津瀬たきつせの清水しみづを汲くみてわかしたる

お湯ゆ召めし上あがれエームスの君きみ

山風は歌ふ。

大榮山なぞへに實りし果實よ
いざ召し上れ生命の桃の實

エームスは默然として、侍女が捧ぐる茶の湯にも、果實にも、手を附けようと
もせず俯いてゐる。

瀧津瀬は再び、

若王の御面ざしのすぐれぬは

身にいたづきのおはしますにや

若王の今日のよそほひ見るにつけて

かなしくなりぬ瀧津瀬吾は

月も日も隈なく照れる世の中に

何歎かすか太子の君は

御心のなぐさむるならば吾生命

若王に捧ぐもいとはざるべし

朝夕に若王に仕ふる瀧津瀬も

今日はさびしき思ひするなり

若王のすぐれ給はぬ顔を

拜みて吾はくだくる思ひす

一言のいらへの言葉願はしや

吾は爲すべきすべもあらねば

山風は歌ふ。

ㄣ
若王の御面いたく曇らへり

いかなる悩みを持たせ給ふか

咲さきにほ匂ほふはな花はなをつれなく吹ふき散ちらし

梢こす清あすしがきやま山風かぜのわれ吾

いかならむなや悩みおはすかし知らねども

山風やま吾かぜは吹ふき拂はらふべし

大おほ榮さかの山やまの尾をの上への黒くろ雲くもも

吹ふき散ちらすべしさ小夜よの山風やま

若わか王ぎみの心こころの雲くも霧きり拂はらはむと

山風やま吾かぜは心こころくだきつ

エームスはかすかに歌うたふ。

㊦ 瀧たき津つ瀬せや山風やまの心こころよみすれど

吾わが宣のる言こと葉はなきがかなしき

朝あさされば朝顔あさがほ思おもひ夕ゆふされば

夕顔ゆがほおも思おもひてしめらふ吾われなり

木田川きたがはの水みづとこしへに流ながるれど

いつか晴はれなむ心こころの闇やみは

ほととぎす朝あしたゆふ夕ゆふべの分わかちなく

鳴なきつる空そらは吾わがこころ心こころかも

月つきも日ひも光かげをかくせる五月さつき闇やみに

鳴なくほととぐす吾われならなくに

瀧津瀬たきつせも早はやく寝ねよかし山風やまかせも

吾わがまへ前まへを去され小夜さよ更ふけぬれば

吾われは只ただ思おもひの淵ふちに沈しづみつつ

闇やみの水音みなおと聞ききて明あかさむ〇

瀧津瀬たきつせは歌うたふ。

□ 若王の御言畏みいざさらば
まかり退らむ貴の御前を」

山風は歌ふ。

□ 若王の悲しき心ははかれども
せむすべもなき吾身なりけり」

斯く歌ひて二人の侍女は吾居間にすごすごと歸りゆく。
小夜更けの空に鳴き渡るほととぎすの聲、四方八方よりしきりに木田山城の森をかすめて響き来る。

（昭和九・八・一四 舊七・五 水明閣 谷前清子謹録）

第一二章

木田山嵐（二〇三九）

アヅミ王の娘チンリウ姫は、乳母のアララギ及びアララギの娘センリウ女ととも敵城に虜はれ、第一の牢獄に繩目の恥を忍びながら、世をはかなみつつ互に述懐を歌ふ。

チンリウ姫の歌。

あぢきなき浮世なるかなわれは今

繩目の恥にあひて苦しむ

垂乳根は如何なりけむイドム城は

いづらに行きしか心許なや

思はざる敵の軍に攻められて

わが垂乳根は露と消えしか

諸々の家臣軍人あれど

いひ甲斐もなく滅び失せけむ

祖々の賜ひし國はエールスの

暴虐の手に奪はれにけむ

わが力盡きて敵にとらへられ

今は涙の淵にただよふ

玉の緒の生命もいつか量られずと

思へば悲しき吾身なりけり

如何にしてこの苦しみを逃れむと

神を力に時の間を生くる

望みなき吾身となりぬ水乃川の

月に親しむ術もなければ

罪もなき人魚を捕りし酬いにて

わが垂乳根の國亡びしか

數百里の道をナイトに送られて

寒^{さむ}き牢^{いと}獄^やに世^よを歎^{なげ}くなり

天^{あめ}地^{つち}の神^{かみ}の此^{この}世^よにいますならば

再^{ふた}び見^みせよ水^み乃^の川^がの月^{つき}を

垂^た乳^ら根^ちの此^{この}世^よに生^い命^の在^ちすならば

夢^{ゆめ}になりとも通^{かよ}はせ給^{たま}へ

望^{のぞ}みなきわが身^みと思^{おも}へば悲^{かな}しけれ

朝^{あさ}夕^{ゆふ}われは淋^{さび}しさに泣^なく

アララギは歌^{うた}ふ。

姫^{ひめ}君^{ぎみ}の歎^{なげ}き言^{こと}葉^はを聞^きくにつけ

わが身^みの置^お場^き無^なきが悲^{かな}しき

姫^{ひめ}君^{ぎみ}の御^み供^{とも}に仕^{つか}へて二^に十^じ年^{ねん}

われは御^み側^{そば}を離^{はな}れざりける

はるばると敵の國まで送られて

姫の憂目を見るが悲しき

情深きイドムの王に生き別れ

苦しき憂目を敵城に見るも

天地の神を祈りて今日の日の

わが姫君のなやみを晴らさむ

姫君を守る身ながらかくの如

憂目を見せしわが愚さよ

姫君よ許させ給へ何事も

時の力に刃向ふ術無き

さりながら心安けくおはしませ

われには一つの計略持ちぬ

吾娘センリウも亦虜はれの

苦しき身ぞと思へば悲しも

如何にしてアヅミの王に詫びむかと

心を碎く吾身の悲しさ

水乃川の水は無心の月光を

浮べて清く流れゆくらむ

エールスはイドムの城の高殿に

月を賞めつつ酒を酌むらむ

エールスのふるまひ思へば憎らしし

イドムの國を手もなく奪ひて

エールスは勝ち誇りたる面もちに

イドムの城に横暴り居るらむ

邪は正しきに勝つ道はなし

必ず滅びむ神の怒りに

今しばし繩目の恥を忍びつつ

花咲く春を待たせ給はれ

かなら
必ずやエールス王は滅ぶべし

みち
道に反ける曲業なれば

ひめぎみ
姫君とともに牢獄に繋がれて

あさゆふ
朝夕怨むはエールス王なり

きみ
わが王はいづらなるらむ妃の君は

ごぶじ
御無事にますか便り聞きたし

かりがね
雁の便りもがもと願へども

いま
今は詮なし時鳥鳴く

さみだ
しとしと五月雨るる空に時鳥

な
鳴き渡るなり一聲落して

ほとときす
時鳥鳴きつる空を眺むれば

さつきやみ
あやめもわかぬ五月闇なり

ひめぎみ
姫君はいふも更なりわが娘も

やみよ
われも闇夜の時鳥なり

力ちからあらばこれの牢獄いとやを破やぶらむと

思おもへば詮せんなし女をみなの腕うでには

罪つみも無なきわが姫君ひめぎみをかくの如ごとき

牢獄いとやに繋つなぐは鬼おにか大蛇をろちか

鬼おに大蛇をろち伊いた猛たけり狂くるふ世よの中なかは

神かみぞ誠まことの力ちからなりける

木田川きたがはを隔へだてしこれの牢獄らうじくに

繋つながれし吾等われらは袋ふくろの鼠ねずみよ

玉たまの緒をの生命いのちは敵てきに握にぎられて

淋さびしき吾身わがみに雨あめの音おと聞きく

センリウは歌うたふ。

☞ 姫君ひめぎみの歎なげき宜うべなりわが母ははの

怨みもうべよとわれも泣くなり

平安の城を屠りてエールスは

悪魔の性を現はしにけり

悪神の伊猛り狂ふ世の中と

思へど悲しき吾等ならずや

如何にして今日の怨みを晴さむと

思へど心曇るのみなる

肝向ふ心は闇にさまよひつ

朝夕悲しく時鳥聞く

姫君の生命助くるよしあらば

われは生命を惜しまざるべし

姫君と母に代りてわが生命

捧げむわれは神に祈りて

わが生命は軽し姫君の御生命

大山たいざんよりも重おもくいませり

イドム國こくの世繼よつぎといます姫君ひめぎみの

今日けふのなやみを思おもへば悲かなしき

如何いかにして吾わが姫君ひめぎみを救すくはむと

朝夕あしたゆふべを心碎こころくだきつ

五月さつき闇やみこの牢獄らうごくに迫せまり來きて

黑白あやめもわかず心狂こころぐるふも

チンリウ姫ひめは歌うたふ。

天地あめつちに神かみはまさずや在おはさずや

かかると歎なげきをみそなはさずや

わが父ちちは雄々ををしくませば必かならずや

生命いのち保たもちて再ふたび立たたさむ

わが父の輝きましてこの國を

言向け和せ給はむと思ふ

わが父の軍勝ちなば五月闇

晴れて再び月日を拜まむ

あてもなき望みながらも何となく

わが魂に光り見るなり

罪も無き父の國をば亡ぼして

時めき渡る曲の忌々しさ

エールスの曲津の王は天地の

神の光にふれて滅びむ

天地に誠の神のいますならば

必ず父を助け給はむ

滅ぶべき運命を持つエールスの

行末思へば憐れなりけり

今われは繩目の恥を曝せども

やがて光と世に現はれむ

村肝の心の奥に何か知らず

われには一つの光ありけり

來るべき世を樂しみて今日の日の

恥となやみを忍びまつべし

アララギは歌ふ。

姫君の雄々しき御心聞くにつけ

わが魂は輝き初めたり

朝夕をなやみもだえしわが魂も

姫の言葉に勇み初めたり

闇あれば光ある世と知りながら

愚心おろかしこころに朝夕あさゆふなやみしし

センリウは歌うたふ。

姫君ひめぎみの御心みこころ聞ききてわれも亦また

心こころの駒こまは勇いさみたちけり

われも亦また月日つきひの駒こまに跨またがりて

永久とほの安所やすどに進すすまむと思おもふ

虜とらはれの悲かなしき身みにも天地あめつちの

便たより聞きくかな風かぜのまにまに

身體からだはよし縛しばるとも魂たましひは

自由じゆう自在じざいに天地てんちを驅かけるも

虜とらはれの自由じゆう無なき身みも魂たましひは

自由じゆうに天地てんちを驅かけめぐるなりし

月づきは先まづ歌うたふ。
かかるところへ、朝あさ月づき、夕ゆふ月づきの兩りやう人にんは足あし音おとを忍しのばせながら靜しづかに寄より來きたり、朝あさ

☞ われこそはエームス王わうの御み側そば近ちかく

仕つかふる朝あさ月づき、夕ゆふ月づきなるぞや

これこの家やに忍しのばせ給たまふ姫ひめ君ぎみは

チンリウ姫ひめにおはしまさずや

品しな高たかく装よそひ清すがしき姫ひめ君ぎみは

チンリウ姫ひめと察さつしまつりぬ

ほの暗くらき牢いと獄やのうちになやみ給たまふ

姫ひめをあはれみわれは來きつるも

魚うい心しんあれば必かなず水みづ心しん

ありと思おぼせよわが言ことの葉はに

わが宣のらむ言こと葉はに従したがひ給たまひなば

今日の憂目はさせまじものを
果しなく牢獄に苦しみ給ふよりも
早く安所を望み給はずや
若王は姫に心を寄せ給ふ
なびかせ給へチンリウ姫の君

チンリウ姫は、朝月の歌に憤慨しながら、
儼然として歌ふ。

怨みなき人の國をば奪ひてし

曲の言葉に従ふべしやは

玉の緒のよしや生命はとらるとも

如何で靡かむ曲の言葉に

千秋の恨重なるエールスに

たとへ死すともまつるはざるべし

いらざらむ繰くり言こと宣のるないやしくも

われはアヅミの王わうの御み子こぞや

汝なが如ごとき賤いやしき司つかさの言ことの葉はは

耳みみにするさへけがらはしと思おもふ

われは今いま生命いのちを捨すつる覺かく悟ごなり

仇あだの王こきしにまつるふべしやは」

夕月ゆふづきは歌うたふ。

㊦ 姫君ひめぎみの言こと葉はうべよと思おもへども

此處ここは一ひと先まづ見み直なほし給たまへ

玉たまの緒をの生命いのち死しすとも及およぶまじ

御身おんみの爲ためと聞き直なほしませ

アヅミ王わうの御み子ことあれまきす君きみなれば

われは眞心捧げて仕へむ
わが若王の妃となりて榮えませよ
今日のなやみは直にとけなむ

チンリウ姫は歌ふ。

如何ほどに言葉盡して誘ふも

われ承知はじ曲の言葉に

エームスの王妃となりて榮ゆより

われは牢獄の鬼となるべし

玉の緒の生命を捨てて鬼となり

父のうらみを晴らさむと思ふ

わが父のなやみ思へば如何にして

敵の王妃となるべきものは

わが父ちちにイドムの國くにを奉還ほうくわんし

而しかして後のちにわれに當あたれよ

イドム城父じやうちちの御手おんてに歸かへるまでは

汝なれが言葉ことばをわれ耳みみにせじ

望のぞみなきわれに言葉ことばをかくる前まへに

父ちちに御國みくにを返かへしまつれよ

わが父ちちの御許みゆるしあればわれとても

王妃わうひとなるを拒いなまざるべし〆

朝月あさづきは歌うたふ。

☐ 姫君ひめぎみの御言みこと畏かしこしさりながら

今いま暫時しばらくを待またせ給たまはれ

姫君ひめぎみはエームス王わうの妃ひとなりて

和睦の道を計らせ給へ
姫君が王妃とならせ給ひなば
兩國平和に治まるべきを」

チンリウ姫は歌ふ。

偽りの多き世なれば如何にしても

汝が言葉に従ふべしやは

わが父の御許しあれば何時とても

汝が勧めに應へまつらむ

わが父の消息今にわからねば

エールス王を怨みこそすれ

エールス王わが前に来て詳細に

父の消息語れと傳へよ

父母ちちははの仇あだにわが身みを任まかすべき

われは人ひとの子こ獸けものにあらず

玉たまの緒をの生命いのち惜をしまぬわれなれば

榮華えいぐわの夢ゆめは望のぞまざるべし

ともかくもわが垂乳根たらちねを本城ほんじやうへ

返かへしまつりし其その上うへにせよ

われも亦またサールの國くにには住すまはまじ

イドムの國くにに送おくりとどけよ

エームス王わうわれに戀こひすと聞ききしより

わが魂たましひは碎くだけむとせり

萬斛ばんこくの涙なみだをのみてわれは今いま

これの牢獄ひとやに父母ふぼをしのぶも

夕月ゆふづきは歌うたふ。

↵ 姫君の堅き心を聞くにつけ

われは涙のとめどなきかな

姫君の正しき言葉聞くよしも

なきわれこそは悲しかりけり

玉の緒の生命惜しまぬ姫君の

堅き心に動かされたり

さりながらエームス王の御なやみ

晴らさむとしてわれは來つるも

千秋の恨しのびて今暫し

エームス王になびかせ給へ

姫君の御心知らぬにあらねども

御國を思ひてわれは勧むる

玉の緒の生命限りに姫君を

戀はすエームス王の憐れさ

情なさけ心こころあらねば人ひとも木石ぼくせきに

變かはらず思おもひて靡なびかせ給たまへ

チンリウ姫ひめは歌うたふ。

無む理り遣りに小暗をぐらき牢獄ひとやに押おし込こめて

戀こひを語かたらふ不ふ甲斐がひなき若王きみよ

エームスに情心なさけこころのあるならば

なぜに吾身わがみを牢獄ひとやに苦くるしむる

第一だいいちにこの解決かいけつをつけざれば

われは否いなやの應いらへなすまじ

わが耳みみは汚けがれ果はてたりエームスの

敵かたきの王きみの焦こがると聞ききて

朝月あさつきは歌うたふ。

㊦ 姫君ひめぎみの心こころの誠察まことなつすれど

われは進すすまむ道みちさへもなし

姫君ひめぎみのやさしき言葉ことば聞きくまでは

われは此この場ばを去さらずと思おもふ

くやしさをしばし忍しのびて姫君ひめぎみよ

末すゑの光ひかりと諾うべなひ給たまはれ
㊦

チンリウ姫ひめは歌うたふ。

㊦ 如何いかならむ甘あまき言葉ことばも承知うけがはじ

われは死しすべき生命いのちなりせば

エームスの王きみの言葉ことばを聞きくにつけ

われは一人死にたくなりぬ^{ひとしほし}」

朝月^{あさづき}、夕月^{ゆふづき}は、梃^{てこ}でも棒^{ぼう}でも動かぬチンリウ姫^{ひめ}の強^{つよ}き心^{こころ}に返^{かへ}す言葉^{ことば}も無^なく、す
ごすごととして此^この場^ばを立^たち去^さり、いろいと相談^{さうだん}の結果^{けつぐわ}、水責^{みづぜ}め、食責^{しよくぜ}め、火責^{ひぜ}
めをもつて、エームス王^{わう}の戀心^{こひこころ}に靡^{なび}かせむかと、種々^{しゆじゆ}淺^{あさ}はかなる計畫^{けいぐわく}をめぐらし
つつありける。

(昭和九・八・一四 舊七・五 於水明閣 林彌生謹録)

第一三章 思^{おも}ひの掛川^{かけがは} (二〇四〇)

木田山城^{きたやまじやう}の奥殿^{おくでん}には、エームス王^{わう}只一人^{ただひとり}默然^{もくねん}として戀^{こひ}に惱^{なや}みながら、微^{かすか}な聲^{こゑ}に
て述懷^{じゆつくわい}を歌^{うた}ひつつありぬ。

この世よに生うまれて二十にじふねん年

父ちちと母ははとの膝ひざもと下に

貴うづの御み子こよと育はぐくまれ

朝あさな夕ゆふなに諸もろもろ々の

司つかさや側そば女めにかしづかれ

樂たのしき春しゅん秋じゅうおくり來きて

こここゝに二十は年たの春はるを迎むかへ

ものもののあはれあはれを知しり初そめて

惱なやみの淵ふちに沈しづみつつ

ああらぬ戀こひぢ路ぢにとらとらはれて

朝あさな夕ゆふなの苦くるしみを

語かたらふ術すべも泣なくばかり

わが身みは戀こひにとらとらはれて

日ひに夜よに身み體からだ細ほそりつつ

玉たまの生命いのちも朦朧もろうと

行方ゆくへ知らずの思おもひなり

ああ如何いかにせむわが戀こふる

姫ひめはまさしく敵國てきこくの

アヅミの王きみの娘むすめとかや

わが父ちちの力ちからは如何いかに勝まさるとも

情なさけは如何いかに深ふかくとも

この戀こひのみは如何いかにして

成なりとげ得うべき由よしもなし

玉たまの緒をの生命いのち消きえむと思おもふまで

朝あさな夕ゆふなにこがれたる

生命いのちをかけたの戀人こひびとは

げに悲かなしもよ敵國てきこくの

アヅミの王きみの愛娘まなむすめと

思へば如何にこがるとも
わが思ひねのとどくべき
斯くなる上はわが父の
イドムの國を亡ぼせし
禮なき業もにくらしく
且つ恨めしく思はるる
生命をかけて焦れたる
姫の恨を如何にして
はらはむ由も夏の夜の
空をふさげる五月闇
鳴く時鳥聲かれて
血を吐く思ひのわが身なり
朝月、夕月二柱
心づくしも今となりて

何なんの答いらいも夏なつの夜よの
短みじかき心こころを如何いかにして
われはつながむ百鳥ももとりの
清きよきなく音ねも百花ももばなの
香かりも吾われには醜しこの聲こゑ
醜しこの小草をぐさの花はななれや
見みるもの聞きくもの悉ことごとく
悲かなしみの種たね憂うさの種たね
歎なげきの種たねと泣なくばかり
斯かくなる上うへはわが生いのち命
生いきて詮せんなし木田川きたがはの
水みづの藻屑もくづになり果はてて
水みな底そこ深ふかくひそみつ
戀こひの惱なやみを流ながさむか

ああ悲しけれわが戀路

ああ恨めしもわが父の

禮なき振舞ひ今となりて

吾を戀路に泣かしむるか

果敢なき浮世のありさまや

情なきこの世のたよりかな。

わが戀ふる人は敵ゆゑ眞心を

うたがひかへりて恨みかへせり

戀人はわが敵國の王の御子と

聞けばきく程悲しかりけり

かなはざる戀と思へどわが力

もちて靡けむ心ならずも

心なき花の香愛づる不甲斐なさ

思へば戀はかなしかりけり

わが戀を許さぬ娘の眞心を

思へばふかく憎まれもせず

われは今戀の悪魔にとらはれて

行く手も見えず闇にさまよふ

手折るべき花にあらずと思へども

思ひかへせぬ術なき吾なり

よしや身は川の藻屑となるとても

この戀心永久に失せざらむ

朝月の生言靈も夕月の

情言葉も聞かぬ姫かな

腰元のアララギうまくとりこみて

姫の心を動かさむかな

斯かく歌うたふ折をりしも、朝あさ月づき、夕ゆふ月づきは恭うやうやしくも御みま前へに進すすみ來きたりて歌うたふ。

朝あさ月づき 〇 いろいろと言こと靈たま戰いくさ射いむ向かへど

千ち引びの巖いはの動うごくともせず

チちンんリりウうの姫ひめの心こころは大おほ岩いはの

装よそほひなしてびくとも動うごかず

村むら肝きもの心こころつくしてかけ合あへど

よろしき便たよりなく由よしもなき

わが王きみに會あはさむ顔かほもなきままに

惱なやみて居をりぬ夕ゆふ月づきと共ともに 〇

夕ゆふ月づきは歌うたふ。

〇 若わか王ぎみの清きよき心こころを照てらさむと

思おもひしことも夢ゆめとなりける
御おん父ちちを恨うらむ心こころの深ふかくして
チンリウ姫ひめは少すこしも動うごかず
わが力ちから最も早はや盡つきたりこの上うへは
手て玉だまを替かへてのぞまむと思おもふ
』

エームス王わうは歌うたふ。

『さまざまと汝なれら等ふたり二人ふたりが働はたらきを
吾われよみすれど心こころさみしき
この上うへは侍じ女ぢよのアララギ呼よび出いし
先まづは言こと向むけ和やはすべきかな
利りを以もつてさそへば侍じ女ぢよのアララギは
必かならず靡なびかむ如何いかに思おもふぞ
』

朝月あさづきは手てを拍うつて歌うたふ。

□ 若王わかぎみの御言みことかしこみアララギを
招まねきて姫ひめの心こころをさそはむ□

夕月ゆふづきは歌うたふ。

□ アララギの心動こころうごかば必ずかならずや
チンリウ姫ひめもまつろひ來きたらむ□

斯かくて朝月あさづき、夕月ゆふづきは獄吏ごくりにに命めいじ、アララギを縛しばりたるまま、王わうの前まへに引ひき來きたら
しめければ、萬事ばんじに抜目ぬけめなきアララギは、斯かくやと早合點はやがてんしつつエームス王わうの前まへ
に引出ひきだされ、平然へいぜんとして控ひかへ居ゐる。朝月あさづきは先まづアララギに向むかひて歌うたふ。

□ チンリウの姫ひめに仕つかふる汝なは乳母うばの

アララギなるかいざ言問こととはむ

苦くるしかる獄舎ひとやにつながれうごかぬ姫ひめは

汝なれを力ちからにたのむなるらむ

さまざまの責苦せめくにあふより安やすらけく

位くゐと榮さかえをほりせざるにや

汝なが心こころ一つによりてチンリウ姫ひめ

センリウ姫ひめも花はなと榮さかゆべきを

チンリウの姫ひめを殺ころすも永遠とことはに

花はなと活いかすも汝なれの力ちからよ

アララギよ心こころしづめて答こたへせよ

汝なれが生せい死しの境さかひなるぞや

わが王きみの厚あつき心こころをなみすれば

三人みたりの生命いのちは危あやふかるべし
□

アララギは怖おそれ氣もなく満まん面に笑ゑみを湛たへつつ歌うたふ。

□ 及およばざる吾われなりながら姫ひめ君に

王きみの心こころを傳つたへ奉まつらむ

二十はたとせ年を仕つかへ來きたりし姫ひめなれば

わが言こと靈たまをうべなひ給たまはむ

さりながら姫ひめは御おん父ちち御おん母ははを

恨つひませ給たまへば受うけ合あひがたし

言こと靈たまのあらむ限かぎりを打うち出だして

姫ひめの心こころを動うごかして見みむ

朝あさ月つきは面おもをやはらげながら、

□ アララギの言こと葉はよろしも若わか王ぎみの

御爲誠をつくし給はれ
若王の心になひ奉りなば
汝も御國の花と榮えむ
永遠の生命保ちてこの城に
花と匂ひつ清く榮えよ

エームス王は歌ふ。

さかしかる汝アララギを力とし
姫のよろしき便を待たむ
わが思ひ汝が力になるならば
吾は報いむ位を與へて

アララギは歌ふ。

□ ありがたし若王様の御宣言
生命捨ててもかなはせ奉らむ

これよりアララギは、王の御前をさがり、
ウ姫が押し込められて居る獄舎に歸り來り、
チンリウ姫の心を動かすべく、言葉
をつくして歌ふ。

□ チンリウ姫よ聞き召せ
われは御前に引き出され
さも恐ろしきくさぐさの
王の御言を目のあたり
宣り聞かされて驚きぬ
吾等三人は今宵限り
夕べの露と消ゆる身よ

水責め火責めは未だ愚か

あらゆる責苦にあはされて

鶯り殺しにあふところ

わが言靈を善用し

エームス王の御心

和め奉ると百千々に

心を碎きし甲斐ありて

姫君様の返辭

一つによりて生死の

別るきはとなりけり

チンリウ姫の御君よ

生命ありての物種よ

如何なる恨みはおはすとも

生命なければ報ゆべき

術すべは絶ぜつ對たいなかるべし
ここは暫しばしく御みこころ心を
和なごめ給たまひてエエームスの
王きみの心こころにまつろひて
惜をしき生いのち命たもを保たもちませ
アアララギ吾われも姫ひめ君ぎみと
同おなじ心こころに恨うらめども
何なんとせむ術すべなきままに
恐おそれ多おほくも姫ひめ様さまを
エエームス王わうの妃ひの君きみに
奉たてまつらむと誓ちかひけり
許ゆるさせ給たまへ姫ひめ君ぎみよ
戀こひしき御おん父ちち御おん母ははに
會あはせ奉まつるとアララギが

眞心まごころこめての仕組しぐみなり
必かならず悪あしく思おほすまじ
忠義ちうぎ一途いちづに固かたまりし
このアララギの眞心まごころを
完全うまらに委曲つばらに聞きこし召めし
エームス王わうの戀心こひごころ
満みたさせ給たまへ惟かむながら神
神かみの仕組しぐみと思おもふ故ゆゑ
眞心まごころこめて願ねぎ奉まつる
若もしも諾うべなひ給たまはずば
アヅミの王きみの御娘おんむすめ
尊たふとき御身おんみは忽たちまちに
重おもき生命いのちを奪うばはれて
仇あだをかへさむ由よしもなく

恨みの鬼となり下り
千代に八千代に浮ぶ瀬は
泣くなく歎きに沈むらむ
まげて吾等が願ひをば
許させ給へと願ぎ奉る。

姫君の心知らずにあらねども
生命のためにすすめ奉るも
姫君の生命を無事にささへつつ
御親の恨みはらさむと思ふ

チンリウ姫はわづかに歌ふ。

情なき乳母アラギの言葉かな

敵にわが身を任すべきやは

武士の娘と生れし吾なれば

よしや死すとも惜しまざるべし

アラギの禮なき言葉聞くにつけ

わが魂は死せむとするも

玉の緒の生命惜しみて父母の

仇にまつらふ不孝はなさじ

千萬の甘き言葉も吾身には

濁れる曲のささやきなりける

センリウ女は歌ふ。

姫君の言葉うべよと思へども

ここ暫くを忍ばせ給へ

姫君の心一つにつながりし

吾等が生命あはれみ給へ

姫君の答の如何は三人の

玉の生命にかかはるものぞや

わが母と吾等が生命諸共に

救はせ給へチンリウの姫君

チンリウ姫は歌ふ。

恨めしき仇なりながら汝等母子の

生命思へばためらひ心湧く

如何にせむ行きもかへりもならぬ身の

吾は死すより苦しかりけり

アララギやセンリウ姫を殺すかと
思へばかなしき生命のわが身よ
わが心かなはずまでも今暫し
エームス王の御言にかなはむ

斯く歌ひ終るや、朝月、夕月は物蔭より現はれ來り、
聲もさはやかに歌ふ。
朝月の歌。

あはれあはれ姫の心の大きさに
木田山城は甦りたり

エームスの王はさぞかし御心の
清きを聞きて歡ぎ給はむ
吾もまたチンリウ姫の御言葉
聞きて生命の榮えを思ふ

夕月は歌ふ。

ありがたし心つくしの海の面に

冴えたる月は浮ばせ給へり

チンリウ姫雄々しき心聞くにつけ

吾はかげより男泣きせり

ありがたき御代の榮えのためしかな

エームス王に妃迎へて

いざさらば王の御前にまつぶさに

姫の眞心傳へ奉らむ

アララギよチンリウ姫よセンリウよ

心安かれやがて迎へむ

アララギは歌ふ。

□ ありがたしチンリウ姫の眞心に

われ等が生命救はれしはや

エームスの王の御前にわが宣りし

生言靈を傳へ給へよ

朝月は歌ふ。

□ アララギの心づくしの功績を

うまらに王に傳へ奉らむ

よき便り待たせ給へよ吾は今

王の御前にかへりごとせむ

斯くしてエームス王の戀は漸く曙光見えたれば、王は直ちにチンリウ姫以下を
牢獄より開放し、立派なる衣裳に着替へさせ、王の宮殿に參入せしむることとは

なりぬ。

(昭和九・八・一四 舊七・五 於水明閣 内崎照代謹録)

第一四章 鷺と烏(二〇四)

茲にチンリウ姫は乳母アララギの、ことを解けての懇願により、敵の大將エールスの太子エームスの妃となる事を心ならずも承諾し、一時の難を免れむとしたるこそ憐れなれ。エームス王は欣喜雀躍しながら、群臣に命じ、奥殿に於て目出度く結婚式を行ふ事を嚴命せしにぞ、木田山城内は鼎の沸くが如く、上を下への大騒ぎ、若王の目出度き結婚なりと、尊きも卑きも歡喜喜ばむものはなかりけり。中にもチンリウ姫は結婚の花形役者として、今日までの牢獄住ひに引替へ、地獄より天國に上りし如くなれど、心中稍悲歎の涙に暮れ居たりけり。エームス王はチンリウ姫を奥殿に招き温顔を満面に湛へながら歌ふ。

エームス王の歌。

夕顔ゆがほの匂におへる庭にはに汝なが姿すがた

認みとめて吾われは惱なやみに落おちたり

何事なにことも時世ときよ時節じせつと諦あきらめて

吾われに許ゆるせし君きみは愛かなしも

君きみが心こころ吾われにあはあはず玉たまの緒をの

生命いのち死しせむと惱なやみ來きしよな

天地あめつちの神かみの恵めぐみの露つゆ浴あびて

今日けふは嬉うれしく君きみに會あふかも

玉たまの緒をの生命いのちも吾われは惜をしむまじ

君きみの心こころに抱いだかる身みは

父母ちちははの禮あやなき業わざを許ゆるしませ

やがて酬むくいむ君きみの心こころに

汝なが父ちちを安やすきに救すくひまゐらせて
イドムの城しろに迎むかへ奉まつらむ
吾わが心こころ君きみの御みま前に打うち明あけて
二ふた心こころなきを誓ちかひ置おくべし
』

チンリウ姫ひめは歌うたふ。

』
若わか王ぎみの大おほ御み心こころに叶かなひたる
吾わが幸さちはひを神かみに感あ謝やひす
永とこ久しへに王きみの御み側そばに仕つかへつつ
吾わが垂た乳ら根ねに會あふ日ひを待またむ
垂た乳ら根ねの心こころの惱なやみ思おもひつつ
はからず王きみにいそひ奉まつるも
』

エームス王は歌ふ。

玉の緒の生命をかけし戀故に

天にも昇る思ひするかな

朝月や夕月、アララギ、センリウの

眞心照りて今日は樂しも

アララギは歌ふ。

若王の清き御前に招かれて

嬉しさゆゑに吾魂震ふも

チンリウの姫の心を慰めつ

今日の吉日に吾は逢ひにき

若王に永久に仕へて吾も亦

御國みくにの榮さかえを祈いのり奉まつらむ

朝月あさづきは歌うたふ。

若王わかぎみの御言みこと畏かしこみさまざまと

言靈ことたま打うちて破やぶれけるかな

如何いかにして姫ひめの心こころを迎むかへむと

千々ちぢに心こころを碎くだきけるかや

チンリウ姫ひめ心こころうごきて吾魂わがたまは

いや新あたらしく光ひかりそめたり

夕月ゆふづきは歌うたふ。

吾われも亦また如何いかがなるやと危あやぶみし

姫ひめの心こころは動うごき初はじめたり

アララギの生いく言こと靈たまの助たすけにて

今け日ふの吉よ日きひに逢あふぞ嬉うれしき

いよいよ茲ここに盛せい大だいなる結けつ婚こんの式しきを舉あげることとなり、城しろの内ない外ぐわいには國くに津つ神かみ等たちの歡くわん呼この聲こゑ、天てん地ちを動ゆるがすばかりなり。殿でん中ちゆうには莊さう嚴こんなる結けつ婚こん式しきが開ひらかれてゐる。媒ばい介かい役やくたるアララギは祝しゆ歌かを歌うたふ。

天地あめつちの開ひらき初はじめてゆ例ためしなき
今け日ふの吉よ日きひに逢あふぞ目め出で度たき。

大おほ榮さか山やまに日ひは昇のぼり
木き田た川が面はに月つき浮うかぶ

木田山城の清庭に
大宮柱太知りて
備へも堅き此の城に
エールス王の若王は
アヅミの王の愛娘
チンリウ姫を迎へまし
今日の夕べの吉時に
華燭の典を擧げ給ひ
夫婦仲よく睦まじく
千代の堅めを永久に
サールの國の國王と
國津神等に敬はれ
堅磐常磐の巖ヶ根に
果なき廣き國原を

領有うしはぎ給たまふ代よとなりぬ

父ちちだいわう大王おほさかは大おほ榮さかの

御山みやまを越こえて今いまははや

イドムくの國くにの王わうとなり

アヅミきみの王きみを退しりぞけて

時ときめき給たまふ尊たふとさよ

さはさりながら吾王わがきみは

仁慈じんじむげん無限むげんにましまして

國津神くにつかみ等をあは愍あはれまし

惠めぐみの露つゆに霑うるほひて

鳥獸てうじうちうぎよ蟲魚ちうぎよにいたるまで

王きみの御德みとくに服從まつるひて

今けふ日の吉日よきひを歌うたふなり

木田山城きたやまじやうの茂森しげもりの

梢こずゑに潜ひそむ田鶴たづの聲こゑ

いともさやかに聞きこゆなり

松まつは千歳ちとせの色いろ深ふかく

常磐ときはの状さまを現あらはせり

チンリウ姫ひめは賢女さかしめよ

又また細女くはしめよ此この國くにの

妃きよきの君きみと現あれまして

四方よもに輝かがやき給たまふべし

吾われは二十はたとせ年ひめぎみ姫君の

御側みそばに侍はべり仕つかへ來きて

今日けふの吉日よきひに逢あひけるも

神かみの惠めぐみの露つゆなれや

ああ有ありがた難めし目め出で度たしと

今日けふの吉日よきひを祝ほぎ奉まつる
』

エームス王は歌ふ。

昔むかしより例ためしも聞きかぬ喜よろこびに

逢あひにけらしな姫ひめを娶めとりて

天地あめつちは清きよく晴はれつつ吾わが胸むねも

御空みそらの月つきと晴はれ渡わたりつつ

大榮山尾おほさかやまをの上へに澄すめる月光つきかげも

今日けふは一ひとしほ入すが清すがしかりけり

野邊のべを吹ふく風かぜの響ひびきも何なんとなく

今日けふの喜よろこび歌うたふがに聞きこゆ

大榮山尾根おほさかやまをにかがよふ月影つきかげも

木田きたの流ながれに浮うかびて祝いはふ

小波さざなみも立たたぬ夕ゆふべの川かはの面もに

月影つきかげ圓まるく澄すみきらひたり

吾心頓に勇みて天地に

生の生命の尊さ思ふ

吾父の心とめて妻の爲に

イドムの國を蘇らせむ

斯くならばアヅミの王は吾父よ

エールスも亦父なりにけり

イドム國サールの國と手を引きて

伊佐子の島に永く榮えむ

チンリウ姫は歌ふ。

何事も皆打ち忘れ今日の日

吾は嫁を樂しむものなり

時まちて父の御國を返さむと

思おもふは吾わが身の願ねがひなりけり

情なさけあるエームス王わうの妃ひとなりて

親おやに孝かう養やう盡つくさむと思おもふ

木きた田た山やま城じやう照てらす夕ゆふべの月つき見みれば

笑ゑませ給たまへり王きみの面おもに似にて

朝あさ月つきは歌うたふ。

国くに津つ神かみ山やまの如ごとくに集あつまりて

今け日の吉よき日ひを歌うたふ聲こゑすも

幾いく萬まんの国くに津つ神かみ等らの関ときの聲こゑ

天あめと地つちとに響ひびき渡わたれり

夕ゆふ月つきは歌うたふ。

夕ゆふづき月のひかりさ光ひかりさ冴さええにつつ若わか王ぎみの

今け日ふのよろこ喜こびい祝いはふがにみ見みゆ

吾われもまた亦またこれの蓆むしろにつら列つらねられ

嬉うれしさあまりてこと言ことのは葉はもなし

山やまもかは川かはもよろこ歡よろこぎよ喜こぶさ状ま況ま見みえて

五さ月つきのあめ雨あめはは晴はれあ上ありたりたり

セうたンうたリうたウうたはうた歌うたふ。

姫ひめ君ぎみのを雄を々を々をしこ心こころのさち幸さちはひに

安やすけいくは異い邦はうのつき月つきをみ見みしかな

前さきのひ日ひにしイしドしムむのしろ城しろになが眺ながめてし

月つきにまもま増ましてすが清すがしかりけり

吾わが姿すが面たおもざひめしぎまぎまでひめもぎ姫ひめ君ぎみに

似たりと人の言ふぞあやしき』

アララギは歌ふ。

☞ 姫君も汝も吾乳呑み足りて

はぐくまれたる爲なりにけり

賤女といへども汝は乳兄弟

姫にまがひて美しきかも』

いよいよチンリウ姫は結婚の儀式を済ませ、是より王の寢室に進み入る事となりけるが、乳母のアララギは勝れざる面持にて、竊かにチンリウ姫を一間に招ぎ語るらむ。

☞ 姫様、大變な私には心配事が出来ました。如何致しませうかと思案に暮れて居りますが、どうか御許し下さいませ。乳母が一生の過ちですから』

と、チンリウ姫は意外の乳母の言葉に胸を轟かせながら、

「今となり怪しき言葉聞くものか

汝の面に愁ひ漂ふ」

乳母のアララギは一入聲を潜めて、

「姫様、これが心配せずに居られませうか。瀧津瀬、山風の側女に承りますれば、

今まで王様は幾度も美しき妃をお迎へになつたさうであります、何れも一晩きりでお生命がなくなるさうで、其の噂が遠近に傳はり、それゆゑに此の國では王様の妃になるものはないさうで御座います。如何に高貴な身になつても生命がなくしてはなりませんからなあ。かくなる上は逃げ出さうとしても蟻の這ひ出る隙間もありませんから」

と、息はづませて耳打ちする。

チンリウ姫は歌ふ。

□ 恐ろしき事を聞くかもアララギの

言葉も眞言と思へば恐ろし

如何にして此の場を逃れ永遠の

吾は生命をながらへむかな

アララギによき智慧あればかしてたべ

吾玉の緒の生命は重し

アララギは一入聲を潜めて言ふ。

□ 姫様、この王様は熊と虎との中から出来た猛獸の化物で、あんな優しい姿はし

て居られますが、夜分になつて抱き付かれますと、餘りに腕の力が強いいため、か

弱き姫君様は一息に締め殺されて、なくなるとの事、私も廿年間お仕へしまして、

今此の所で大切な姫君様を殺されたら申譯が立たず、いろいろ考へた結果、一つ

のよき智慧を搾り出しました。つまり吾娘センリウは乳兄弟の間柄故、姫様と面
貌、姿寸分違はず、菖蒲と燕子花との區別が分らぬと申しますから、是を幸ひ姫

様の御装束を着替へさせ、姫様はセンリウの着物を召して暗がりくらに隠れかく、今晚こんばん一いち夜やだけ様子を考へる事ことに致いたませう。センリウは賤いやしき私の娘むすめで御座ございますから、貴賤きせんの差さは天地てんちに比くらぶべきもので御座ござります。それで今夜こんやの替玉かへだまを御許おゆるし下くださらば、屹度きつと姫様の危難きなんをお救すくひ申まうし上げます。』

と、言葉巧ことばたくみに説とき立たつれば、チンリウ姫ひめは乳母うばアララギの黒くろき心こころを少すこしも覺さとらず、盛装せいさうを脱ぬぎ捨てセンリウ姫ひめに着替きかへさせ、自分じぶんはセンリウ女の着物きものを着ちやくし一ひと間に潜ひそみ待ち居あたりける。然しかるに其その夜よは餘あまり變かはりたる様さまもなく、センリウ女ぢよは欣然きんぜんとして朝庭あさにはを逍遙せうえうして居ある。チンリウ姫ひめは乳母うばの袖そでを引ひきて小聲こゝろになりながら、

「乳母うば、夜前やぜんは何も事ことがなかつたさうだが、王様わうさまは一體いつたい何なんと思召おほしめして御座ござらうぞ。替玉かへだまを使つかはれて御心みこころが付つかないのであるうか。』

と、稍心配やしんばい氣けに言いひければ、乳母うばアララギはチンリウ姫ひめの耳みみに口くちを寄よせ、

「此この祭壇さいだんに飾かざりある水晶すゐしやうの花くわ瓶びんを庭にはに持出もちだし、小石こいしを持もちて静しづかに打うつ時ときは、忽たちまち王様わうさまの歡心くわんしんを得えて、必かならず姫様ひめさまを愛あいし給たまふと言いふ事ことで御座ござります。王様わうさまは吾娘わがむすめ

センリウを眞正の姫様と思ふて居られますさうですから、夜前の替玉を恐れ多く申されませぬから、此の花瓶を庭に持ち出し、少しくお打ち下さいませ。清き音が出ますから」

と、最と懇切に説き諭せば、おぼこ娘のチンリウ姫は深き計略のあるとは知らず、水晶の花瓶を庭に持ち出し打ち給ひければ、水晶の花瓶はポカリと二つに破れた。之を見るより乳母アララギは、チンリウ姫の髻をグツと握りて引摺り廻しながら、

「汝は姫様の侍女でありながら、お家の重寶を石をもつて叩き破るとは言語道斷、吾子であつて吾子でない。皆様、大罪人が現はれました」
と、大音聲に呼ばはるや、數多の司等が集まり來り、十重二十重に取巻き、狼藉者を逃すなと手毎に得物をもつて攻め來る。

チンリウ姫は事の意外に驚き、乳母アララギに向ひ、

「汝の娘にあらず」

と呼ばはりければ、アララギは發覺しては大事と、姫の口に眞綿を含ませ猿轡を

かませ、頭部面部を打ち据えければ、血にじみ上り似ても似つかぬ醜惡なる面となりければ、茲に憐れや大罪人としてチンリウ姫は遠島の刑に處せられけり。
(昭和九・八・一四 舊七・五 於水明閣 森良仁謹録)

第一五章 厚顔無恥〔二〇四二〕

大奥に於けるエームス王とチンリウ姫の結婚式の餘り莊嚴なるに、乳母のアララギは俄にねたましく野心むらむらと起り、如何にもしてチンリウ姫のセンリウに酷似せるを幸ひ、惡計を捻り出し、うまうま姫を罫に陥れ、これを遠島の刑に處せしめしは、憎みても餘りある奸佞邪智の曲者なりける。エームス王は姫の替玉とは知らず、贗物をつかまされ、チンリウ姫と深く思ひ込み、晝夜心を用ひて寵愛してゐる。アララギは、しすましたりと王妃となりしわが娘と、竊かに顔を見合はせ、舌を吐き出し微笑んでゐる。いよいよ結婚式は濟み、十日を経たる月

明の夜、殿内に於て重臣を集め、祝賀會を開かるる事となりぬ。

エームス王始め數多の重臣は、アララギの公平なる處置に感激し、各口を極めて讚辭を呈し、エームス王も亦、アララギの公平なる處置に感嘆の餘り、一切萬事を委託して殿内の總ての事務を處理せしめれば、アララギの聲望は旭日昇天の如く、彼が意に少しにても逆らふ者あらば、悉く手打ちにされ、投獄され、或は遠島の刑に處せらるるのおそれありければ、何れも恐れを爲してアララギの事を口にする者なかりける。

祝賀の宴は開かれた。エームス王は立つて歌ふ。

公の心を持ちて私を

捨てしアララギいそしかりける

最愛の吾子の罪を包まずに

島に流せと宣りし素直さ

アララギの娘の事を思ひ出で

われは憐れを催しにけり」

アララギは立つて歌ふ。

㊦ 吾王の御言葉畏しさりながら

國の掟を亂し給ふな

吾子とはいへど天地の罪人よ

依怙なき王は許し給ふな

吾娘國の寶を打ち破り

如何で其の罪逃るべしやは

吾王はよし許すとも國津神は

この過ちを許すべきかは

わが娘許さるる事あるならば

われは代りて罪に服せむ」

王妃は歌ふ。

二十年をわれに仕へしアララギの

公心を神は知るらむ

二十年の長き月日を育みし

吾子の罪をさばく雄々しさ

センリウの罪重ければ何時までも

かくれの島に閉ぢこめ置かむ

萬死にも値するなる大罪を

許さむ掟我國に無し

われは今聖の君に伊添ひつつ

サールの闇を照らさむと思ふ

アララギよ汝が清けき心もて

わが政治補けまつれよ

男をの子こにも勝まさりて雄を々をしきアララギは
サールの國くにの力ちからなるかも』

アララギは歌うたふ。

㊦
ありがたしチンリウ姫ひめの御み宣こと言のり

たしに守まもりて違たがはざるべし

今け日ふよりは百ももの司つかさの上うへに立たち

王きみの政せい治ぢを補おぎなひまつらむ

吾わが王きみよ罪つみを造つくりしセンリウに

必かならず心こころ配くばらせ給たまふな

血ちを別わけし吾わが子こなりとて許ゆるしなば

サールの國くにの掟おきては亂みだれむ

王きみ思おもひ御み國くにを思おもふ誠まご心ころに

歎きの涙われはしほらし』

朝月は歌ふ。

けなげなるアララギの君ましまして

王の御心照らし給へり

チンリウ姫堅き心を和めつつ

今日の歡び招きし君はも

チンリウ姫の崇高き御姿朝夕に

拜みまつりて國の秀をおもふ

若王はいと健かにおはしまして

御機嫌よきが嬉しかりけり

さりながらかくれの島にやはれし

センリウ姫は悲しかりけり

大君おほぎみの清きよき心こころに宣のり直なほし
許ゆるさせ給たまへセンリウ姫ひめを〃

アララギは、むつくと立たつて歌うたふ。

わが王きみよ必かならず許ゆるし給たまふまじ

國くにの掟おきては嚴おしそかなりせば

朝月あさづきの司つかさの言ことば葉は聞きくにつけ

われは御國みくにの爲ために悲かなしむ〃

夕月ゆふづきは歌うたふ。

過あやまちて國くにの寶たからをこはしたる

センリウ姫ひめは悲かなしき人ひとかも

國くにの掟おきて嚴あじかなりとはいひながら

無心むしんの過あやまち許ゆるすべきかは

知しらず知しらず過あやまちし罪つみをきたためなば

かへりて國くには治をさまらざるべし

夕月ゆふづきは生命いのちをかけて吾王わがきみに

センリウ姫ひめの許ゆるしを願ねがふ

王妃わうひは歌うたふ。

ㄣ
朝月あさづきや夕月ゆふづき二人ふたりの言ことの葉は

宜つへよと思おもへど永久とほに許ゆるさじ

畏おそれ多くも國くにの寶たからを壞こはしたる

罪つみに勝まされる罪つみはなからむ

いや古ふるきサールの國くにの魂たましひを

打ち砕きたる罪は重けれ
祖々の世より傳はる水晶の
花瓶を割りし憎き罪人
手に觸るるさへも畏き御寶
打ち砕きたるセンリウ憎しも
吾生命あらむ限りは許すまじ
國の寶を砕きたる罪

アララギは歌ふ。

姫君の實にも明るき御宣言
サールの國の闇を照らさむ
夜の鶴焼野の雉わが御子を
思はぬものは世にあらじかし

さりながら如何に吾子といひつれど
この罪ばかりは許す術なし

瀧津瀬は歌ふ。

アララギの君の雄々しき志

聞くにつけても涙こぼるる

かくの如公平無私のアララギの

たたす御國は安けかるべし

たをやめの女ながらも鬼まさり

雄々しき君は國の光りよ

若王の朝な夕な政治

補けて君は永久にましませ

常闇のサールの國も今日よりは

あまつひ
天津日の如輝き渡らむ

ひめぎみ
姫君はイドムの王の愛娘

をを
さかしく雄々しく世に臨みますも

いま
やがて今イドム、サールの兩國は

しちたいへい
至治太平の御代と榮えむ

きたがは
木田川の廣き流れも今日よりは

す
澄みきり渡らむ姫の光りに

おほさか
大榮の山の尾の上ゆ吹き下す

かぜあたた
風暖かくなりにつけらしな

とらくま
虎熊や獅子狼のやからまで

きみ
王の恵みに伊寄り集ふも

ありがた
有難き御代となりけりアララギの

つかさ
司のいますサールの國原

ほととぎすあめ
時鳥雨になきたる國原も

今は隈なく晴れて清しき
大榮山樹海を渡る山風は
これの館に涼しく渡れり

山風は歌ふ。

昔より例も知らぬこの國の
榮を見たるわれぞ嬉しき
野も山も緑の衣着飾りて
サールの國を壽ぎ渡らふ
さ緑の樹海を渡る山風の
涼しき心王は持たせり

朝月は再び歌ふ。

□ 波なみの奥おくかくれの島しまに送りてし
姫ひめの心こころを思おもへば悲かなし
畏おそれながら誠まことの姫ひめに非あらずやと
わが魂たましひはささやきて居をり□

チンリウ姫ひめは目めに角かどを立てながら、言葉ことばせはしく歌うたふ。

□ 朝月あさづきのゐやなき言葉ことば聞くにつけ
わが魂たましひは打ちうふるふなり
朝月あさづきのゐやなき言葉ことばをきたためませよ
吾王わがきみわれを愛めくしと思おぼさば
似にたりとはいへどもわれとセンリウは
貴賤尊卑きせんそんびの別べつあるものを□

エームス王は歌ふ。

□ チンリウ姫の言葉は宜よ朝月の

ゐやなき言葉われはとがめむ

朝月のかげは眞白に薄れつつ

やがて消えなむわが言の葉に

朝月の重き罪をば負はせつつ

人なき島に遠く流せよ

ここに王命もだし難く、朝月は王と王妃の怒りにふれ、忽ち宴會の席上より全身を荒繩に縛られながら、大罪人として遠島の刑に處せられしこそ是非なけれ。

あはれ、朝月はチンリウ姫を疑ひし廉により即座に重き刑に處せられ、衆人環視の中を引立てられ、城外におびき出され、遂には島流しの憂目を見るに到れり。エームス王、チンリウ、アララギはその後姿を打ち見やりながら、愉快げに微

笑みつつアララギは歌ふ。

□ 明らけき王のさばきに朝月は

返す言葉もなかりけるかな

姫君を陥れむと朝月は

言葉かまへて亂さむとせし

天地の神のきためは眼のあたり

朝月今はかげだにもなし

我國の掟厳しくなさざれば

やがて亂れむ上と下とに

吾王の正しき判決見るにつけ

末頼もしく思はるるかな

チンリウ姫は、

心こ地こよちきこ事とを見みるかななるやなくも

われをなみせし罪酬むい來て

わが前に疑ひあれば何事も

言こ擧とげせよや直たに判決さかむ

エームス王わは歌ふ。

木き田た山や城まの内外とを亂し破らむと

謀たみし曲まは看破みられたり

朝あ月さは表面うに誠を装ひつ

爪つをかくせし虎なりにけり

曲ま神がはわが館より追ひ出され

荒あ浪らの上にただよふなるらむ

チンリウ姫ひの身の上につき疑ひの

言葉出さば追ひやらふべし
かくの如正しき姫を贖物と
疑ふやからの心は曇れる』

瀧津瀬は歌ふ。

われは今正しき判決を目のあたり

眺めて心戦きしはや

日月は空に照れども中空に

黒雲起りて地上にとどかず

黒雲を拂ひ給ひしわが王の

清き判決は尊かりけり

御姿崇高くいます姫君を

疑ふ司の心あやしも』

山風は歌ふ。

かくの如明るき姫に疑を

かくる心は曲津なりけり

わが王と姫の命に服従ひて

身も魂も千代に仕へむ

アララギの君の明るき魂を

われは力と謹み仕へむ

これより木田山城内はアララギが權威を振ひ、奸佞邪智の輩を重用し、正義の士は悉く難癖をつけ、或は殺し、或は流し、或は牢獄に投じければ、悪人益々跋扈して、サールの國內各所に暴動勃發し、怨嗟の聲は山野に満ち、國家の危き情勢を馴致したるぞ是非なけれ。

ここにチンリウ姫は、乳母アララギの奸計にかかり、吾子のセンリウと強ひら

れ、且つ國寶破壊の罪を負はされ、かくれ島に流されけるが、この島は夕さり來れば荒浪の爲に全島没し、これにある人畜は溺死するといふ魔の島なりけり。アララギは奸計の發覺をおそれ、特にこの島に主人のチンリウ姫を送らせたるにぞありける。又朝月は王の怒りにふれて、かくれ島より約五十哩ばかり沖にある荒島といふ岩石のみにて固まりし一孤島に捨てられ、歎きの月日を送りつつ魚介を餌食として、天の時を待ちゐたりける。

アララギの悪しき謀計に乗せられて

チンリウ姫は流されにけり

朝月も亦アララギの計略に

荒島さして流されにけり

悪神は一度は花咲榮ゆとも

時の到ればもろく亡びむ。

(昭和九・八・一四 舊七・五 於水明閣 林彌生謹録)

第四篇 猛獸思想

第一六章 龜神の救ひ〔二〇四三〕

山川は清く爽けく果實は 豊かに實る伊佐子の島の眞秀良場や
天國樂土と聞えたる イドムの國に名も高き
イドムの城の御主 アヅミ、ムラジが二人が仲に
昇る朝日と諸共に 初聲擧げしチンリウ姫は

こよなき寶たからと兩親りやうしんが 日夜心にちやこころをつくしつづ

育はぐくみここに二十年にじふねん 花はなの盛さかりの春はるの宵よひ

サールの國くにのエールスが 暴虐無道ぼうぎやくぶだうの魔軍まいくさに

攻め破やぶられて父母ちちははは 遠とほくイドムの城しろを捨すて

月光山つきみやまに逃のがれまし 一陽來復いちやうらいふく時待ときまち給たまふ。

「かなしき吾われは如何いかにして かかる憂目うきめに會あふものか

天地てんちの神かみのいますならば 吾等われらが今日けふの悲かなしみを

救すくはせ給たまへ惟神かむながら 偏ひとへに願ねがひ奉たてまつる

春はるの夜よの暖あたたかき夢ゆめを破やぶられて 敵てきに捕とらはれ繩目なはめの恥はぢを

主しうじう從みたり三人あ遇あひながら さも荒あら々あらしき駿馬はやこまの

背せなに運はこばれはるばると 戀こひしき故國ここくを後あとにして

大榮山おほさかやまの嶮けんを越こえ 前まへも後うしろも魔軍まいくさに

圍かこまれサールの國くに中の 木田山城きたやまじやうの牢獄らうごくに

歎なげきの月日つきひを送おくる折をり 仇かたきの太子たいしの戀慕れんぼより

又も一きは惱みしが

賢しき乳母の忠言を

心ならずも諾ひて

木田山城の奥の間に

エームス王と結婚の

儀式を擧ぐる間もあらず

乳母アララギの奸計に

うまうまのせられ忽ちに

大罪人と強ひられて

口には嵌ます猿轡

撃ち打擲のその揚句

血潮したたり面破れ

見るかげもなき吾姿

セシリウ侍女とさげすまれ

數多の騎士に送られて

荒浪猛る磯ばたに

送られ是より獨木舟

潮の流れのそのままに

身を捨小舟忽ちに

逆まく波のゆくままに

これのさびしき島ヶ根に

知らず知らずに着きにけり

ああ如何にせむ今となりて

言問ふ由も泣く涙

空ゆく雁の影あらば

吾憂きことを垂乳根の

御側近く傳へむと

思へど望みは水の泡

消えてあとなき泡沫の

闇路を辿る心地かな

闇路にさまよふ心地かな

獨木舟をあやつり、ここに送り來りし一人の毛武者の騎士は、隱の島に姫を上陸させ、聲もあらあらしく、

「こりや尼つちよ、端女の分際としてお國の寶を打ち毀した天罰によつて、その方はこの隱島に捨てられたのだ。もうかうなる上は、今日ぎりの生命だ、覺悟するがよからう。この島は隱の島と言つて、晝は水面にポツカリと浮んでゐるが、そろそろ陽が沈み出すと潮が高まり來り、この島は【ずんぼり】と波の底に沈んで仕舞ふのだ。この島に捨てられたが最後、魚でない限り到底生命の助かりつことはない。てもさてもいぢらしいものだ。俺も内密で貴様の様な美人を助け出し、女房にしたいは山々なれど、磯端には澤山の目附が騎士を引き連れて監視してゐるから、それも仕方がない。可哀さうだが、もう暫くの生命だ。いづれ鮫がやつて來て腹の中へ葬つてくれるだらう。まあ感謝したがよからう。泣いても叫んで

も、かうなりや仕方がない。然しながら貴様をこの島に捨てたと言ふ標がなくは承知せまい。肉の附いた一握りの髪の毛を持つて歸るか、お前の耳をそいで歸るか、それでなくちや袖でも擦ぢ斷つて、隱島特有の貝でも持ち歸り、證據にせなくつちや今日の勤めが果せぬのだ。可哀想だが、たつた今死ぬる生命だ。耳の一つ位取つたつて惜しくもあるまい」

と言ひながら石刀を懐より取り出し、姫を矢場に地上に打ち倒し、しきりと泣き叫ぶ姫に目もくれず、鋸引きにして左の耳を切りとり、血の滴る姫の顔を冷やかに打ち眺めながら、
「ヤアもう時刻が迫つた、ぐづぐづしてゐると、俺の舟までどうなるか解らない」と言ひながら足早に獨木舟に飛び乗り、艚をあやつり夕靄の包む海原を急ぎ歸りゆく。

姫は進退維谷まり悲歎やる方なく、運を天にまかせて、死期を待つより何の手段もなかりける。

姫は刻々に沈みゆく島の頂上に立ち微かに歌ふ。

思おもひ廻まはせば廻まはす程ほど
吾われほど悲かなしき者ものは世よに
又またとあらうか父母ちちははは
敵てきに城しろをば落おとされて
今いまは行ゆく方も白雲しらくもの
遙はるかの國くにに出いでましぬ
妾わらはは騎士ナイトに送おくられて
敵てきの本城ほんじやう木田山きたやまに
繩目なはめの恥はぢを忍しのびつつ
晝夜ちうやの別わかちもあら涙なみだ
泣なき暮くらしたる折をりもあれ
エームス王わうの戀慕れんぼより
色々いろ々さま々さま言問こととはれ
止やむを得えざれば本心ほんしんを

まげて仇なるエームスに
仕へむとせしは一生の
あやまりなりしか村肝の
心汚き乳母母子に
うまうま計られ今ここに
吾身は悲しき捨小舟
鳥の聲さへ絶へはてし
隠の島に捨てられて
今に知死期を待たむより
果敢なき吾身となりけり
この世に生きて仇人の
牢獄に繋がれ朝夕を
繩目の恥をさらすより
いつそ死なむと思ひつつ

また父母の御上に

心くばりて再會を

望みしことも仇なれや

浪は次ぎ次ぎ高まりて

吾立つ島は荒潮に

その大方は吞まれたり

ああさびしもよ、かなしもよ

夢になりともこの歎き

父と母とに知らせたや

歎きの涙つきはてて

今は知死期を待つのみぞ

浪の音いや高まりて寄せ來るは

吾身の生命を奪ひ去る

猛き獸の聲にして

さも恐ろしき夕かなおそ ゆふへ

斯く歎きの歌を歌ふ折しも、隠島の最頂上に立てる姫の膝を没するまで水量ま
さりけるが、姫は最早これまでなりと覺悟を極むる折もあれ、大いなる龜いづく
よりか現はれ來り、姫の前にボツカリと甲羅を浮かせ、わが背に乗り給へと言は
むばかり頭をもたげてひかへ居る。チンリウ姫はこれこそ神の助けと矢場に龜の
背に打ち乗れば、龜は荒浪をくぐりながら南へ南へと泳ぎゆく。
チンリウ姫は龜の背に立ちながら微かに歌ふ。

この龜は神の使かわが生命

完全に委曲に救ひたるはや

大いなる海龜の背にのせられて

故郷に歸ると思へば嬉しも

様々の惱ひに遇ひて海龜の

助けの舟にのせられにける

龜よ龜よサールの國に近よらず

イドムの磯邊に吾を送れよ

獨木舟にまして大けきこの龜は

海の旅路も安けかるべし

海原に立ちのぼりたる靄も晴れて

御空の月は輝き初めたり

天地の神も憐れみ給ひしか

助けの舟を遣はし給へり

何事も神の心にまかせつつ

浪路を渡りて國に歸らむ

曲神の伊猛り狂ふ醜國に

送られ吾は悩みてしかな

アララギの深き奸計は憎けれど

吾は忘れむ今日を限りに

たのみなき人の心を悟りけり

乳母アララギの爲せし仕業に

センリウは吾身に全くなりすまし

妃となりてゑらぎ居るらむ

外國の仇の王の妻となる

センリウ姫は憐れなりけり

吾靈魂身體共に汚さるる

眞際を救ひし彼なりにけり

かく思へばアララギとても憎まれじ

吾操をば守りたる彼

暫くの榮華の夢を結ばむと

仇に従ふ心の憐れさ

吾は又心の弱きそのままに

仇あだに身魂みたまをまかさむとせし

ありがたし神かみの恵めぐみの深くして

吾わが身體からだは汚けがさずありけり

夕ゆふされば波間なまに沈しづむ島しまヶ根がねに

捨すてられし吾われも救すくはれにけり

この龜かめは次第しだい々々しだいに太ふとりつつ

海原うなばら安やすくなりけりしな

大空おほぞらに水底みそこに月つきは輝かがやきて

海原うなばら明あかるく眞晝まひるの如ごとし

龜かめよ龜かめイドムの國くにに送おくれかし

アヅミの王きみのいます國くにまで』

龜かめは無言むごんのまま荒浪あらなみを分わけ、一瀉千里いつしやせんりの勢いきほひにてサールの國くにの方面ほうめんへは頭かしらを向むけず、南みなみへ南みなみへと、イドムの海岸かいがんさして走はしりつつありける。

あかつきか
曉近き頃、大龜は數百ノツトの海面を乗りきり、イドムの國の眞砂ヶ濱に安着
した。

チンリウ姫は無事濱邊に上陸し、龜に向つて感謝の心を歌ふ。

☐ 汝こそは尊き神の化身かな

玉の生命を救ひ給ひし

いつの世か汝が功を忘れまじ

海原守る神とあがめて

あぢ氣なき吾身をここに送り來し

汝は生命の親なりにけり☐

斯く歌ひ終るや、龜は二三回頷きながら水中にズボリと沈み、跡白浪となり
ける。

この地點は月光山の峰傳ひ、遠く西方に延長したる丘陵近き森林なりけるが、

姫はイドムの國とは略察すれども、現在父母の隠生せる月光山の麓の森林とは夢にも知らず、不案内のまま雨露をしのぎ、木の實を探らむと森林深く忍び入りける。

(昭和九・八・一五 舊七・六 於水明閣 谷前清子謹録)

第一七章 再生再會〔二〇四四〕

エームス王の妃チンリウ姫は贗物である。其の實は、侍女のセンリウ女がアララギと腹を合せ、エームス王始め數多の重臣どもを籠絡してゐることを覺つた朝月は、宴會の席に於て其の事をほめかしたので、忽ちアララギ、センリウ等の激怒をかひ、即座に重罪に處せられ、海洋萬里の荒浪にただよふ荒島に流された。朝月は、慷慨悲憤のあまり述懐を歌ふ。

潮のひびきは滔々と岩間に木靈し、寄せ來る浪は白馬の鬣を打ちふり、岸邊の

岩石がんせきにかみつことく如ものすさまき物くわうけい凄なりけりじき光景あさづきなりけり。朝月あさづきはこの島しまの王わうじや者ぜん然として貝かひなど
を採集さいしふし、餓うゑを凌しのぎつつ運うんを天てんに任まかせながら縹渺へうべうたる海原うなばらを眺ながめて歌うたふ。

☐ 仰あふげば高たかし久ひさ方の

雲井くもゐの空そらは果はてもなく

青あをに解とけ入いる吾わがみたま

ふくれふくれつきて月つきとなり

又また別わかれては星ほしとなり

極きはみも知しらぬ大宇宙だいうちう

わが物顔ものがほに渡わたりゆく

われは朝月あさづきのかげなれや

波なみを分わけつつ昇のぼりゆく

朝日あさひの光かげに照てらされて

晝ひるは姿すがたをかくせども

夜よるさり來くれば夕ゆふづき月の
光かげはきらきら波なみま間まを照てらし
千ちひろ尋うみの海そこの底そこひには
清きよく澄すみきる夕ゆふづき月つきや
朝あしたの月つきのゆらゆらに
波なみにたゆたふ雄を々をしさよ
伊い佐さ子ごの島しまを後あとにして
千ち重への荒あらなみ浪わた渡わたりつつ
獨まる木きの舟ふねに來きて見みれば
音おとに名な高たかき荒あらしま島しまは
ただ一いっほん本ほんの木きも草くさも
荒あらかぜ風なみ浪なみに吹ふかれつつ
生おふるひまなき岩いはの島しま
堅かき磐は常とき磐はに海わた中なかに

浮かぶも雄々をしこの島根しまね

あさづき朝月はここに流ながされて

せぢん世塵を知らず安々やすやすと

かきはときは堅磐常磐さかに榮ゆなり

あらなみ荒浪如何いかに猛たけるとも

あつ暑さ寒さむさは襲おそふとも

なに何か恐れむ大丈夫ますらをが

やたけこころ彌猛心をくじくべき

ああ面白おもしろや面白おもしろや

この荒島あらしまは廣ひろければ

とは永久とこの住家すみかと定めさだめつつ

もも百の魚族うろくづとも友として

りうぐう龍宮りうぐうの王わうとうたはれむ

さはさりながらあはれなるかな

チンリウ姫ひめは曲者くせものの

奸計たくみの罟わなに陥おちいりて

似にても似につかぬ替玉かへだまの

センリウ侍女じぢよと強しひられて

思おもはぬ罪つみをかぶせられ

隠かくれの島しまに流ながされし

其その憐あはれさの身みに迫せまり

木田山城きたやまじやうに開ひらかれし

祝賀しゆくがの宴えんに出席しゆつせきし

うち出いだしたる言靈ことたまの

激はげしき矢玉やだまに怖おぢおそれ

心こころきたなきアララギは

わが言ことの葉はをさへぎりつ

疑惑ぎわくの罪つみと強しひながら

戀こひに狂くるへる若王わかぎみや

娘むすめのセンリウ女ぢよとともに

わが身みを憎にくめる其そのあまり

高たか手てや小こ手てにいましめて

この荒島あらしまに流ながしたり

われは大ま丈夫す覺悟かくごはすれど

隙間すきまの風かぜにもあてられず

宮中きうちう深ふかく育そだちたる

チンリウ姫ひめを魔まの島しまに

流ながしたるこそ憎にくらしき

さはさりながら魔まの島しまの

名なを負おふ隠かくの島しまヶ根がねは

夕ゆふさり來くれば荒浪あらなみに

全島姿ぜんたうすがたをかくすなる

危険きけんの島しまに捨すてたるは
姫ひめが生命いのちをとらむ爲ための
アララギどもの謀計はかりごと
思おもへば思おもへば憎にくらしや
今いまとなりては
泣なけど悔くやめど姫君ひめぎみの
姿すがたは最早もはや荒浪あらのみの
腹はらに呑のまれて影かげもなし
神かみの恵めぐみの幸さちはひて
若もしも此この世よに在おはすならば
水底みそこを潜くぐりてこの島しまに
來きたらせ給たまへ惟神かむながら
天地てんちの神かみに願ねぎまつる
ああされど

不思議なるかな

昨夜の夢にチンリウ姫は

龜の背中に乗せられて

とある磯邊にたどりつき

茂樹の森にささやけき

庵を造りて住み給ふ

夢か現か幻か

心にかかるは姫の上

完全に委曲に御在處を

知らむと思へど是非もなし

ああ惟神々々

恩頼を賜へかし。

天てん青あをく海うなばら原あを青あをきこの島しまに

姫ひめをしの俣あをびて青あを息いきつくも

伊い佐さ子こ島しま遠とほく離さかれる荒あらしま島しまに

一ひとり人り住すむ身みは淋さびしかりけり

さりながら世よの憂うさごとを聞きかずして

一ひとり人たの樂たのしき今日けふのわれなり

木き田た山やまの城しろは間まもなく滅ほろぶべし

アララギ母おやこ子の暴ほう虐ぎやくの手に

チンリウ姫ひめ隠かくの島しまに流ながされて

水泡みなわと消きえしは果は敢かなかりけり

さりながら姫ひめは生いのち命ちを保たもたすと

われは聞きけるも夢ゆめの枕まくらに

悪あく人にんの榮さかえて善ぜん人にんの亡ほろぶべき

例ためしは神かみよ代よにあらじとぞ思おもふ

憎^{にく}みても餘^{あま}りありけりアララギの

いやしき心^{こころ}に出^いでし曲業^{まがわざ}」

斯^かく歌^{うた}ふ折^{をり}しも、チンリウ姫^{ひめ}を眞砂^{まさご}の濱^{はま}に送^{おく}りとどけたる巨大^{きよだい}なる神龜^{しんき}は、波^{なみ}打ち際^{ぎは}にボカリと浮^うき上^あり、頸^{くび}を上下^{じやうげ}に振^ふりながら朝月^{あさづき}を招^{まね}くものの如^{ごと}く見^みえける。朝月^{あさづき}はこれぞ全^まく海^{うみ}の守護^{しゆご}神琴平^{ことひら}別^{わけ}命^{のみこと}の化身^{けしん}ぞと勇^{いさ}み喜^{よろこ}び、直^{ただち}に丘^{をか}を下^{くだ}りて汀^{みぎはへ}邊^{はし}に走^{はし}りつき、

有^{あり}難^{がた}し琴平^{ことひら}別^{わけ}の御迎^{おんむか}へ

伊佐子^{いさご}の島^{しま}に送^{おく}らせ給^{たま}へ

と、合掌^{がつしやう}しながら神龜^{しんき}の背^せに飛^とび乗^のれば、龜^{かめ}は波上^{はじやう}に大^{だい}なる頭^{あたま}をもたげ、南^{みなみ}へ南^{みなみ}へと波^{なみ}をかきわけながら、まつしぐらに進^{すす}みゆく。

朝月^{あさづき}は歌^{うた}ふ。

有難しありがた天地てんちの神かみの御恵みめぐみに

琴平別ことひらわけは現あれましにけり

一本いつぽんの草くさも木きもなき荒島あらしまに

われは淋さびしく暮くらし居ゐたるを

琴平別ことひらわけ神かみの化身けしんに救すくはれて

千重ちへの波路なみぢを渡わたらふ今日けふかな

大榮おほさかの山やまは雲間くもまに霞かすみつつ

天津日あまつひのかげ朧おぼろに見みゆるも

北きたを吹ふく風かぜに送おくられわれは今いま

神龜しんきの背せなに乘のりて歸かへるも

チンリウ姫ひめもわれと同おなじくこの龜かめに

救すくはれにけむ聞きかまほしさよ

斯かく歌うたひつつ、龜かめのゆくままに任まかせ居ゐたりしが翌日あくるひの曉あかつき頃ころ、
空そらに朝月あさづき白しろけて、

海風徐に袖を吹く頃、眞砂の濱邊に着きにける。

朝月は、龜の背より汀に飛び下り、神龜に向つて合掌しながら歌ふ。

波荒き孤島になげきし朝月も

汝の功に救はれにけり

何時までも汝の恵みは忘れまじ

わが歎かひはまたく晴れけり

東北の空に霞める高山は

大榮山かなつかしき山

この聖所イドムの國の濱ならむ

大榮山の北に見ゆれば

ここに朝月は龜に感謝し、別れを告げて汀の眞砂をザクザクふみならしながら、遙か前方にこんもりと古木の茂りたる茂樹の森を目當に辿り行く。

朝あさ月つきは只ただ一人ひとり、茂しげ樹きの森もりかげをあてどもなく辿たどり行ゆくにぞ、目め立だちて太ふとき槻つきの
根ね元もとに萱かやを以もつて結むすびたる矮わい屋をくをみとめ、足あし音おとを忍しのばせ近ちかより、中なかの樣やう子すを窺うかがひ居み
たりける。矮わい屋をくの中なかよりは微かすかなる女をんなのうたふ聲こゑ響ひびき來きたる。

わが國くには敵てきに奪うばはれわが父ふ母ぼは

行ゆく方へし知しれぬぞ悲かなしかりけり

エールスの醜しこの司つかさにわが父ちちは

城しろを奪うばはれかくれましけむ

妾わらは亦またか弱よわき身みもて敵てき軍ぐんに

とらはれ遠とほく送おくられにけり

水みづ濁にごる木き田た山やま城じやうにとらへられ

なげきの月つき日ひを泣なき暮くらしたり

二十にじふ年ねんわれに仕つかへしアララギは

惡あく魔まとなりてわれに反そむきぬ

如何いかならむ罪つみ犯をかせしか知らねども

今日けふの吾身わがみは淋さびしかりけり

玉たまの緒をの生命いのちとらむとアララギは

われを隠かくれの島しまに送おくりし

荒浪あらなみに呑のまれむとする折をりもあれ

琴平ことひら別に救すくはれしはや

大榮山おほさかやま遙はるかに高たかく北きたの空そらに

霞かすむを見みればわが國くになるらむ

さりながらイドムの國くにも今いまははや

サールの配下はいかとなれる悲かなしさ

隱島かくれしま漸やうく逃のがれわれは今いま

茂樹しげきの森もりにかくれ泣なくかも

父母ちちははに一度會いちどあはまく欲ほりすれど

今日けふの吾身わがみは詮術せんすべもなき

萬斛ばんこくの涙湛なみだたへてわれは今いま

泣なくより外ほかに術すべなかりけり

いたづらに森もりの木蔭こかげに朽くちむかと

思おもへば悲かなしき吾身わがみなりけり」

朝月あさづきはこの歌うたを聞きき、正まさしく隱島かくれしまに流ながされしチンリウ姫ひめなることを覺さとり、雀躍こをど
りしながら聲高こゑたからかに歌うたふ。

「われこそは木田山城きたやまじやうに仕つかへたる

朝月司あさづきつかさのなれの果はてぞや

この家いへに忍しのばせ給たまふは正まさしくも

チンリウ姫ひめと覺さとらひにけり

アララギのきたなき心こころの謀計たくらみに

かくなりませし姫ひめを悲かなしむ

われも亦またチンリウ姫ひめを贖物にせものと

言こと擧あげなしてやらはれにけり

アララギヤセンリウ姫ひめの憤いきどほりに

われ荒島あらしまに流ながされしはや

姫君ひめぎみを案あんじわづらひ荒島あらしまゆ

隠かくれの島しまヶ根ね遙はるかに仰あふぎぬ

琴平ことひら別神わけかみの化身けしんに送おくられて

われは眞砂まさごの濱はまに着つきぬる
』

中なかよりチンリウ姫ひめの聲こゑとして、

いぶかしや茂樹しげきの森もりに人ひとの聲こゑ

聞きこゆは狐狸こりの仕業しわざなるらめ

わが住家すみか破屋あばらやなれど表戸おもてどは

魔神まがみの爲ためには開ひらかざるべし

朝月あさづきは木田山城きたやまじやうの左守神さもりがみ

此處ここに來きたらむ理由りいうはあらし

いろいろと言葉ことば構かまへてたぶらかす

狐狸こりの謀計たくみの淺あさはかなるも

アララギやセンリウ姫ひめと相共あひともに

われをはかりし朝月あさづきの曲津まが

よしやよし眞まことの朝月あさづきなればとて

われは死しすともまみえざるべし
』

朝月あさづきは悲かなしげに、

思おもひきや茂樹しげきの森もりにたどり來きて

姫ひめの怒いかりの言葉ことば聞きくとは

姫君を陰に日向にかばひつつ

誠盡せし朝月なるよ

やさしげに見ゆるアララギ、センリウの

類と思すが悲しかりけり

姫君をかばひし言葉にたたられて

われ荒島に流されしはや

かくなればサールの國へは歸れまじ

忍びて住まむ茂樹の森に

木田山の城は滅びむアララギの

人もなげなるその振舞ひに

城内の司は四分五裂して

アララギ母子を呪はぬものなし

隣國のイドムを攻めたる酬いにて

サールの國は今に亡びむ

御父おんちちの阿アツミの王きみはやがて今いま
伊い佐さ子ごの島根しまねを領有うしはぎ給たまはむ
朝あさ月づきの清きよき心こころをさとりませ
姫ひめに仕つかふと慕したひ來きしものを

チンリウ姫ひめは歌うたふ。

□
いろいろの汝なが言こと靈たまにわが胸むねの
雲くもは晴はれたりとく入いりませよ
なよ草くさの女をみな一人ひとりのこの庵いほに
汝なが訪とひ來きしも不ふ思議しぎなるかな
汝なれも亦また琴こと平ひら別にわけ救すくはれしか
われも神龜しんきに送おくられ來きたりぬ
□

斯く歌ひながら、柴の戸を中よりパツと押開けば、朝月は大地にひれ伏し、ハラハラと落涙しながら、
「姫様、御懐かしう御座います。私は貴女の御身の上を氣の毒に存じ、大祝賀會の席上に於て、今のチンリウ姫様は贗物にして、アララギの奸計より斯くなれるものとの諷刺を歌ひましたため、アララギ母子及びエームス王の激怒にふれ、奸佞邪智の心きたなき司どもに審判かれ、遂に海中の荒島という無人島に流され、孤獨を託ちつつあるところへ、琴平別の神、龜と化して現はれ給ひ、たつた今先、眞砂の濱邊に私を送りとどけて下さつたのです。必ずや姫様も隱島より琴平別の神に救はれて、此の邊りにおしのびの事と察知致しまして、森林を彷徨ふうち、フツとこの御住居が目にとまり、足音をしのばせ近より、屋内の様子を窺へば、かすかに聞ゆる御歌のふしに、てつきり姫様と打ち喜び、畏れながら屋外に立ち、歌もて御尋ね致した次第で御座います。何卒姫様の御仁慈によりまして、私を僕として御使ひ下さらうならば、有難い仕合せと存じます。私は再びサールの國に足を踏み入れる考へは御座いませぬ。この島も御父の領分とは言ひながら、

サールの國王エールスが暴威を振ふ領域内で御座いますれば、彼等が手下の奴輩に見つかつては危険で御座いますから、この森林を幸ひ、姫様の御側に仕へて時待つ事と致しませう。一時は御父王は城を捨てて退却されましたなれど、賢明なるアヅミ王様は必ず軍備を整へ、捲土重來して、イドム城を回復し、善政を敷き給ふものと、私は今より期待いたして居ります。次にサールの國は最早や滅亡の徴現はれ居りますれば、伊佐子の島は全部アヅミ王様の治下に復する事と存じます。姫様、御安心なさいませ」

と、いろいろと言葉を盡して、朝月はチンリウ姫を慰めながら、暫時この森林を住家として時を待ちぬたりける。

（昭和九・八・一五 舊七・六 於水明閣 林彌生謹録）

第一八章

蠓蝨の精（二〇四五）

主人しゅじんのチンリウ姫ひめを計略けいりやくを以て退しりぞけ、自みづからチンリウ姫ひめと名告なりてエームス王わうの妃きさきとなり、母ははのアラギと共に權勢けんせい竝ならぶものなく、數多あまたの群臣ぐんしんの上うへに君臨くんりんして、意氣揚いきやうやう々たりしチンリウ姫ひめは、木田山城きたやまじやう内の森林しんりんを徒然つれづれのまま、彼方あなた此方こなたに咲さき匂にほふ花はなを賞ほめつつ逍遙せうえうして居ゐる。

□ 前さきや後あと右みぎも左ひだりも芳かんばしき

花はなに包つつまれ吾われは遊あそぶも

回天くわいてんの望のぞみを遂とげて吾われは今いま

木田山城きたやまじやうの花はなと匂にほふも

百千ももちばな花さ咲さけど匂にほへど如何いかにして

わが花はなの香かに及およぶべきかは

燕子かきつばた花はなの紫水むらさきづの面もに

寫うつるを見みれば夏なつさりにけり

木田山きたやまの城しろは廣ひろけし山水さんすゐの

景色あつめて清き眞秀良場

此の城の花と世人に讃へられ

吾は楽しく世に生くるかも

天地は残らず吾手に入りしかと

思へば樂しき吾身なるかも

エールスの王はイドムの國にあり

われ若王の妃となりぬ

何ものの制縛もなく此の城に

時じくかをると思へば樂し

國津神のあらむ限りを統べ治め

王に仕へて御代を照らさむ

わが母は賢しくませばチンリウ姫を

わが身となして退ひましけり

心地よやチンリウ姫は魔の島に

漂ただよひながら亡ほろび失うせけむ

かくならば世よに恐おそるべきものはなし

エームス王わうを力ちからとたのためば

エームス王わうわれに戀こふるを幸さいはひに

如何いかなる事ことも遂とげざるはなし

朝風あさかぜにゆるるる百ゆり合の花見はなみれば

清すがしきわれの姿すがたなるかな

赤あかに白しろに匂におへる花はなも世よの人ひとは

あふひの花はなと稱たたへ來きにけり

チンリウ姫ひめの贗にせにはあれど吾われもまた

あふひに匂におふ花はなにあらずや

雪ゆきといふ字じも黒くろ々と墨すみで書かく

例ためしある世よぞ何なにを恐おそれむ

贗物にせものと看破みやぶりたりし朝月あさづきは

王きみの威勢あせいに退やはれにけり

朝月あさづきは千里せんりの海うみの島しまヶ根がねに

流ながされ生命いのち亡うせにけむかも

妨さまたぐる何なにものもなき吾われなれば

心こころのままに世よにふれまはむ

水濁みづにごる木田山城きたやまじやうの司等つかさは

吾言靈わがことたまに苦くもなくまつるふ

吾威勢わがあせい日に日ひに高たかまりゆく見みれば

智慧ちゑの力ちからの現あらはれなるべし

イドム城じやうに長ながく仕つかへしわが王きみの

行方ゆくへはいづく最早もはや影かげなし

わが王きみの滅ほろびによりて今いまここに

木田山城きたやまじやうの花はなと匂におふも

よき事ことに曲事まがこといつき曲事まがことに

よき事こといつくは吾われの身みにしる

かくならば世よに恐おそるべきものはなし

エームス王わうを操あやつりゆきなば

斯かく歌うたひながら、人ひともなげに逍遙せうえうして居ある。後うしろの方ほうより容姿ようし端麗たんれいなる美男子びだんし、
すつくと現あらはれ、

姫様ひめさまのみあと慕したひて來きたりけり

エームス王わうの吾われは從弟いとこよ

御姿みすがたの氣高けだかさ美々びびしさに見惚みとれつつ

心こころの駒こまに引ひかれ來こしはや

汝なが姿すがたふと見初みそめてゆ朝夕あさゆふを

うつつともなく過すぎにけらしな

傍かたはらに人影ひとかげなければわが思おもひ

君の御前に句はせ奉らむ

此の聲に匱のチンリウ姫は驚き振り返れば、エームス王に幾倍とも知れぬ美男子、チンリウ姫は戀の惡魔にとらはれ、恍惚として男の側に進み寄り、右手をしつかと握りながら、頬を赤らめて歌ふ。

思ひきやかく麗はしき艶人の

此の國原におはしますとは

エームスの王に仕へし吾なれば

汝に答ふる言の葉もなし

さりながら汝が愛しき心根を

われ忝なみて胸にしるさむ

かかる世に此のうるはしき大丈夫の

いますとは夢にも知らざりにけり

ままならば君と千歳を契りつつ
木田山城に住みたく思ふ

美男は歌ふ。

吾こそはエームス王の従弟にて

セームスといふ軽きものなり

御心に叶ひ奉らば今日よりは

人目を忍びて千代を語らむ

われは今エームス王の目を忍び

姫を戀ひつつ此處に來りし

名も位も生命も吾は惜しからじ

君と會ふ夜のありと思へば

チンリウ姫は歌ふ。

懐かしの君に會ひてゆわが胸は
高鳴り止まず面ほてりけり
明日さればこの森林に君と吾と
千代の契りを語らはむかも

セームスは歌ふ。

ありがたき情の言葉聞くにつけ
心の駒の雄猛びやまずも

斯く歌ひつつ、何處へか煙の如く消え失せにける。
チンリウ姫は茫然として佇みながら歌ふ。

□ いぶかしき事ことの限かぎりよ麗うつくしき

戀こひのセームス煙けむりと消きえたり

エームスの王きみにいやまし麗うつくしき

セームスこそはわが生いのち命めいかも
□

斯かく歌うたひながら、しづしづと殿内でんないに歸かへり來きたる。

アララギは玄關げんくわんに迎むかへながら、

□ 汝なれは今いまいづらにありし供人ともびとも

つれずひとり身危みあやふからずや

汝なが姿見すがたみえぬに吾われは驚おどろきて

千々ちぢに心こころを碎くだきたりしよ

明日あすよりは御供みともをつれて出いでませよ

一人歩ひとりあゆみは危あやふかるらむ
□

チンリウ姫は歌ふ。

☐ 百花ももばなの清きよきかをりに誘さそはれて

知らず知らずに一人遊ひとりあそびぬ

水みづをもてめぐれる木田山城きたやまじやうない内に

恐おそるべきもの如何いかであるべき

此この城しろは吾等われらが心こころのままなれば

心安こころやすんじ遊あそぶともよし
☐

の場ばに現あらはれ來きたりて、
斯かく歌うたへる折をりしも、エームス王わうは姫ひめの姿すがたなきに稍やや待まちかまへ氣味きみなりしが、そ

☐ 汝なれは今いま歸かへり來きたるか吾心わがこころ

いたくさやぎてありけるものを

明日よりは侍女を伴ひ遊ぶべし

一人歩みは吾意に叶はじ

チンリウ姫は微笑みながら歌ふ。

吾王の幸を祈ると裏庭に

佇み神言白し居たりき

斯くて其の日は黄昏の闇に包まれ、夫婦睦まじく寢に就きけるが、その翌日は
チンリウ姫の提言として、城内の菖蒲池に舟を浮べ、半日の清遊を試むる事とな
りぬ。

菖蒲池に舟遊びの準備は整ふた。然しながら舟と言つても大木の幹を石鑿を以
てゑぐりたるものなりければ、餘り多くの人の乗るべき餘地なく、エームス王は
じめ、チンリウ姫、アララギ其の他二人の侍女のみなりける。

王は菖蒲池の汀に匂へる紫の花を打ち見やりつつ愉快げに歌ふ。

㊦ 菖蒲咲く此の池水に棹さして

ものいふ花と遊ぶ楽しさ

水底にうつるふ花の紫を

見つつ床しき舟遊びかな

八千尋の深き池底にひそむなる

真鯉、緋鯉も驚きにけむ

此の池に初めて舟を浮べつつ

遊ぶは昔ゆ例なきかな

此の池に魔神の棲むと昔より

傳へ來れど今日の安けさ

アララギの雄々しき女と諸共に

遊ぶ御舟は楽しかりけり

アララギは歌ふ。

㊦ 吾王の言葉の巧みさあきれたり

アララギならでチンリウならずや

年老いし此のアララギは花の香も

はや失せぬればかをらひもなし

エームス王は歌ふ。

㊦ 春匂ふ花もよけれどまた秋の

花のかをりも捨て難く思ふ

五月雨の空晴れにつつ燕子花

菖蒲匂へる清しき今日なり

チンリウの姫の装ひ清ければ

菖蒲もかきつも恥らひ顔なるあやめ はぢ がほ」

チンリウ姫は歌ふ。

「わが王の言葉嬉しやたのもしやきみ ことばうれ

われは生命を捧げて仕へむいのち ささ つか

わが王の手活の花と匂ひつつきみ ていけ はな にお

木田山城の要と仕へむきたやまじやう かなめ つか」

斯く歌ふ折しも、不思議や池水は俄に煮えくり返り、水柱各所に立ち狂亂怒濤か うた をり ふ しぎ いけみづ にはか に 煮えくり 返り、 みづばしら かくしよ た きやうらんどたう
のために獨木舟は忽ち顛覆し、エームス王は眞逆様に水中に落ちたるまま遂に姿まるきぶね たちま てんぶく すいちう お つひ すがた
を現はさざりける。あら

茲に生命からがら、アララギ、チンリウ其の他の侍女は汀邊に這い上り、玉のここ いのち いた た じぢよ みぎはへ は あが たま
生命をつなぎける。いのち

先の日チンリウ姫の前に現はれし、セームスといふ美男は此の池の主にして、
巨大なる蝶螈の精なりけるが、俄に池水を躍らせて舟を顛覆せしめ、王の生命を
奪ひとり、チンリウ姫の夫となりて此の城にはばらむとする計略なりける。

これより不思議やアララギ及び二人の侍女は、生命は助かりたれども、眼眩み
喉塞がりて何一つ見る事を得ず、また語らふ事も得ずなりにける。それ故王の水
中に陥りて溺死したる事も知らずに居たりしなり。

茲に蝶螈の精は、エームス王となりて奥殿に端然と控へ、チンリウ姫を側近く
侍らせ不義の快樂に耽りつつ國政日に月に亂れゆくこそ淺ましかりける。

チンリウ姫は、どこともなくエームス王に似たれども、稍様子ことの異なれるに不
審の眉をひそめながら歌ふ。

エームスの王は池中に陥りて

生命死せしと思ひたりしを

エームスの王と思へどどこやらに

わが腑ふに落ちぬ節ふしのあるかも
先さきの日に吾われと語りし艶人あてびとに
若もしあらずやと疑うたがはれぬる
』

蝶いもりの精せいは歌うたふ。

愚おろかなりチンリウ姫ひめよ吾われこそは

先さきの日ひ會あひしセームスなるぞや

幸さいはひにエームス王わうは滅ほろびたり

いざやこれより汝なれと住すみなむ

歎なげくとも逝ゆきたる人ひとは歸かへらまじ

吾われにいそひて暮くらさせ給たまへ
』

チンリウ姫ひめは歌うたふ。

思おもひきやなれ汝なれはセームス優やさきとこ男こ

わがたましひを蘇よみがへらせり

われもまたエームス王わうにあき居ゐたり

汝なれが姿すがたを見み初そめてしより

汝なれこそは常とこよ世よの夫つまよ戀こひの夫つまよ

生命いのちささ捧ささげて吾われは仕つかへむ

蝶いもり蜥せいの精せいは歌うたふ。

汝なれとても誠まことのチンリウ姫ひめならず

センリウ姫ひめの贗にせだま玉たまなりけむ

吾われもまた誠まことのエームス王わうならず

從いとこ弟このセームス優やさきとこ男こなり

贗にせもの物ものと贗にせもの物もの二人ふたりが此この城しろに

二世にせを契ちぎるも面白おもしろからずや

アララギは眼失まなこしなひ唾おしとなり

わがたくらみを悟さとらであるらし

今日けふよりは汝なれに免めんじてアララギの

病やまひは癒いやし永久とこに救すくはむ
㊦

チンリウ姫ひめは歌うたふ。

㊦
吾母わがははを救すくひ給たまふかありがたし

さすがは吾背わがせの君きみなりにけり

よき事ことのいやつぎつぎに重かさなりて

戀こひしき汝なれにいそひ居ゐるかも

どこまでもエームス王わうとなりすまし

木田山城きたやまじやうに臨のぞませ給たまへよ
㊦

蝮の精は歌ふ。

□ 汝が言葉宜なり吾はどこまでも

エームス王となりて臨まむ

面白き吾世なるかも木田山の

城の主となれる思へば□

斯くして鷹のチンリウ姫と、蝮の精の化身なる鷹のエームス王は、木田山城
内奥深く住み込みて、國政は日に月に亂れ衰へ、遂には收拾すべからざるに至り
たるこそ是非なけれ。

（昭和九・八・一五 舊七・六 於水明閣 白石恵子謹録）

第十九章 惡魔の滅亡〔二〇四六〕

サールの國王エールスは大軍率ゐて、大榮山の嶮を越え、イドムの城に一擧に攻め寄せて、アヅミ王、其の他の重臣共を追ひ散らし、意氣揚々としてイドムの城の主となり、軍師、左守を残り、サールの國を監督せしめむと右守のナーリスに數多のナイトを従へさせ歸國を命じけり。ナーリスは意氣揚々として數百のナイトを従へながら、馬上豊かに歌ふ。

□ サールの國の御主

エールス王に從ひて

數多のナイトを引率し

大榮山を乗り越えて

人魚の里に攻め寄せつ

難なくここを占領し

勢ひあまつてイドム城

數多軍の守りたる

要害堅固の鐵城を

何の苦もなく占領し

アヅミの王を追ひ散らし

風塵全く治まりて

馬の嘶き鬨の聲

松吹く風となりにけり

エールス王は欣然と

イドムの城におはしまし

山河の景色を眺めつつ

御代太平を謳ひまし

汝右守のナリスよ

イドムの國は治まりぬ

汝はこれより數百の

ナイトを従へ堂々と

大榮山おほさかやまを乗のり越こえて
サールの國くににかへれよと
よさし給たまひし畏かしこさよ
王きみの軍いくさの勝かちどき鬨を
みとめて吾われはかへりゆく
駒こまの嘶しななき勇いさましく
蹄ひづめの音おともかつかつと
山路やまぢを分わけて進すすむなり
イドムの國くには漸やうやくに
平定へいていしたれど村肝むらきもの
心こころにかかるはサールなり
サールの國くにに残のこしたる
エームス太子たいしは只ただ一人ひとり
國くにの政せいぢ治ちを握にぎりつつ

心を悩ませ給ふらむ
數多の捕虜は木田山の
城の牢獄に満ちぬらむ
この制裁もなかなか
容易のことにあらざらむ
急げよ進めよナイト等
一日も早く木田山の
お城の馬場に到るまで

斯く歌ひながら、夜を日についで漸く木田川を打渡り、城内に旗鼓堂々とかへり來りしさま威風凜々と四邊を拂ひ、物々しさの限りなりけり。右守のナーリスは、わが出征の後にエームス太子に妃の定まりたる事も知らず、城門を潛り、太子の君の御前に罷り出で、軍状を委に奏上せむとして歌ふ。
エームス王は王座にあらはれ、儼然としてナーリスを打見やりながら、

☐ 親王おやぎみに仕つかへてイドムに向むかひたる
汝なれはナリス司つかさならずや」

この歌うたにナリスはハツと頭かうべを下げさながら、歌うたもて奏上そうじやうする。

☐ 親王おやぎみの功尊いさをたふとく御軍みいくさは

イドムの國くにを打うち亡ほろぼしぬ

寄よせ來きたる數多あまたの敵てきを御軍みいくさは

斬きり拂はらひつつ進すすみたりけり

石垣いしがきを高たかく廻めぐらすイドム城じやうは

攻せむるに難かたく守まもるにやすし

さりながらわが親王おやぎみの功績いさをしに

敵てきはもろくも滅ほろび失うせたり

われこそは右守うもりの神かみと仕つかへつつ

御側おんそば近くちかまもらひにけり

御父おんちちの功績いさをしたか高くイドム城じやうは

平安無事へいあんぶじの今日けふとなりけり

まつぶさにこのありさまを若王わかぎみに

傳つたへむとしてかへり來きたりぬ

左守さもり、軍師ぐんしその他の兵士つはもの殘のこしおき

吾われはナイトを率ひきゐてかへりし

若王わかぎみのまめな御顔おんかほ拜はいしつつ

嬉うれし涙なみだに吾われくれにけり

名なにし負おふイドムの國くにの眞秀良場まほらばは

親王おやぎみ住すますによろしき國くになり

若王わかぎみはサールの國くにに留とどまりて

國くににつくせと宣のらせ給たまひし

親王おやぎみの仰おほせなりせば若王わかぎみも

必ずうけがひ給ふなるべし^{かなじ} ㊦

エームス王は歌ふ^{わう}。

㊦ 待ちわびしわが親王の消息を^ま ^{おやぎみ} ^{せうそく}

つぶさに聞ける今日の嬉しさ^き ^{けふ} ^{うれ}

親王のいまさぬうちに止むを得ず^{おやぎみ} ^や ^え

吾は妻をば娶りたりけり^{われ} ^{つま} ^{めと}

親王は戦の場にましますと^{おやぎみ} ^{いくさ} ^{には}

思ひて一人ことりにけり^{おも} ^{ひとり}

親王の御前よしなに計らへよ^{おやぎみ} ^{みまへ} ^{はか}

わが新妻を娶りたるよし^{にひつま} ^{めと} ㊦

ナーリスは歌ふ^{うた}。

☐ 若王わかぎみの妻つまを娶めとらす目出度めでたさを

如何いかで親王おやぎみさまたげ給たまはむ

この國くにも若王わかぎみの御稜威みづに安々やすやすと

治をさまる思おもへば樂たのしかりけり

今日けふよりは右守うもりの吾われはこの國くにの

左守さもりとなりて仕つかへまつらむ

父王ちちぎみの依よさし言葉ことばにしたがひて

われは左守さもりと仕つかへまつるも

チンリウ姫ひめは始はじめて右守うもりのナリスを見みたるとて、驚おどろきの色いろを見みせながら、さ
すが曲者くせもの、平然へいぜんとして、そしらぬ態さまを装よそほひ、

☐ われこそはエームス王わうの妃きぞや

汝なれは左守さもりかよくもかへりし

アヅミ、ムラジ二人が仲に生れたる
われはチンリウ姫にぞありける』

ナールスは、

□ ありがたしサールの國に臨みます

妃の君の雄々しき御心

今日よりは赤き心を捧げつつ

若王と妃に仕へ奉らむ』

チンリウ姫は歌ふ。

□ ナールスの左守の言葉聞くにつけ

わが魂の光りがよふ

わが王の政治をたすけ今日よりは

國のことごと眼くばれよ

治まれる國にはあれど彼方此方に

波風立つと聞くが忌々しき

汝が歸り久しく待ちぬ今日こそは

盲龜の浮木にあへるが如し

斯かるところへ乳母のアララギは、さも横柄な面がまへにて出で來り、

吾こそはチンリウ姫に仕へたる

乳母アララギよ、ナリスの君

陰になり日向になりて若王の

御身を守るわが身なるぞや

若王の心をくみて今日よりは

われは汝なんぢにこと計はかるべし
』

左守さもりのナリスは、

□ 不思議ふしぎなることを聞きくかな汝なれこそは

チンリウ姫ひめの乳母うばにあらずや

汝なが如ごとき女をみなに政治せいぢかたらふも

何なんの詮せんなし退しりぞきて居をれ

いやしくも左守さもり司つかさの吾われなれば

汝なんぢの言葉ことば聞きくに及およばじ
』

チンリウ姫ひめは歌うたふ。

□ ナリスの言葉ことばもうべよさりながら

アララギの言葉なほざりにすな

アララギはサールの國の柱ぞや

汝も共々國に盡せよ

アララギは女なれども男に勝り

さかしき雄々しき益良女なるぞや

ナーリスは歌ふ。

妃の君の御言葉うべよと思へども

女ことさき立つは悪しけむ

アララギは憤然として歌ふ。

若王の妃をすすめしアララギを

さげすむ左守は國の仇なり
何事もアララギ吾の言の葉に
したがはずして治まるべきかは

エームス王は歌ふ。

アララギの雄々しきさかしき魂は
左守といへども及ばざるべし

左守は憤然として、

左守吾は鄙に退き奉るべし
いやしきアララギ用ひ給はば

と歌ひつつ足早に御前を退出し、何處ともなく消え失せにける。

斯かるところへ山嶽も崩るばかりの矢叫びの聲、鬨の聲、城下に轟き渡り、
數多の暴徒は手に手に得物を携へ、本城目がけて阿修羅王の狂ひたる如く攻め寄
せ来る。その勢ひに城中は戦場の如く、到底寡を以て衆に敵し難しと、鷹のエー
ムス王はチンリウ姫を小脇に抱へ、菖蒲が池にざんぶとばかり飛び込み、二人の
姿は水泡となりて消え失せにける。

斯かる所へ、暴徒の中心人物たる夕月は弓に矢をつがへながら、殿中深く入り
来り、王の居間に進みけるが、二人の影の見えざるにぞ、再び引き返し玄關口に
来る折しも、髪振り亂し、血相變へてアララギは馳せ来り、大聲にて、

「やあ、その方は夕月にあらざるか、不届千萬な、恐れ多くもこの城内に群衆を
おびき寄せ、クーデターを謀らむとは不届千萬なるやり方、罪は萬死に値すべし、
退れ退れ」

と呼ばはるにぞ、夕月は弓に矢をつがへながら、儼然として答ふ。
「奸佞邪智の曲者、若王の心にとり入り、眞正のチンリウ姫様を吾子といたし、

大罪を負はせて遠島の刑に處し、生みの吾子をチンリウ姫様と稱し、若王様の御目をくらしませ、暴政をふるひ、國津神を塗炭の苦しみに墮したるは皆汝がなす業、最早今日となりては天命逃れぬところ、覺悟いたして自害いたすか、さなくば此の方が弓矢の鏑となるか、覺悟はどうだ、返答を聞かむ。

と、攻め寄せれば、アララギは慌てふためき、逃げ出さむとするにぞ、夕月は弓を満月にしぼり、發止と放つ。剛力の征矢に射抜かれて、アララギはもろくも身失せにける。

これより城内は統制機關なく、左守のナリスも何處へ行きしか皆目分らず、木田山城はさながら惡魔の跳梁に任せけるこそ是非なけれ。

（昭和九・八・一五 舊七・六 於水明閣 内崎照代謹録）

第二〇章 悔悟の花〔二〇四七〕

贗にせのエームス王わうや、贗にせのチンリウ姫ひめを始め、乳母うばアララギに捨臺すてぜりふ詞ことばを残のこし城内じやうないを立ち出いでたる左守さもり司つかさのナーリスは、群衆ぐんしゆうの犇ひしめき立たてる大混亂だいこんらんの巷ちまたに數百すうひやくの騎士ナイトを従したがへ、隊伍たいご整然せいぜんとして現あらはれ來きたり、十字路じふじろに立たちて、聲高こゑたからかに歌うたふ。

㊦ サールくの國くにの國津神くにつかみ

木田山城きたやまじやうの人々ひとびとよ

鎮しづまり給たまへ吾われこそは

イドムの國くにに攻め寄よせて

勝鬨かちどきあげしナーリスよ

今いまは左守さもりの神かみとなり

木田山城きたやまじやうに歸かへりしが

エームス王わうは惡神あくがみに

生命いのち奪うばはれ怪あやしかる

贗にせのエームス君くん臨りんし

悪逆無道のアララギが

娘が妃となりすまし

暴威を振るひ居たりしが

愛國志士の團體に

攻め立てられし悪魔等は

忽ち煙と消えにけり

かくなる上は人々よ

最早騒ぐに及ぶまじ

サールの國を永久に

平安無事に守りつつ

各業に安んじて

其の日の生活を樂しめよ

吾は之より城内に

騎士を率ゐて立歸り

亂れ果てたる秩序をば
全くとくに立て直し
善政を布かむ覺悟なり
國津神等國人よ
心を安んじ給ふべし
鎮まり給へ諸人よ
其の他百の國津神
一先づ鉾を納めませ
エールス王は遙々と
イドムの國を言向けて
時めき給ふ功績を
汝等國人恐れずや
エールス王が軍隊を
數多引連れ此の國に

再びふたたび歸かへりますならば
汝なれが生活くらしは彌益いやすも
安やすく樂たのしくありぬべし
一いちじ時に鎮しづまれ疾とく早はやく
吾われは左守さもりのナリスよ
眞まことの惡魔あくまは亡ほろびたり
平へいち地に波なみを起おこすべき
理りいう由なは無なからむ速すみかに
元もとの如ごとくに鎮しづまれよ
後あとは吾われ々われ汝なんぢ等らが
望のぞみを詳つぶさ細きこに聞きこえ上あげ
其その目も的くてきを達たつすべし
□

斯かく歌うたふ折をりしも、向むかふの方ほうより群衆ぐんしゅうに押おされながら、
馬ば上じやうゆたかに進すすみ來きたる勇ゆう

士は、音に名高き夕月なりけり。

夕月は歌ふ。

☞ 悪魔の晝夜にはびこりし

木田山城は鎮まりぬ

吾等の率ゆる大丈夫の

御國を思ふ眞心は

天と地とに通じけむ

暴逆無道のアララギも

奸佞邪智なるセンリウも

蠖螾の精と聞えたる

鷹のエームス王までも

今は全く亡びたり

もう此の上は吾々は

左守さもりの神かみを力ちからとし
亂みだれ果はてたる國原くにはらを
清きよめ澄すまして元もとの如ごと
至し治ち太たい平へいの世よとなさむ
ああ惟かむ神ながら々かむ々ながら
天てん地ちの神かみの御み惠めぐみに
國くにに仇あだなす曲まが神かみは
全まく影かげを隱かくしけり
汝なれ等ら心こころを安やすんぜよ
サさーールるの國くには生うま
亡ほろび行ゆくなる國原くにはらは
汝なれ等ら群衆ぐんしゅうの眞心まごころに
蘇よりみがたる嬉うれしさよ
いいざ是これよりは國人くにびとよ

ナールス左守を信賴し

一切萬事を委ねつつ

心平穩に引けよかし

ああ惟神々々

神の御稜威の御前に

感謝を捧げ奉る

斯くて左守と夕月は十字街頭に大衆を率ゐたるままで邂逅し、互に暴動の無事
治まりしを祝し合ひつつ、夕月は先づ歌ふ。

常暗の雲は晴れにつ久方の

月日は清く輝き渡れり

汝こそは左守の神よ亂れたる

此の世の纏れを解かせ給へり

曲神は残らず亡び失せにけり
いざ是よりは君に頼らむ

ナーリスは歌ふ。

遙々とイドムの國より歸り來し

間もあらずに此の騒ぎみし

夕月の君の眞心力とし

吾は仕へむ木田山城に

これより左守のナーリスは、愛國團體の隊長夕月と共に騎士に守られ、城内深く浸入し、一切萬事の後片附をなし、重臣等を一間に集めて國亂鎮定の祝賀會を催しける。重なる參會者はナーリスを初め夕月、瀧津瀬、山風、青山、紫、玉山等の數十人の重臣なりける。

青山は歌ふ。

☐ 天地の神の御稜威と左守司

夕月司に治まりしはや

刈菰の亂れ果てたる國原も

君の力に治まりにけり

國津神國人等は惡政に

苦しめられて喘ぎ居しはや

かくならば思ふことなしサールの國は

いや益々に榮え行くらむ

紫は歌ふ。

☐ 長き日を鄙に潛みて國の狀態

吾^{われ}は細^{こま}々^ま調^{しら}査^らべ來^きにけり

只^{ただ}ならぬ大^{だい}事^じ起^{おこ}ると常^{つね}々^{づね}に

忠^{ちゅう}告^{こく}せしも聞^きかれざりけり

城^{じやう}内^{ない}に數^{あまた}多^たの曲^{まが}津^つ潛^{ひそ}み居^ゐて

益^{ます}々^{ます}國^{くに}は亂^{みだ}れ果^はてけり

怪^{あや}しかる女^をア^あラ^らギ^ぎ霸^はをと^となへ

木^き田^た山^{やま}城^{じやう}は闇^{やみ}となりける

紫^{むら}の雲^もは御^み空^{そら}に靡^{なび}けども

中^{なか}空^{ぞら}の雲^{くも}黒^{くろ}々^{くろ}覆^{おほ}ひし

行^{ゆく}先^{さき}は如^い何^{かが}ならむとわづらひし

心^{こころ}遣^{つか}ひも夢^{ゆめ}となりしか

エールス^{きみ}の王^みの戦^{いくさ}に出^いでしより

一^{ひと}入^{しほ}サー^くルの國^{くに}は亂^{みだ}れし

玉山は歌ふ。
たまやま うた

イドムより怪しき女入り來り
いどむより あや をみない きた

サールの國は亂されにけり
さールの くに は みだ

捕虜として捕へ歸りし魔の女に
ほりよ として とら へかへ ま をみな

木田山城は傾きしはや
きたやまじやう かたむ

今日となりて吾等の心安まりぬ
けふ われら こころやす

亡びむとする國のいのちを
ほろ くに のい

如何にして亡びむ國を生かさむと
いか ぼろ くに をい

朝夕心を碎きけるかな
あさゆふこころ くだ

山風は歌ふ。
やまかぜ うた

エームスの吾若王の御心を
わがわかぎみ みこころ

蕩とろかせ奉まつりし魔まの女をみなかな

エームスの若わか王ぎみ魔ま性しやうに謀たばかられ

生命いのち果敢はかなくならせ給たまひぬ

城じやう内ないの菖蒲あやめの池いけの主ぬしといふ

蠓いもりは王きみを失うしなひしはや

これよりは蠓いもりの精せいを言こと向むけて

國くにの災わざはひ清きよく拂はらはせよ㊦

瀧津瀬たきつせは歌うたふ。

木田川きたがはの流ながれはいたく濁にごりたり

魔ま性しやうの女をみなを捕とらへ來きしより

斯かくの如ごと安やすく治をさまりし有あり様さまを

イドムの王きみに知しらせたきかな

吾王はイドムの城を亡ぼして
功を永久に立てさせ給へり
治まりし國の姿をイドムなる
王に見せなば喜び給はむ

夕月は歌ふ。

木田城に吾は久しく仕へつつ
亂れ行く世を歎かひて居し

アララギの木田山城に入りしより
人の心は騒ぎ初めたり

アララギを斬つて捨てむと幾度か
思へど詮なく忍び居たりき

天の時漸く到り群衆を

率^{ひき}みて吾^{われ}は曲津^{まが}を討^うちたり

神々^{かみがみ}の恵^{めぐ}みに吾^{われ}は守^{まも}られて

日頃^{ひしほ}の望^{のぞ}み遂^とげし嬉^{うれ}しさ

折^{をり}も折^{をり}左守^{さもり}の司^{つかさ}歸^{かへ}りますと

聞^ききてゆ吾^{われ}は勇^{いさ}み立^たちたり

人^{ひと}の和^わを得^えたる軍^{いくさ}は何處^{どこ}までも

亡^{ほろ}ぶ事^{こと}なく勝^かち終^{おほ}せたり

城^{じやうない}内^{ない}を騒^{さわ}がせ奉^{まつ}りし吾^{わが}罪^{つみ}を

身^みに引^ひき受^うけて鄙^{ひな}に下^{くだ}らむ

左守^{さもり}の司^{つかさ}ナリスは歌^{うた}ふ。

㊦ 國^{くに}人^{びと}の清^{きよ}き心^{こころ}の集^{あつ}まりに

曲^{まが}は影^{かげ}なく亡^{ほろ}び失^うせたり

刈菰の亂れ漸く鎮まりて

神の御前に祝言宣るも

エールスの王の言葉に従ひて

急ぎ歸れば國亂れ居り

今暫し歸國後る事あらば

サールの國は自滅し居るらむ

斯く歌へる折もあれ、數千の騎士を率ゐて逃げ歸りたる副將チンリンは奥殿深く進み來り、左守の神のナーリスに向ひ、擧手の禮を捧げながら歌ふ。

エールスの王悲しくも歸幽れましぬ

サツクス姫も身失せ給ひぬ

チクターの左守を始めエーマンの

軍師も共に滅び失せたり

アヅミ王の勢強く盛り返し
吾等が味方は脆くも破れぬ
かくならばイドムの國に用なしと
騎士を率ゐて急ぎ歸りし

此の報告に左守を始め夕月其他の面々は、
顔色をサツと變へ、茫然として暫
し無言の幕を續け居たりける。
ナ―リスは愕然として歌ふ。

思ひきや武勇の聞え高かりし
吾等の王は歸幽れ給ふか
サツクスの妃の君も身うせしと
聞くにつけても悲しさに堪へず
左守まで軍師の君まで身罷りしは

如何なる事か聞かまほしけれ
漸くにサールの國の治まりを
喜ぶ間もなく此の便り聞くも

チンリンは歌ふ。

何故か譯は知らねど吾王は
神の譴責にあひ給ひけむ
人々の語るを聞けば主の神の
皆いましめと定めあるらし
兔に角に人の國をば奪ひたる
報いなりせば詮術なけむ

左守は歌ふ。

□ 恐ろしき事を聞くかな他の國を
奪はむとする戦の有様
エールスの王の血統は亡びたり
サールの國を如何に守らむ□

夕月は憮然として歌ふ。

□ 兔にもあれ角にもあれや人はただ
誠の道をあゆむべきなり
日月の威勢輝く吾王も
亡ぶる時のある世なるかな
今日よりは誠一つを力とし
サールの國を安く治めむ□

瀧津瀬は歌ふ。

欲よくといふ醜しこの曲津まがつに誘いざなはれ

王きみは御國みくにを失うしなひ給たまひし

此この廣ひろきサールの國くににましまさば

斯かかる歎なげきはあらざらましを

吾わが力ちから頼たのみ過すぎたる報むくいにて

王きみは生命いのちを失うしなひ給たまひぬ

全滅ぜんめつの憂目うきめにあひしエールスの

王きみの行末ゆくすゑ淋さびしかりけり

愛善あいぜんの誠まことなければ人ひとの身みは

身みも魂たましひも終つひに亡ほろびむ

山風やまかぜは歌うたふ。

嶮けはしかる大おほ榮山さかやまを乗り越こえて

生命いのちを捨すてし王きみを悲かなしむ

吾王わがきみはイドムの城しろに攻せめ寄よせて

尊たふとき生命いのちを捨すてさせ給たまへり

歎なげきても及およばじものと思おもへども

なほ歎なげかるる今宵こよひなりけり

何事なにことも誠まこと一つに進すすみなば

世よに過あやまちはあらしと思おもふ

左守さもりは歌うたふ。

かくならば最早もはや是非ぜひなし吾々われわれは

誠まことの道みちを進すすむのみなる

エールスの王きみは吾等われらにいましめを

永遠とほに残のこして去さりましにけり

天地あめつちの神かみを恐おそれみ謹つつしみて

誠まことの道みちに進すすみ行ゆくべし

斯かく歌うたひ終をはり左守さもりのナールスは、城じやうない内いつぱん一般いぱんにエールス王わう一族いちぞくの不ふ幸かうを發はつ表べうし、
國民こくみんの代だい表へう者しやを集あつめて盛せい大だいなる葬はふりの式しきを執とり行おこなひ、木田山きたやまの城じやうない内いに莊さう嚴ごんなる主すの
神かみの御み舍あらかを造ざう營えいし、朝あさな夕ゆふなに正ただしき政せい治ぢを行おこなはせ給たまへと祈きぐ願わん怠こたりなかりける。

（昭和九・八・一五 舊七・六 於水明閣 森良仁謹録）

）

靈界物語 第八一卷 天祥地瑞 申の卷

終り